



# 出産ケア政策会議 活動報告書

2020年度 - 第4期 -  
2020年5月 ▶ 2021年4月





ママになるための根っこを、いっしょに育てる。

「ママのね、」と将来自分の子どもに伝えたいような  
出産体験を助産師さんと妊産婦さんでつくっていく、という想いを込めています。

そのためには、助産師さんと妊産婦さんが、ママがママになるための根本の部分を  
いっしょに育てていくことが大切です。このプロジェクトでは、ママがママになるために  
伴走してくれる助産師さんの大切さを広めていきます。

**序章 わたしたちについて****02**

- はじめに 02
- LMC 制度とは 03
- 提言 04
- 出産ケア政策会議：4年間の活動概要 05

**1章 おもな活動****06**

- My 助産師育成プログラムの開催 06
- 「My 助産師育成プログラム」研修会における「出産体験談セッション」 18
- ママのねオンライン勉強会報告 20
- 「子育てアンケート調査」プレスリリース 27
- ロビーチーム 活動報告 31
- 「こども庁」創設に向けた国会議員へのロビイング報告 33
- Web 制作チーム Web サイト作成に向けて 34
- 第 35 回日本助産学会学術集会シンポジウム登壇 37
  - ・ 助産師の源流をたどる ―継続ケアの本質― ▶ 京都大学大学院 ドーリング景子 38
  - ・ 助産師主導の継続ケアのさまざまな在り方  
～自宅出産・オープンシステム出産・産院音々～ ▶ 出張さんばステーション日野春●松浦助産院 松浦照子 43

**2章 メンバーによる活動****50**

- 【北海道】北の国から ～お産を語る会で「つながる」～ ▶ でいだらぼっち北海道代表 高橋宏美 51
- 【長野】「産院音々」始動 1 年半後の今 ▶ 出張さんばステーション日野春●松浦助産院 松浦照子 56
- 【静岡・山梨】一人一人の自律が産み出し育む LMC 制度 ▶ 大野誠士 59
- 【静岡】お産ラボの活動 ▶ お産ラボ 平田砂知枝 61
- 【岐阜】助産所での新卒助産師インターン受け入れを実践して ▶ ゆりかご助産院 赤塚庸子 63
  - ・ 私は助産師 ▶ 元ゆりかご助産院インターン生 萩野瑞生 64
  - ・ 私の心に種を蒔いてくれたインターン期間 ▶ 元ゆりかご助産院インターン生 川畑萌子 65
  - ・ 産院でのインターンという貴重な体験から ▶ 元ゆりかご助産院インターン生 浅井香穂 66
- 【滋賀】滋賀県におけるバースセンター開設へのチャレンジ！  
―妊産婦や子育て中の母親らの脱・孤立をめざした開業助産師の活用―活動 1 年目 ▶ うみのこ助産院 金森京子 67
- 【京都】海(まある)助産院 建設中！！ ▶ 海(まある)助産院 宮川友美 73
- 【兵庫】ママのねフェスタ実行委員会による「My 助産師普及啓発事業」 ▶ 古宇田千恵 77
- 【兵庫】丹波篠山市で My 助産師による産前産後の継続ケアを始めました ▶ 丹波篠山市 My 助産師ステーション 成瀬郁 79
- 【福岡】私の My 助産師考 ▶ たのしまる助産院 松本由美子 85
- 【熊本】故郷熊本で My 助産師への道を志して ～ひとりじゃない～ ▶ さとみ助産院 橋本さとみ 87

**3章 これからに向けて****91**

- 今後の課題 91
- メンバーからのメッセージ 92

**4章 データセクション****94**

- 本団体の情報 94
- 代表紹介 95
- 編集後記 96

# 序章 わたしたちについて

## はじめに

2016年、Birth for the Future(BFF)研究会は、「女性中心のケア・妊娠期からの継続ケア」について1年間の検討期間を設けた後に、[政策的な視点を持った活動](#)をする仲間を募りました。その結果、妊娠から出産・産後まで継続的に関わるという助産師本来の役割が果たせていない現状を憂いている助産師たちと妊娠出産環境を変えたいと願う女性たちが、全国から集まりました。そこで、2017年に「出産ケア政策会議」を立ち上げ、ニュージーランドのマタニティケア制度をモデルにしたMy助産師制度の普及活動を行うという方向性を定め、4年間(第4期の活動が終了)が経過しました。

第3期の活動では、My助産師制度が社会的な孤立を予防する公共サービスとして期待されていることが明らかになったものの、My助産師の質と数が担保されていないという大きな課題があります。また、妊娠期からの継続ケアが提供できるための制度設計を国や地方行政に求めていくためのロビイング活動の重要性も明らかになりました。

そこで、第4期(2020年5月1日～2021年4月30日)は、「My助産師を増やす」「My助産師と出会う」「My助産師制度を広げる・求める・整える」を目標に、①My助産師育成事業、②講演会事業、③ロビイング事業、④Webサイト制作に取り組みました。

①My助産師育成事業(12月から3月に開講)では、56名の研修生のうち46名に修了証を発行できました。その内の数名が実践編の研修生として、現在、助産院での継続ケア実践に取り組んでいます。②講演会事業は、7回開催し、1026名の参加がありました。③ロビイング事業では、産後1年未満のローリスク初産婦を対象(1,143名)に「子育てアンケート調査」を実施。開業助産師による継続ケアをそれ以外の助産師ケアと比較してその有効性が高いことを明らかにし、プレスリリースを行いました。また、国会議員への働きかけでは、自民党議員主催のChildren First勉強会でニュージーランドにおけるLMC(Lead Maternity Carer/マタニティ継続ケア担当責任者)制度について発表し、「こども庁」創設の緊急提言書に「かかりつけ助産師等による産前・出産・産後の継続ケアの実施体制の強化と普及」の文言が盛り込まれました。さらに、地方議員(東京都多摩地区、兵庫県)や市長(大阪府寝屋川市、静岡市)にも働きかけた結果、My助産師による産前・産後の(部分的な)継続ケア事業が寝屋川市で実現し、兵庫県ではMy助産師モデル研究事業への働きかけを継続しています。④Webサイト制作では、Web制作会社を決定しました。しかし、先方の都合により今年の3月以降での発注となったため、次年度の完成を目指して、現在、開設当初からのWebサイト「ママのね」をリニューアル中です。

その他の活動としては、1)2020年度(第3期)活動報告書【第3期活動報告書～親となる道のりに寄り添う「My助産師制度」の実現に向けて～】を完成させ、Web上に掲載し、自由な閲覧を可能としています。2)第35回日本助産学会(兵庫県)におけるシンポジウムにおいて、本団体メンバー(ドーリング景子、古宇田千恵、松浦照子)が登壇し、継続ケアの重要性や助産師の新しい働き方について講演しました。3)本団体としての活動ではありませんが、今年の3月にWHO推奨『ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』(医学書院)が翻訳出版され、共同代表の3人が翻訳チームメンバーとして携わりました。

これまで本団体では、「My助産師」、「My助産師制度」と表現し、その用語の広がりを感じてきました。しかし、出産を中心にした継続ケアを行わない助産師も「My助産師」と称していることから、折角広まった「My助産師」という用語ではありますが、第5期(2021年)からは、「LMC制度」、「LMC助産師」という名称に変更します。「LMC制度」とは、マタニティ継続ケア担当責任者として、全ての妊産婦の産前・出産・産後の継続ケアを保証する制度であり、それを実践する助産師を「LMC助産師」と称します。



## 提言

出産ケア政策会議は、政府などに対し、妊婦が、出産場所やリスクに関係なく、妊娠初期から出産・産後をとおして、妊婦が選んだ同一の助産師(LMC 助産師)、または少人数の助産師チーム(その場合でも LMC 助産師をひとり特定する)のケアを継続して受けられるよう保証する制度(LMC 制度)の実現を求め、以下を提言します。

### 提言1

#### 出産施設における継続ケアの保証

病院・診療所は、妊産婦が妊娠初期から出産・産後をとおして、LMC助産師のケアを継続して受けられるように、交替制勤務を抜本的に見直し、妊産婦に合わせた働き方にしてください。まずは、助産師1人について1年に1人の妊産婦の継続ケアから始めてください。

### 提言2

#### 産前産後ケア事業での部分的な継続ケアの保証

自治体は、まず第一歩として、産前産後ケア事業において、妊産婦がLMC助産師による(部分的な)継続ケアを受けられるようにしてください。

### 提言3

#### LMC助産師の質の保証

- ・都道府県は、出向システムを活用し、勤務助産師の助産所研修を推進してください。
- ・教育機関は、助産教育のカリキュラムをLMC助産師を前提としたものに改善してください。
- ・全国助産師教育協議会は、ダイレクトエントリー助産教育制度の導入を検討してください。

### 提言4

#### 妊婦が選んだ出産場所の保証

国や自治体は、合併症やリスクを問わず、妊婦が選んだLMC助産師のケアを継続して受けられるように、

- ・LMC助産師のオープンシステム利用を推進してください。
- ・LMC助産師と診療所・病院の連携システムを推進してください。

### 提言5

#### LMC助産師の数の保証

すべての関係者は、妊娠・出産・産後をとおした継続ケアを実践できる自律したLMC助産師を増やす取り組みを行なってください。

\*年間約80万人のすべての妊婦に、LMC助産師のケアを提供するためには、就業助産師約3万5千人のうち、約2万人がLMC助産師になる必要があります(年間1人あたり40件とした場合)。

# 出産ケア政策会議：0期を除く4年間の活動概要



# 1章 おもな活動

## My 助産師育成プログラムの開催

赤塚 庸子

私たちは、女性を大切にしたい出産ケアのあり方を、政策および制度面から支えるために、女性のニーズと権利に沿った政策および制度への転換を目指して活動することを目的とした団体です。私たちが目指す具体的な形として「My 助産師制度」があります。My 助産師制度とはリスクの程度や出産場所に関わらず、自分の選んだ助産師(または少数の助産師チーム)から、産前・出産・産後を通して継続的なケアを受けることを保障する制度です。My 助産師制度実現にむけて、それぞれの置かれた環境で、その一歩を踏み出すきっかけになることを目的として企画したものが、My 助産師育成プログラムです。

助産師は、周産期を通してすべての「ケア」を行うことができる唯一の専門家です。決まった助産師がその妊婦に継続的に関わることで、「その人にとっての正常」を理解し、把握することができるため、様々な変化や異常に気づきやすく、異常を未然に防ぐことや、早期発見することにつながります。

日本では「My 助産師制度」のような制度がない現状で、多くの妊婦が定期的健診等に通いながらも、聞きたいことが聞けないなど不安な妊娠生活を送っています。たとえ、健診時や入院中に助産師に会うことがあっても、毎回のように助産師が替わることで、妊産婦は緊張や戸惑いを感じています。そしてひとりで陣痛に耐え、退院後は誰に助けを求めてよいかも分からず、気軽に相談できる人もいないという不安と孤独の出産・育児体験をしている母親も少なくありません。

また、増加する産後うつや子どもへの虐待など、深刻な問題に関する話題を耳にしない日はありません。

日本の周産期死亡率は世界に誇る数字を持っています。その一方で、このような妊産婦の社会問題が深刻化していることは、母児が身体的に安全であるという結果を追求してきた日本の周産期医療およびケアが、妊産婦や母親の心を置き去りにしてきた結果かもしれません。

WHOは、女性がどんなケアを受け、どんな体験をしたかという女性にとってのケアと体験の質が、臨床的なケアと同じだけ重要であり、その両方が満たされてはじめて、その人にとって十分な結果が得られると発表しています(『ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』医学書院、2021)。

その様な現状をもとに、出産を含む継続ケアを実践する助産師育成のため、育成チームで検討を重ね、3か月にわたり以下の様に全6回の講座を企画しました。

- 第1回 2020年12月6日 「助産哲学」講師:ドーリング景子
- 第2回 2020年12月20日 「My 助産師の魅力にはまる」講師:中村暁子
- 第3回 2021年1月17日 「自ら開拓していく My 助産師への道」講師:赤塚庸子 ゲスト:川畑萌子・浅井香穂・萩野瑞生
- 第4回 2021年2月7日 「お産の振り返り術」講師:松浦照子 ゲスト:産院音々の助産師10名
- 第5回 2021年2月21日 「私が歩んでいる My 助産師への道」講師:宮川友美
- 第6回 2021年3月7日 「My 助産師としての自立への道」講師:松浦照子 ゲスト:産院音々の助産師11名

## My 助産師育成プログラム 1 期 第 1 回目 報告書

- 日時:2020 年 12 月 6 日(日)20:00-22:00
- 参加者:69 名 (企画運営 7 名、参加者 53 名(欠席 3 名)、母親の立場の方 9 名)
- プログラム:助産哲学
- [講師] ドーリング景子

共同代表のドーリング景子より、「助産哲学」をテーマに講義が展開されました。

- ・日本に共通の「助産哲学」がないこと、明文化されていないという問題がある。
- ・出産ケア政策会議では、「助産とは」を考えたその先に、「妊娠・出産・産後をとおして、出産を含めた継続ケアが必要」と考えている。

次に、「なぜ、出産を含めた継続ケアが必要なのか。」というテーマで、現在分娩を取り扱う助産院を開業している助産師と、共同代表で自由に話し合う場面を皆で共有しました。

- ・お産のケアができるのは助産師だけ。助産は女性との関係性の上に成り立つ。
- ・助産学生が女性と深い関係性ができているということもある。その人の気持ちに寄り添いたいという想いがあれば、経験年数や分娩件数は問題ではない。
- ・継続ケアの方が助産師として仕事が面白いと感じる。

このような話の後に、グループワークがなされました。「ある妊婦さんが、お産の時にモニターをつけたくないと言っています。」「ある妊婦さんが、妊婦健診で白紙のバースプランを提出しました。」「硬膜外麻酔分娩を希望する妊婦さんがいます。本人は無痛で産みたいが、夫や実母は反対しているということです。」共通して、「あなたは助産師としてどのように対応しますか？」ということをお各グループ一つのテーマで話し合いました。

グループごとの発表では、「女性の想いを大切にしたい」「そのことを言ってくれてありがとう、とまず伝える」など様々な意見が出ました。

最後に再びドーリング景子より、つまり、助産師は女性の味方でいたい、深い関係性がなければ、女性は助産師に言えないことが沢山あるということ。助産とは、女性との関係がすべてであり、関係の質が助産(ケア)の質につながる。妊娠、出産、産後をとおした 1 対 1 の継続ケアが、ポジティブな出産体験、そして女性自身の自信へと繋がる。助産師による継続ケアが必要とされる確固たる科学的根拠があり、皆で「助産とは」を考え続けること、言語化していくこと、パイオニアとなることの意義を再認識して終了しました。

講義の後の感想では、「助産について自己の考えを言語化することで、日々の仕事を振り返る機会となった。」「講義を聞いて、助産師育成の授業で学生に『助産師とは』を教授しながらモヤモヤを感じていた原因がわかりました。言葉の定義があっても、現実の行動には共通の理念が反映されていないからなんです。この学習が終わる頃に、助産師が何者かを明確にでき、自分の芯をしっかり決めて助産師の根っこ作りができるようになりたい。」「『助産師だったら誰でもできるのよ』の一言にポンと背中を押されました。どうやったらできるのかをとことん考えて、行動し続けていだけなんです。どこまでも女性の味でいたい。」以上、このような感想がありました。 (文 西川直子)

## My 助産師育成プログラム1期 第2回目 報告書

- 日時:2020年12月20日(日)20:00-22:00
- 参加者:62名(企画運営6名、参加者49名(欠席7名)、母親の立場の方7名)
- プログラム:My 助産師の魅力にハマる
- [講師] 中村暁子 [ファシリテーター] 赤塚庸子、松浦照子 [ゲスト] 日比野綾乃さん

My 助産師実践者の中村さんとケアを受けた日比野さんへのインタビュー動画を視聴しました。

### 【My 助産師を実践するに至った経緯】

日比野さんから赤塚さんの助産院で出産したいと連絡があったが、上のお子さんを妊娠32週で分娩していたため、緊急時に対応できる医療の近くで、My 助産師の活用できるよう中村さんを紹介された。日比野さんから中村さんに連絡をとり、My 助産師の依頼と契約を結び、中村さんが勤務する産院で毎回妊婦健診に同席した。産後入院中は毎日、訪問し、沐浴やケア・お話などをしていた。現在も交流は続く。

### 以下、動画より【日比野さんへのインタビューから】

- ・ My 助産師が担当した妊娠中の体験について「育児で家にいるため社会から孤立していると思っていたが、中村さんと話すことで視野が広がった。妊婦健診は今まで血圧・体重測定などを評価されるので嫌だったが、おなかにいる子ども・上の子どものことを相談でき、家族と共にお腹の子どもの成長を喜んでくれる中村さんに会えると思うと楽しみになった。」と受け止めていました。
- ・ My 助産師が担当した出産の体験は、「安心感がかなりあった。前回の出産では、助産師たちは忙しそうだし、一人で頑張っていて耐えていたが、今回は気にしなくてよかった。妊娠初期から一緒に子どもの成長をみてきたので、中村さんに早くこの子を見せたいという気持ちがあった。」そうです。
- ・ ご主人の理解は、「わたしが希望する精神的な支援をしてもらえたので、理解してくれた。」
- ・ 出産から1年以上経過したが、中村さんとの関係はどのような関係と感じますか？に対し、「大きな愛で受け入れてくれる。いろいろなことを言っても何でも受け入れてくれる人。産院では身体のケアはしてくれても、心のケアはしてもらえない。産後、上の子どもの世話で忙しかった家族と比べ、唯一わたしのことを優先してくれた。」という、全てを受け入れる理解者であると回答されました。
- ・ ポジティブな出産体験だったか？どういうところを肯定できましたか？という問いに対して、「My 助産師でなければ、顔は知っているけどよく知らない助産師の前では、自分の本性で出産しろと言われてもできない。みんな出産という同じゴールを目指しているけど、わたしの何を知っているんだ、という気持ちになる。My 助産師がいることがありがたかった。」と回答されました。
- ・ 女性の方にどこまで関わっていいのか悩むと思うが、助産師側はどうしたらいいと思う？という問いに対して、「わたしの存在が中村さんにとってどうなのか？理由がないと会えないのか、どこまで繋がりをもっていいのか、産んだら終わりなのか、それが切なかった。継続のしくみがあれば、会いやすい。」と回答され、妊娠・出産・産後への継続した関わりが女性の支えになり得ることが示されました。

### 【中村さんへのインタビューから】

- ・ 初めて妊娠中から継続して日比野さんに関わったことで、本当にその人と近づける。もともとお母さんが答えを持っていることはわかっていたが、それをより深く実感した。

- ・ 継続ケアは、楽しかった。2人でチャレンジしていることを実感できた。

動画視聴後、

#### 【中村さんが日比野さんの分娩経過を振り返る(経産婦であったが分娩進行は緩やかであった)】

- ・ 周りからの「こうしたら分娩進行できるのではないか？」などの声は、全く耳に入っていなかった。記憶にない。言われたけどどうでもいいと思ったのかもしれない。自分が誰よりも日比野さんのことを理解していると考えていたから。分娩経過中、思考が働かなかった。普段しているようにその時々で分娩経過を評価していなかった。まだ生まれないと思ったが、日比野さんが分娩室に行くといえば、一緒に行った。やりたいと思うことをやってもらった。日比野さんが最後に「もう寝る」といって休んだら、その後陣痛が強くなり出産となった。日比野さんの何に集中していたのか？に対して、一緒にいるとしか言えない。評価はない。
- ・ 日比野さんの出産後、My 助産師の経験のように寄り添おうと分娩につくけれど、そのときのような体験はできない。物足りなさを感じている。せつかく同じ時間を共有するのに、その産婦さんに申し訳ない思いもある。

『My 助産師を体験すると、中毒になる！素晴らしい体験である!!』

#### 【中村さんの振り返りを聞いた参加者の感想】

- ・ (中村さんの同僚で出産に立ち会った A さん)日比野さんが自然体だったのが印象的。
- ・ 思考が働かないことがよくて日比野さんが楽だったのではないかと？中村さんも楽だし、マラソンはゾーンに入るっていうけど、言葉で表せなくなる状態。
- ・ 先日の「出産体験談セッション」でお話しされたお母さんの出産体験と似ている。そのときも、「自分で好きにしたらいいよ、好きにしていっていいよ」と言われて、「流れに任せよう」「体の声を聴こう」という気持ちになってからお産が進んだ。日比野さんも「もう、どうにでもなれ～」と自分のこだわりを手放したことで眠れて、そのあとお産が進んだ。

26 分の動画を視聴した後、中村さんが日比野さんの出産経過で、それまでの日比野さんとの関係があったからこそ、体験できたことが多く語られ、それについての意見が交わされました。その後グループワークで話し合いを持ち、発表し全員で共有しました。

日比野さんから、My 助産師=安心感 という言葉が何度も聞かれました。妊娠中から産後(現在)まで、日比野さんを 1 人の人間・女性として、パートナーシップを結ぶ 1 人の人間・女性である My 助産師の中村さんとの関わりがあり、今後もその関係が継続していくことへの期待が聞かれました。その声に応えるためにも、My 助産師制度の体制作りが重要です。日比野さんが中村さんを漢字に例えると『愛』『光』『道』だそうです。中村さんが引いた道を歩くということではなく、あくまで、日比野さんご自身が自分の判断で選択して歩いていくことである、とおっしゃられ、女性と助産師が共に歩く姿が浮かんできました。

中村さんからは、My 助産師として関わった出産と、仕事で関わる出産は何かが違う、同じ時間を共有するのにもったいない、という My 助産師の魅力をアピールされました。

My 助産師育成プログラム第 2 回:My 助産師の魅力にハマる。では、参加した助産師それぞれの心に My 助産師の魅力が刻み込まれ、自分のいるところで My 助産師になるために何を行うべきなのか、について考えさせてくれました。

(文 中谷三佳)

## My 助産師育成プログラム 1期 第3回目 報告書

- 日時:2021年1月17日(日)20:00-22:00
- 参加者:54名(企画運営7名、参加者40名(欠席16名)、助産師ではない立場の方7名)
- プログラム:自ら開拓してく My 助産師への道
- [講師] 赤塚庸子 [ファシリテーター] 松浦照子 [ゲスト]川畑萌子さん、浅井香穂さん、萩野瑞生さん

講師のゆりかご助産院院長 赤塚庸子助産師より、新卒後1年間ゆりかご助産院でインターンとして勤務したゲスト3人の助産師さん達のお話を交え「自ら開拓していく My 助産師への道」をテーマに講義が展開されました。

### 【インターンの内容】

- ・ ゆりかご助産院では3年前から新卒助産師を1年間限定で助産院での助産ケアをじっくり学ぶ目的で勤務採用を開始した。
- ・ ゆりかご助産院での1年間のインターンの期間では「自分が何をしたいか」を基準に勤務内容を構成し、継続ケアを30-40例担当または見学しながら、助産ケアをしっかりと振り返る時間を確保する。また1か月間は嘱託医の元で採血などの診療の補助を経験、そして研修や勉強会などの参加に積極的な支援を受けることができる。

### 【赤塚さんがインターンを始めようと思われた経緯と、実施後に感じたこと】

- ・ ゆりかご助産院で学生の助産院実習を受け入れるにあたり、赤塚さんと教員は助産院実習から開始した助産実習での学生の学びや態度から必ずしも病院での経験が先になくても十分に助産哲学や助産ケアについて学習できることに気づかれた。
- ・ 日本の助産教育現場では実習先が少なく限られ、継続ケアや助産院での助産ケア、自然な妊娠・出産・産後の経過を見ることが難しいという問題がある。
- ・ 日本の卒後就職先での病院や産院における助産現場では配属先の関係で助産ケアに携われなかいことや、1例1例をじっくり振り返る機会が少ないことも問題がある。
- ・ 初めに「助産哲学」や「開業助産師としての働き・役割」を見て学ぶことにより、「自分の助産師としての軸とテーマ」を考え続ける土台を作ることによって、今後どんな場所でどんな働き方をする上でも信念と広い視野を持って働き続けることができる可能性がある。
- ・ 赤塚さんは良い出産体験が語り継がれ、次の世代が出産する時の選択肢として自然な出産ができる場所を残したい、途切れさせてはいけないという信念より、後輩へ学びの機会の提供の場が増えることを願い、インターンの受け入れを実践されている。
- ・ 赤塚さんは新人・経験者関係なく・助産学生が女性と深い関係性ができているということもあり、その人の気持ちに寄り添いたいという想いがあれば、経験年数や分娩件数は問題ではないとインターンを通して確信された。

- ・ 自分から何かしらのアクションを起こし自分から助産院でのインターンを引き寄せた3人だからこそその経験と学びがあったように感じる。

#### 【インターンを受けられたゲスト助産師さん達のお話】

- ・ 助産院での「女性の力を信じて待つ」経験から病院での1つ1つのケアや処置に対する見方が変わり、なぜそうするのか？という疑問を母子の視点に立って持てるようになった。
- ・ 助産における技術や知識だけでなく、継続ケアの中で、母子の気持ちや感情に寄り添い想いを馳せる助産ケア、日常の延長線にある助産を学ぶことができた。
- ・ 自分がどういう助産師になりたいのかを考え続ける土台ができた。
- ・ 指導者と学生・新人という上下関係・教える教えられる関係では無く、母子を見守る同じ助産師として意見を言い合い協力する信頼関係を日常のスタッフ同士の関わりから学ぶことができた。
- ・ 病院では継続的に関わりにくく、他の業務も重なり、1人にかかる時間の少なさから助産院でのケアのように出来にくい環境や場面がある。継続的に関わることでもっと自分にできることが変わってくるように感じている。今自分の置かれた状況で何ができるか試行錯誤の日々であるが、「自分が大切にしている助産哲学・助産ケア」があるためそれに近づけるような取り組みをしていくことができる。
- ・ 助産院では新人の今の私にもできることがあるんだということを感じることもできた。

#### 【グループワークと発表】

- ・ 「3人とも助産師としての確固たるマインドが助産院でのインターンを通して築き上げられている。」
- ・ 「経験年数や分娩件数が女性に寄り添いたい気持ちにおいて関係ないことがわかった。」
- ・ 「継続ケアがどうしても出来ない場合の助産ケアも同時に大切であり助産師として考えていかなければならない。」
- ・ 「学生や新人助産師が豊に安心して経験し学習できる現場環境を整えていかなければならないと感じた。」
- ・ 「助産院・病院・クリニックなどそれぞれの出産場所でのそれぞれの良さがあることを知り、どこであっても母子にとって安心できる助産ケアは追求していくことができる」など様々な意見が出ました。

(文 梅崎七海)

## My 助産師育成プログラム1期 第4回目 報告書

- 日時:2021年2月7日 20:00-21:30
- 参加者:64名(企画運営8名、参加者47名(欠席8名)、助産師ではない立場の方9名)
- プログラム:お産の振り返り術
- [ファシリテーター] 松浦照子、産院音々の助産師10名

### 「お産の振り返り術」について

#### 【松浦さんより、振り返りについて】

吉村医院でのお産の振り返りから学んだ。SOAPで記録するが、Aは通常科学的根拠だが、そこには自分の感じた事をそのまま書いていた。振り返りでそのAの部分突き合わせて、自分の感じていたことを振り返ったり、相手の感じた事を振り返ったりすることがとても面白かった。自分の経験がない分、お産の振り返りで経験をカバーしようと思った。今はその積み重ねが財産となっている。一例一例が深くなってくる。次のお産に入るときに、面白くなる。母に対しての感受性が高まる。感じやすくなる。

自分自身のパターンが見えてくる。メンバーのパターンが見えてくる。フォローしあえる。

1例の振り返りを「無事に産まれて良かったね」では終わらせない。振り返りをすることで見えてくる赤ちゃんからのギフトを受け取りたい。

#### 【産院音々では】

一人の妊婦さんを3人で受け持つが、お産の振り返りは全員のスタッフで振り返る。1例で、何人もの人と共有できる。実りある時間になっている。病院に勤めていようが、どこでも出来るので参考にしてもらいたい。

#### 【産院音々の振り返りの動画の共有】

#### 【産院音々のメンバーの自己紹介】

皆さん被り物をつけて、お産をする方の為に、ご希望にそって何でもできますよ！という意気込みが感じられた。

#### 【グループに分かれて、振りかえりについてシェア】

記録は、ご自身のものなのでお母さんに差し上げることもある。

#### 【グループワークの振り返りからの感想・意見】

1G. 3人のサポートの役割・記録者の役割についてお話を聞いて、2人でお産に立ち会うときと違うことがわかった。

2G. 中には逃げ出したくなるようなお産の振り返りもある。

もっと深い部分に入っていくといけないこともある。

女性が女性をサポートしあうことの神髄をシェアし、チームで人間力の構築をしていく事になる。

自分の弱い部分や、きつい部分が見えてきて、しんどくなることもある。

シェアの時に話し合えなくても、仲間で共有したり、この出産ケア政策会議のメンバーに話したりして

もいいと考えた。

3G. 妊娠期から継続ケアについて女性についての話をしているので、女性についての理解がうながされる。

フィードバックをもらえることで、自分自身への自己肯定感が出てきて、新しい気づきがある。

自分の病院でも仲間を作ろうと思えた。

音々では、1か月に1回、妊婦健診についても振り返りをしている。

4G. 本音で振り返るつもりで、お産に入る。そのことが本当の自分でお産の場に入ることである。

他の人に対して本音でいられる場があるということが、ありがたい環境である。

振り返りから自分の事が自分で一番よくわかっておらず、他のメンバーから自分のことを知ることがある。

5G. (お母さんと産院音々の助産師は、)なんでも言える関係で、お産の振り返りも対等に振り返れる。医療事故も防げる。ママからは「振り返りをしていないお産があるの?」とびっくりされた。

助産師は「産ませや」ではなく、「咲かせや」である。振り返りは、ママからもやって欲しいとの声もあがっていた。

その人の人生の寄り添うって、何に寄り添うのか?人生の全てに関わるつもりで、寄り添ってほしい。

助産師としての学びは全てに関わってくる。

→ 自分がどう感じたか… 子育て、夫婦関係は山あり、谷あり。スタートやプロセスを知っている人にそばにいてほしいと思う。子供の自己肯定感に役立つ。お産の原点に戻ったら、またできる。本音ができる。

6G. 助産師が満たされて、お母さんも満たされて、双方が満たされることが大切。若い助産師さんに、同じことを苦しい想いをさせたくないし、「助産師魂」を伝えていきたい。そうすることで、女性もしあわせで、お産も幸せで、助産師さんも幸せで、社会もしあわせになるのではないか。

7G. 自分に足りないところが、頭で「助産師は助産師であらねばならぬ」という想いが強い。助産師も女性としてありのままがいい。ということが腑に落ちていない。

人生においての、タイミングがある。

目の前の親子を大切にすることと、自分自身も女性としての人生を大切にしようと思った。

今の現場では80%満足であるが、出産ケア政策会議では、100%生ききりたい、そのタイミングに乗り切りたい。

(文 板垣文恵)

## My 助産師育成プログラム1期 第5回目 報告書

- 日時:2021年2月21日(日)20:00-22:00
- 参加者:55名(企画運営8名、参加者40名(欠席16名)、助産師ではない立場の方7名)
- プログラム:私が歩んでいる My 助産師への道
- [講師] 宮川友美(海(まある)助産院) [ファシリテーター] 松浦照子(出張産婆ステーション)

講師の海(まある)助産院院長 宮川友美助産師より「私が歩んでいる My 助産師への道」をテーマに、女性としての生き方も交えながら、助産師としての軌跡や開業に至った経緯について講義が展開された。

宮川助産師の助産への熱い思いはもちろんのこと、開業一例目のお産をサポートした松浦氏がファシリテーターとなり、宮川氏の体験を上手に引き出し、お二人がテンポ良くお話を進める様子に、宮川氏と松浦氏のお互いへの信頼と助産師としての共通した哲学が伝わってきたのも印象的であった。

\*\*\*\*\*

### 【助産師としての経緯】

- ・ **小さい頃の将来の夢** 「看護師さんになる」と描いた絵は、助産師を連想させる絵だった。
- ・ **卒後の勤務**  
総合病院混合に勤務。母児別室&分娩台のお産ではあったが、先輩助産師に恵まれ助産師の魅力を感じられる環境だった。その後、助産師としては複数の HP を非常勤として勤務していたが、まとめてお仕事&しっかり遊ぶ、というペースで働いていた。
- ・ **仲間と立ち上げた院内助産**
- ・ 助産師募集の広告「和室分娩。フリースタイルやってみませんか？」に惹かれ、転機となる病院へ。その病院で10年以上を過ごすことになる。最初に立ち会ったフリースタイル分娩では、「MWとして何にもしてない。産婦さんが自分で産んでいるのをお手伝いさせてもらった」という感覚で、貴重な体験となった。
- ・ 就職して4年目になり、助産師仲間と院内助産を希望。院長から「やりたければやってみたらいいよ」との言葉で2004年(秋)に助産師外来が実現。同時に、あゆみ助産院に妊婦健診の研修に出ることで、学びを深めた。(月4,5日、病院の費用にて実施)。その頃から、折に触れ「いつかお産につくところまで継続で担当させてくださいね！」と院長に伝えていた。
- ・ 院長から「(分娩も)やってみないか？」と言ってもらい、2008年1月院内助産の第一号のお産。院内とは言え、医師の立ち合いなしに立ち会ったお産は忘れられない体験となる。(その頃、嘱託委問題の危機感から開業届を提出)
- ・ 「正常出産カンファレンス」から影響を受ける  
2004年に開催された「正常出産カンファレンス」にて、ベテラン開業助産師さんたちのお話を聞き「この人たちが本物なんだ…」と大きな衝撃を受ける。一方で「お産の9割は病院出産なのだから…」と自分に言い聞かせながら、病院勤務を続けていたように思う、と振り返られていた。

### 【自身の妊娠出産体験と地域での開業】

- ・ **幸せな妊娠期**  
あゆみ助産院で妊婦健診を受けながら、妊婦健診の時間をとても幸せに感じながら妊娠期を過ごす。同時に、自身が妊娠してから分娩室から足が遠退く感覚も味わった。理由はなぜか分からないが、院内のお産が女性のものになっていない気がしていたのだと思う、と語られた。
- ・ **育休によるママ友との出会い**

育休の一年でたくさんのママ友との出会い、地域で子育てする大変さも感じる。

いよいよ育休から復帰という時期となり、ママ友から「病院に戻らないで地域にいて」との言葉と場所の提供もあり、海(まある)助産院を開業。病院勤務と並行し、海(まある)助産院の名刺の配布をはじめ。

### 【開業助産師としての転機 ～お産をはじめ～】

- ・ 2016 年に友人が妊娠。「一緒にお産しよう！」と言われたことが、大きな転機となる。飛び込みで嘱託医療機関を探し、無事に嘱託医を確保。お産自体は 36 週4日の早産であったため病院での分娩となったが、分娩状況から「赤ちゃんはちゃんと自分で選んで生まれてくるんだな」と思う体験となる。
- ・ 同じ月に 2 例の分娩を担当することになったが、まだ分娩取り扱いを始めたばかりであったため不安あり。偶然にも松浦助産師と繋がり、松浦氏が 1 か月間、泊り込みで京都に来てサポートに入ってくれることになる。アシスタントに入った松浦氏に見守られながら、女性と一体化したお産を体験する。(その後、開業助産師として、現在までに32例のお産を担当している。)

### 【助産師としてのメッセージ】

- ・ 女性のオキシトシン分泌への影響～いかに“黒子”になれるか～
- ・ お産に立ち会う際、分娩が長引くなどで不安になると“あたま(知識)”が先行してしまう。そういう時は妊婦さんのオキシトシンが「しゅ～」と減少してしまう。いかに黒子になれるか?! がとても大切。  
～『私、いいひんでも良かったよね、と言えるお産がどれだけ尊いのか』  
その時に見せるママの表情、赤ちゃんを抱きしめる様子、家族が一体化する様子  
そんなお産をみせてもらおうと、気を使う場所でそれを叶えるには限界がある  
限界のある場所で提供する助産師が苦しくないわけがない、ということに気づく～
- ・ 開業の大変さって?  
開業の大変さ(経済面・アシスタントの確保・物品の準備)はあるが、仲間と取り組めば全て解決する。
- ・ 助産(師)教育への思いと、My 助産師育成にむけた取り組み
- ・ 「理屈で分かってても、実践するのは難しい」とみんなが感じるのはなぜ?  
⇒ 教育で実践できていない、教育に原因があるのでは?! やりたいことができない環境。  
⇒ 助産師がそうだから、お母さんたちはもっと困ってしまう。  
⇒ この気づきをこれからの活動のエネルギーにして欲しい!
- ・ 現在、〈My 助産師になれるための研修ができる場所〉を建設中。(クラウドファンディングにて予算確保)
- ・ 「やらないではいられない」という熱い思い「駆り立てた気持ちを共有できる仲間がいる」「やるぞと決めたら、そういう道になっていく」という数々の言葉に、宮川氏の助産への熱い思いが伝わってきた。

### 〈グループワーク後の発表〉

- ・ 宮川氏が、様々な施設で、助産師として自分に必要なエッセンスを身につけていった様子を感じた。
- ・ 助産師もお母さんも「自分で産む」という覚悟が必要。共に気持ちを呼応している。  
⇒ 『女性と一体化し、同じ景色が見られる体験ができることが大きい』(宮川氏)
- ・ 開業する勇気をもらえた・「やってみないと」という一歩踏み出す勇気がもらえた・助産師を育てるスタートは、お母さんの語りから始めたい・仲間は大切・みんなが繋がって良いムーブメントとなればいいなと思う・自分がどういう助産師になっていくかを考える時間になった・開業にむけての動きにおけるジレンマを感じている(それに対し、エールあり)など。

宮川氏のお話、参加者が前に進む勇気やエネルギーを得た様子が発表された。(文 坪田明子)

## My 助産師育成プログラム1期 第6回目 報告書

- 日時:2021年3月7日(日)20:00-22:00
- 参加者:54名(企画運営6名、参加者40名(欠席16名)、助産師ではない立場の方8名)
- プログラム:助産師の自律へ向かう産院音々の働き方とシステムの実際
- [講師] 産院音々の助産師11名 [ファシリテーター] 松浦照子、赤塚庸子

産院音々のシステムとスタッフ間がどのように心を通わせて活動しているかについて学んだ。2019年4月に開院し、これまで19名が無事にお産となっている。2名が転院となった。院長である医師が1人で、助産師は14名在籍している。医師とメインの助産師が、業務委託契約(請負契約)し、1か月健診まで担当している。1か月健診終了以降、成功報酬をもらう。産科医療保障制度などの事務手続きもメインの助産師が行っている。

### 【会計について】

産婦さんにお渡しする請求書は、出産育児一時金の42万円と、30週くらいに預かり金の20万円の残額の約7万円で、1週間健診までにお預かりしている。妊婦健診料金は7000円で、助産師への支払いは5000円となっている。外来から分娩時の雰囲気を作っていくために、特に妊娠37週以降は3人のチームで関わることもある。今回の例では、メインの助産師が24万円、サポートが11~16万円で分配している。69万円の中から、10万円を病院に、10万円を音々の設備費、その残額が音々での分配となる。

### 【医師・外来・病院の連携について】

医師が初期検査をして、既往歴などを判断した上で、音々を外来で紹介している。医師もMyドクターとして関わることを伝えている。

### 【初回相談について】

妊娠18週前後ころ、助産師から妊婦さんに電話をしている。妊婦さんの受け答えの仕方(たとえば時間に追われている様子など)、電話対応時からすでに面談は始まっている。見学もかねて3000円いただき、なぜ音々でお産をしようと思ったか?について、必ず聞いている。

### 【お産について】

お産で入院すると、メイン助産師がサポート助産師に連絡し、医師にも連絡している。入院するタイミングは、普通の産院であれば、音々が判断するが、その方が入院したいかどうかという点を大切にしている。自分から「そろそろ行っときます」と言われるタイミングで来ていただいている。

### 【先輩助産師として後輩の育成】

特徴としては、(指示を出す)トップや師長役の人はいない。初めてメイン助産師をやる人もいる中で、ちょっと先輩が全面的にサポートしてきた。音々での体験が初めてという助産師の場合には、どうしてそう思ったか、どうしたいかを常に聞くようにしている。失敗談も伝えるようにしている。

### 【ミーティングについて】

1回/月、約2時間実施。遠方の助産師はZoomでの参加。議事録はメールで共有している。

### 【イベントについて】

月1回「さんば学ぶデー」を開催し、吉村医院の吉村先生の著書「開業助産師の半世紀にわたる取り組みから現代産科学への疑問と提言」の読み合わせを行っている。その他に、歩いた方がいい妊婦さんがいたら、声を掛け合ったりして散歩のイベントをしたりして、妊婦さん同士の横のつながりを作ったりもしている。

### 【各グループのブレイクアウト後の感想】

- ・ 運営のすばらしさと共に、それでもシステム全体では、サポートが少ない。みんなができるシステムのために、自分には何ができるか考えていた。
- ・ 第一声で、大変なところはいっぱいあると言われていたので、そこが聞きたいことでした。人の心を合わせていくには妊婦さんと助産師の関係も、助産師と助産師の関係も同じで、丁寧に関係性を築きながらやっていく所なのだと勉強になりました。
- ・ 「お母さんのために」が一番であるということが伝わってきた。実際に音々にお邪魔したいと思った。
- ・ 完璧な人はいないから、悪い所だけの指摘があると辛いよなと実体験から感じている。体重の事はどうでもいいなと思って、ハッピーになって帰ることが大切だと分かった。お父さんにも、お産終わったらありがとうと伝え、お父さんの腰もさすってあげるくらいはしたいと思いました。
- ・ お母さんがキラキラするという言葉に惹かれた。お母さんと健診で会っていくと、最初は緊張していても、信頼関係を築くことによって体がゆるんでいくのかなと思った。こうでなければならないという思いがなくなってきた。アフリカンダンスの写真が激しいダンスで楽しかった。
- ・ 音々の構造がやっと分かって、よかった。大変なこともあると聞いて、現実感が湧いた。
- ・ 継続ケアをしたいと強く思えたので、自分の病院でもぜひ実現したい。(そのことを)上司に言うことが目標になりました。

(文 田嶋恵子)

## 「My 助産師育成プログラム」研修会における「出産体験談セッション」

中野 裕子

### 1. 出産体験談セッションとは

今年度開催した「My 助産師育成プログラム」研修会において、継続ケアを受けた 11 名の母親によるポジティブな出産体験談を聴く機会を設けました。この研修会の目的は WHO(世界保健機関)が推奨する「ポジティブな出産体験のための分娩期ケア」の重要性、そして継続ケアの重要性を研修生に理解してもらうことにありました。「ポジティブな出産体験」とは、次のように定義されます。

女性がそれまで持っていた個人的・社会文化的信念や期待を満たしたり、あるいは超えたりするような体験であり、臨床的にも心理的にも安全な環境で、付き添い者と、思いやりがあって技術的に優れた臨床スタッフから、実質的で情緒的な支援を継続的に受けながら、健康な児を産むことを含みます。これは、ほとんどの女性は生理的な出産を望んでおり、意思決定に参加して個人的な達成感やコントロール感を得たいと思っている、という前提に基づいています。たとえ医療介入が必要だったり、産婦が介入を望むような場合であっても同様です。

女性の立場から古宇田と中野は、このポジティブな出産体験について、実際に体験した母親の言葉を聴いてもらうことで、より理解を深めてもらうと出産体験談セッションを企画しました。

11名の年齢は30代～50代で、出産場所は、助産院・自宅・病院・クリニックと様々でした。1回につき1時間半のセッションで、前半は体験談、後半は質疑応答やグループトーク、また継続ケアを行った助産師に当時の体験を語って頂いた回もありました。話者の方にはセッションの趣旨等あらかじめお伝えしていましたが、当日はそれに拘わることなく自由に語って頂けるようにしました。研修生には体験談を聞いた上で「日々自分が行っているケア」を振り返ってもらい、その感想を提出してもらいました。

### 2. 開催日および参加人数

\* ( )内は助産師以外

第1回	12月8日	31(7)名	第7回	1月19日	25(4)名
第2回	12月13日	42(7)名	第8回	2月5日	26(5)名
第3回	12月18日	31(7)名	第9回	2月9日	38(5)名
第4回	12月22日	16(4)名	第10回	2月18日	34(4)名
第5回	1月8日	31(6)名	第11回	2月26日	43(7)名
第6回	1月14日	26(5)名			

### 3. 研修生の感想(抜粋)

「助産師が、自分の不安や焦りから、対象である産婦さんに『リラックスしてください』などと、まるで相手に非があるように、分娩進行が逸脱しているのは産婦さんの要因と意味するような発言をしていないだろうか、と考えます。おそらくしていると推察されます。注意するべきだと気づきました。」

「助産院でのお産は、女性をひとりにしない、いつもそばにいる、からだに触れる(さする、マッサージする、手をあてて感じとる)などしていました。女性が今何を感じていて、どうしたいのか？して欲しくないのか？などを聴くことをあまりしていなかったし、感じようとしていなかったなあと。トイレでは特に気を抜けない、ちゃんと見張っとかなきゃのような心持ちを持っていました。すっきりと言葉にできませんが、目には見えない感情や雰囲気、産婦さんの集中を邪魔していたのかな？と感覚的な気づきがあります。寄り添うとは、助産師とは、お産の時に、こうあるべきという思い込みの様な考えが頭に染み付いていることにも気づかせてもらえました。女性がお産に集中をするとはどういうことなのか？そこで、助産師としてできることは何なのか？助産とは、のところに戻った気がしています。」

「バタバタと忙しい病院勤務では、産婦さんにじっくり寄り添い、一緒にその世界に入り込むことなど全くできていませんでした。こんな時はナースコールしてね！とか、頭を使わせる『指示』のようなことも普通に言っていました。他にしなければならぬ業務の段取りを考えながらだったり、申し送りの時間・観察にまわる時間を意識しての産婦さんのケアだったなあと改めて感じました。そんな状況では、助産師である私自身も『何やってんのかなあ』と辛く不甲斐なさを感じていました。命が生まれる、そして女性が産みだすという現象は感覚の世界で、女性は妊娠期から産後まで本能的で敏感であることを腑に落ちるまで理解できたお話だったと思います。良いお話をありがとうございました！」

「私は口では産婦さん主体にと言っていたかもしれないけど、心の中で赤ちゃん主体の言葉かけだったりしていたかもしれないと思った。あなたが産むんだよっていうことを、怖がらせたり脅したりすることなく妊産婦さんに伝えることが本当に重要だなと改めて感じた。私はそれができていたかと言われるとできていなかった気がする。相手の思い、本音を引き出せる関わりが必要だと感じたし、そのためにはどんな答えでもまず受け止めること、これは大前提だなと感じた。」

「『この助産師は私や赤ちゃんのことを信じてくれない』ということがお母さんに伝わるということは肝に銘じておきたいです。お母さんや赤ちゃんを常に信じ、お母さんの内側に入り込める助産師になりたいと思います。それはお産の時だけではなく、妊婦健診の時から始まっているのですね。お母さんに対する距離感、声のかけ方、トーン、言葉遣い、触れ方など、どうあったら良いのかとても考えさせられました。」

#### [謝辞]

貴重な体験談をお話くださった皆様、そして耳を傾けてくださった研修生の皆様に、心より感謝申し上げます。

#### [引用文献]

分娩期ケアガイドライン翻訳チーム:WHO 推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期ケア, 医学書院, 2021.

## ママのねオンライン勉強会報告

西川 直子

現在私は夫の仕事でイギリスに住んでいます。イギリスで働く多くの日本人助産師に出会い、日本のお産の状況を外から眺めなんとか改革したいという想いを抱いていた私は2020年5月に「助産師オンライン24時間マラソン」というイベントを開催しました。これをきっかけに、出産ケア政策会議の事務局になり、同時に経験を生かして「ママのねオンライン勉強会」をスタートしました。第4期には合計7回のママのねオンライン勉強会を開催いたしました。毎回、「徹子の部屋」ならぬ「直子の部屋」のようにゲストを招き、事前に質問をいただいてゲストの方にお伝えしたうえで、お話を聴かせていただきました。1週間の録画視聴可能のイベントです。

◆第1回【助産と看護の違いってなに?】2020/07/28 <https://mamanone01.peatix.com/>

ゲスト:小澤淳子さん(イギリス在住助産師)



○参加者:合計159名(出産ケア政策会議正会員47名、その他112名(助産師97名、一般15名))

ゲストはイギリスで働く助産師の小澤淳子さん。小澤さんは、「助産と看護は全く違う」と言い切ります。日本とイギリスでは、助産教育も、医師との関係性も異なりますが、対象者である女性を主役においたときに、助産師はどうあるべきか?「助産と看護の違い」はなにか?一石を投じる思いで開催いたしました。

いただいたご感想です。「すごく考えさせられました。日本の、ヒエラルキーピラミッド構成。誰のための周産期ケアなんだ、ドクター?女性の自信や権利を尊重する存在としての助産師として研鑽していきたいです。助産師が寄り添い、あなたの希望はなんなのか、どうなのか、を聞けていないのでは?この言葉に頭をぶたれた気持ちでした。」「正常分娩は教育を受けた助産師が担当するのが当たり前という事はとてもふに落ちました。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1378493219207835>

◆第2回【本来の助産師とは~日本でMy助産師制度をつくる意味~】2020/07/28

<https://mamanone01.peatix.com/> ゲスト:小澤淳子さん(イギリス在住助産師)

『本来の助産師とは』  
～日本で  
My助産師制度を  
つくる意味～  
8月22日(土)  
21:30～23:00



ママのね  
ママのね  
ママのね

ママのねオンライン勉強会@出産ケア政策会議

○参加者:合計123名(出産ケア政策会議正会員50名、その他73名(助産師46名、一般14名、学生13名))

第1回目に引き続き、イギリスで働く助産師の小澤淳子さんを招いて、オモシロ楽しく「本来の助産師とは？」を話し合いました。イギリスやニュージーランドのモデルを参考にしながら、助産師が燃え尽きず、お母さんが幸せに安心感の中で出産をするために、あらためてMy助産師制度をつくっていこう!!という気運が生まれました。

いただいたご感想です。「淳子さんの『継続が大切なのは、本音が出せるから。』空気を読んで迷惑をかけないよう感情を抑えがちな日本人だからこそ、「本音」が出せる関係を作るのは大切ですよね。」「助産師さんがそばに『いること』、助産師の語りかけや配慮というものは、目に見えにくいことだけど、実はお母さんが主体的に産んだと思えたり、前向きに育児スタートできたり、女性の一生を左右する力がある。それを医療はもっと評価するべきと思うし、その誇りや使命感を失わないためにも、話に出た利用者からのフィードバックはとても有効と思います。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1399522037104953>

◆特別版【Water Baby の幸子さんからのメッセージ】2020/08/30 <http://ptix.at/rh5aQl>  
ゲスト:福本幸子さん(女優・ダイバー)



幸子さん  
からの  
メッセージ

Water Baby

2020年8月30日(日)  
21:00 - 22:30

ママのねオンライン勉強会@出産ケア政策会議



○参加者:合計 198 名(出産ケア政策会議正会員 45 名、その他 153 名(助産師 86 名、一般 51 名、学生 16 名))

Water Baby の動画 <https://youtu.be/Chglda5e1-k> を皆で見た後に幸子さんのお話を聞きました。動画では分からなかった話や、幸子さんが等身大のまま、こんな風に産みたいと願ってご自身で産む場所を探されてきたその過程を知ることができました。30 年前はニュージーランドでは助産師だけでお産介助ができず、日本を羨ましいと思っていたということ。「私たちにもできたのだから、あなたたちにも絶対にできるはずよ!!」と幸子さんがニュージーランドの助産師さんからメッセージを受け取られたとのこと。幸子さんよりイベントの謝礼としてお送りしている全額を出産ケア政策会議へご寄付くださいました。

いただいたご感想です。「私は助産師なのに妊娠中は医師の顔色を気にして、産む場所も産み方も選べないことに、何の疑問も持たなかった自分が恥ずかしいです！妊娠、出産、産後を女性主体に取り戻したいと思いました。」「今日のお話を聞いて、日本の現状や限界を感じたのですが、じゃあ日本ではどうしたらいいの？という気持ちにもなりました。日本だったら、どんな選択があって、どんなことを諦めなきゃいけないのかとか、詳しく知りたくなりました。そういうことは妊娠を希望する人や、妊娠してから知ることだと思っていたので、そうじゃなく、私みたいにまだ妊娠を希望しているのか揺れている人も、その先を知ることによって考えられることや、世界が広がるなあ、と感じました。そういう話に興味があっても、こういうイベントには実際に妊娠する気のない私は参加しづらく、でもオンラインだから遠慮することなく参加できて、初めて知ることがたくさんで、本当にいい機会でした。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1399522037104953>

◆第 3 回【「ここまでできる！こんなこともできる！これもあり！あれもあり！」継続ケアの実際】

2020/09/22 <https://mamanone03.peatix.com/> ゲスト:松浦照子さん(出張さんばステーション・松浦助産院)

「ここまでできる！  
こんなこともできる！  
これもあり！あれもあり！」  
**継続ケアの実際**  
ゲスト: My助産師育成プログラム  
ファシリテーター 松浦照子さん  
9月22日(火)  
21:00~22:30  
ママのねオンライン勉強会@出産ケア政策会議

○参加者:合計 127 名(出産ケア政策会議正会員 49 名、その他 79 名(助産師 77 名、一般 2 名))

12 月から始まる My 助産師育成プログラムスタートに向けて、プログラムファシリテーターの松浦照子さんをお招きして開催いたしました。自宅分娩を望まれるお母さんが、もし病院で産むことになった時にも病院でのお産に立ち会うことができるオープンシステムをつくりあげていらした照子さんのお話は、「目

の前の女性が導いてくれた」という言葉通りに女性が照子さんを励まし、そして照子さんが私たちに励ましてくれる、そんな内容でした。

いただいたご感想です。「助産師の本気がお母さんに伝わる。心配するより、恐れるより、目の前のことにちゃんと向き合うことをやる。お母さんの思いを受け取った照子さんの本気が、その時々で誠実に対応してきたことが、道を開いたんだと感じました。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1419633325093824>

◆第4回【ニュージーランドの日本人助産師 パホモフ由香さんに質問！『ニュージーランドの My 助産師制度にせまる！』】2020/10/24 <https://mamanone04.peatix.com/>



○参加者:合計 110 名(出産ケア政策会議正会員 45 名、その他 65 名(助産師 53 名、一般 5 名、学生 7 名))

パホモフ由香さんからまずは、ニュージーランドで助産師資格を取得するために受けた教育と、現在の働き方について説明があり、その後に具体的な出産介助例を3つお話していただきました。日本では足りていないと思われる「助産哲学」の教育について尋ねたところ、座学は少なくともにかく現場で学ぶということ。現場で働く助産師は、「後輩を育てる」ということを当然の仕事と捉えているとのことでした。働き方のバラエティ、保険、収入、賃金の出どころ、現状の問題点、教育制度の昨今の変更、出産後の自宅訪問のタイミングと回数、病院オープンシステムの中での助産師業務の話にも及びました。「ためらわずにどんどん自分ができることを見せていく。医者だから助産師だから男性だから女性だからではなく、『女性を守るために私が何ができるだろうか』を考えることで、助産師の立場があがるのではないかと。助産師として自立していることが女性を守ることにそのままつながる。日本の助産師が自立していくことが女性のポジティブな出産体験に結びついていく。」と共同代表ドーリング景子さんからの言葉もありました。

いただいたご感想です。「産む女性が中心になっていることで、助産師の喜び、達成感、誇りが生まれる。まさに、女性とのパートナーシップ、信頼関係が助産ケアの基盤だと納得しました。すべての助産師が後輩の助産師の教育を担い、女性のフィードバックが助産師を育てるという意識変革が必要と感じました。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1449649448758878>

◆第5回【今、日本で助産師をする意味】2020/11/22 <https://mamanone05.peatix.com/>  
ゲスト:草野恵子さん(くさの助産院、前静岡県助産師会会長)



○参加者:合計164名(出産ケア政策会議正会員45名、その他65名(助産師53名、一般5名、学生7名))

ゲストは、くさの助産院院長、前静岡県助産師会会長の草野恵子さん。「女性の役に立っているだろうか?」といつも考えている。役に立ってなければ意味がない」。静岡県では助産院と病院、そして助産院で働く助産師、病院で働く助産師がよく連携できている。何より、元気なお母さんが沢山いる。それはどうということなのか?なぜそうなったのか?そして、それを導いた人たちのお一人である草野さんのヒストリーと情熱の源は何か?できる限り具体的に、実現できるようにお話をさせていただきました。「連携はもともとの繋がりから。そして、探してみるもの(もしかして同郷かも!とか)。「そこにいる全員が納得する形で物事を決めて進めていく。それはもしかしたら女性が得意なことかもしれない」などたくさんのヒントがありました。

いただいたご感想です。「今までの助産師の話にはあまり出てこなかった『労働組合』『ウーマンリブ』『行政との関わり』の話が興味深かったです。原点に『女性の役に立っているだろうか』という想いがあると。そのような揺るぎない想いが私にはあるだろうかと考えさせられます。『みんなでごはんを食べること』『自信が出たらとかでなく、やりたいと思う気持ちの方が大事』まあ大体、適当で。と、スピードとタイミング『面倒くさいお仕事も引き受けるようにしている。役はやった方がいい。名刺を配ること。人とつながれること。』『67歳、独身、やりたいことしかしてない』などなど、今後自分が行動していくなかで助けになる力になる言葉をたくさんいただきました。

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1478400719217084>

◆第6回【新卒助産師が助産院で働く!?～現役助産師に今必要な発想の転換とは～】2021/01/24

<https://mamanone06.peatix.com/> ゲスト:赤塚庸子さん(岐阜県ゆりかご助産院)

第6回ママのねオンライン勉強会  
新卒助産師が助産院で働く!?  
～現役助産師に今必要な  
発想の転換とは～  
2021年1月24日(日) 21:00~22:30  
ゲスト:岐阜県ゆりかご助産院  
院長 赤塚庸子氏  
ママのねオンライン勉強会@出産ケア政策会議

○参加者:合計145名(出産ケア政策会議正会員51名、その他94名(助産師74名、一般6名、学生14名))

赤塚さんは15年前から、助産学生の継続実習を受け入れ、5年目から「1例目からの分娩介助実習」を受け入れ、そして3年前から新卒の助産師を1年間就職先として受け入れていらっしゃいます。新卒の助産師を就職先として受け入れ始めたきっかけは、継続実習で来ていた学生が「こんなところで働きたいなあ」と何度もつぶやいていることを赤塚さんが聞いたことだそうです。

様々な工夫をしながら1年間受け入れ、10年間で10人の新卒助産師を受け入れることを目標に。10人の新卒助産師が日本各地で活躍し、その先に納得のできるお産をされる女性が増えること、助産院で産まれた子供が増えることを思い描いていらっしゃいます。

1年間勤務した助産師の声を紹介しました→助産院で勤務してよかったこと:1、待つことの大切さを知っている、待てば産まれるということを知っていること。女性を信じることで女性は本来の力を発揮できてその人らしいお産ができると知れていることは自分の強みでもあります。/2、自分なりの助産哲学を育めたこと。今もお母さんと赤ちゃん達が命をかけて教えてくれたことに心を傾けて考え続けています。もし助産院で勤務をしていなくても、考え続けることは大切だと思っています。/3、「聞き出すことが上手だね」と言ってもらえることは、助産院で勤務して、妊娠出産産後は生活の中にあることを知っているから、相手のことを知りたいと思うことの大切さを身を持って学んでいるからだと思います。/4、黒子になることの大切さを知っていることです。その人の空気感を壊さないような声かけや環境作りなど意識しています。助産師はあくまでも黒子であり主役はお母さんと赤ちゃんと家族なので、「あなたのおかげで産まれました」と言われたらダメだと思い、もう一度関わり方を振り返っています。また全てのお産を必ず振り返るようにしています。

いただいたご感想です。「もっとも心に深く残ったのは、『出産の場を守る』助産師として、相手が安心できるにはどう在るべきか、言葉のかけ方や関わり方がもっとも大切だということ。私は、臨床経験が少ないことばかりに目が行き、お母さんと赤ちゃんから見て安心してもらえるか、お母さんが自分自身でいられる場を守れるか、の視点がごっそり抜けていたことに気付きました。一番大切なことは、意識、心。その方を想う心。」「一番最初にどこで経験を積めるかで、今後の助産師としてどう関わって行くかの礎になるのだと感じました。」

○開催報告 <https://www.facebook.com/myjosanshi/posts/1536800130043809>

◆最後に、参加して下さった方の概要です。

	第1回	第2回	特別版	第3回	第4回	第5回	第6回
地域開業（分娩扱いあり）	8	3	12	13	7	21	10
地域開業（分娩扱いなし）	12	14	12	12	9	19	10
病院勤務（産科以外）	3	3	3	1	0	2	1
病院勤務（産科混合病棟）	8	5	4	8	5	10	11
病院勤務（産科単科）	11	8	13	5	8	10	10
診療所勤務	19	8	9	15	7	13	6
教育機関勤務	9	2	6	1	5	6	3
行政関係勤務	9	8	5	11	5	11	9
上記以外の形で勤務	8	3	12	9	1	4	6
休職中	10	5	10	2	6	8	8
助産師ではない	15	1	51	2	5	7	6
学生	0	13	16	0	7	1	14
非正会員合計（名）	112	73	153	79	65	112	94
正会員（名）	47	50	45	49	45	52	51
合計（名）	159	123	198	127	110	163	145

出産ケア政策会議の特徴は、助産師だけでなく当事者である女性、そして男性とともに活動していることです。特別編の会は、一般の方の参加者がとても多く、感想からもその意義は非常に高いと考えます。今後も多様な立場の方と LMC 制度の実現を目標に、ママのねオンライン勉強会を開催していきます。ママのねオンライン勉強会の情報は、こちらのメーリングリストからご登録ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。 <https://forms.gle/QcXo8hRaSrsdpd1Z7>



## 出産直後に「また産みたい」8割 「ケアの継続性」「開業助産師のケア」 の有効性明らかに

出産ケア政策会議(本部所在地:兵庫県川辺郡猪名川町、共同代表:日隈ふみ子、古宇田千恵、ドーリング景子)は、少子化、妊産婦の自殺、産後うつ、乳幼児虐待など母子をとりまく社会的課題を解決するために、第1子出産後1年未満のローリスク産婦を対象に「子育てアンケート調査」を実施し、1,143人から有効回答を得ました。

その結果、産前・出産・産後の各期間におけるケアを同一の助産師から継続して受けた産婦は、異なる助産師から受けた産婦よりも、出産直後の次子出産意欲が高く、産後うつ病リスクや育児不安が低いことを明らかにしました。さらに、産前・出産・産後の各期間におけるケアを同一の助産師から継続して受けた産婦のうち、開業助産師のケアを受けた産婦は、病院や診療所に勤務する助産師のケアを受けた産婦より、出産直後の次子出産意欲が高く、産後うつ病リスクや育児不安が低いことも明らかになりました。

これらの結果から、開業助産師による継続ケア\*が、少子化、妊産婦の自殺、産後うつ、乳幼児虐待といった母子をめぐる問題の解決に貢献することが期待されます。

\*「継続ケア」とは、産前・出産・産後の各期間におけるケアを同一の助産師が継続して行うことを指す。

### 【調査結果トピックス】

1. 出産直後の次子出産意欲「また産みたい」は、  
「ケアの継続性」「開業助産師のケア」で高まる
2. 産後うつ病リスクは、  
「ケアの継続性」「開業助産師のケア」で抑制される
3. 育児不安は、  
「ケアの継続性」「開業助産師のケア」で抑制される

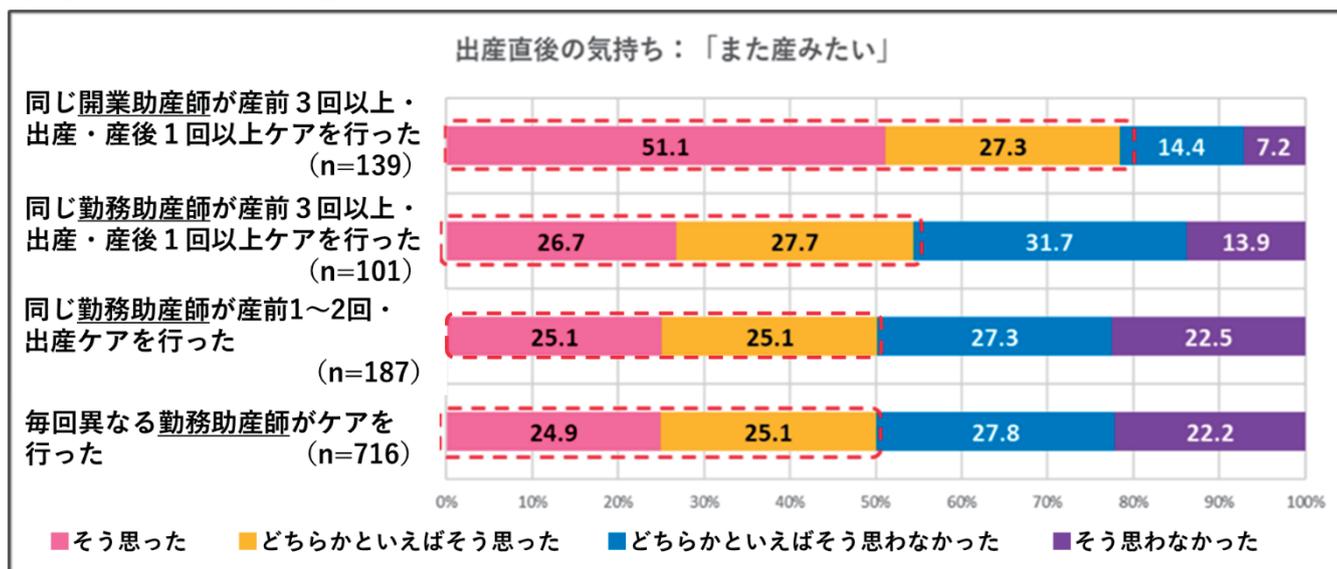


## 出産直後に「また産みたい」

### 「ケアの継続性」「開業助産師のケア」で高まる

出産直後に「また産みたい」と思った産婦は、＜開業助産師の継続ケアを受けた産婦＞では 78.4%、＜勤務助産師の継続ケア＞を受けた産婦では 54.4%、＜産前と出産だけ同じ勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 50.2%、＜毎回異なる勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 50.0%でした。

ケアの継続性が高いほど、出産直後の「また産みたい」という気持ちを高めることがわかりました。また、同じ継続ケアでも開業助産師のケアのほうが勤務助産師のケアよりも、出産直後の「また産みたい」という気持ちを高めることがわかりました。

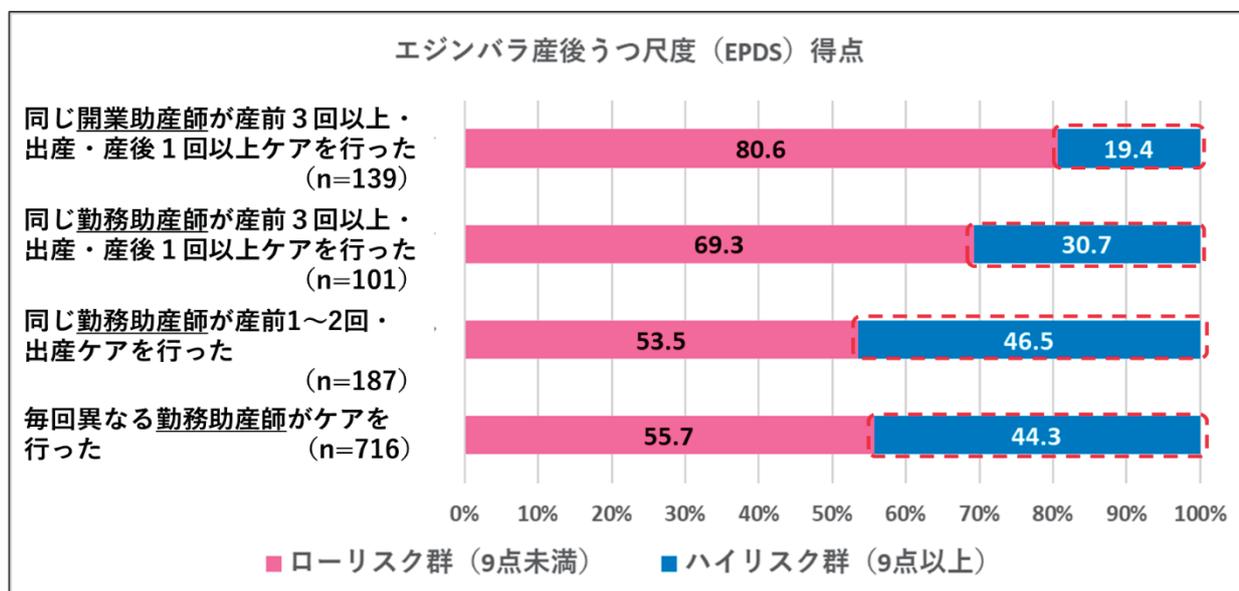


## 産後うつ病リスク

### 「ケアの継続性」「開業助産師ケア」で抑制

産後うつ病ハイリスク(エジンバラ産後うつ病尺度の得点が 9 点以上)の産婦は、＜開業助産師の継続ケア＞を受けた産婦では 19.4%、＜勤務助産師の継続ケア＞を受けた産婦では 30.7%、＜産前と出産だけ同じ勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 46.5%、＜毎回異なる勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 44.3%でした。

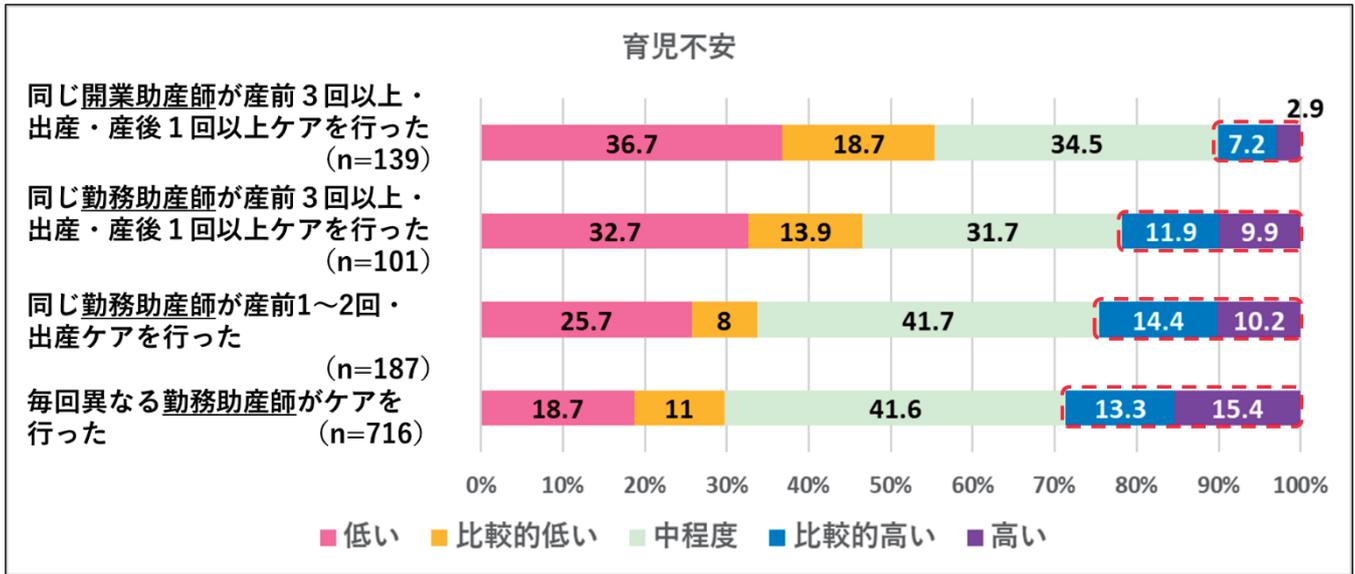
ケアの継続性が高いほど、産後うつ病リスクを抑制することがわかりました。また、同じ継続ケアでも開業助産師のケアのほうが勤務助産師のケアよりも、産後うつ病リスクを抑制することがわかりました。



## 育児不安「ケアの継続性」「開業助産師の継続ケア」で抑制

育児不安の高い産婦は、＜開業助産師の継続ケア＞を受けた産婦では 10.1%、＜勤務助産師の継続ケア＞を受けた産婦では 21.8%、＜産前と出産だけ同じ勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 24.6%、＜毎回異なる勤務助産師のケア＞を受けた産婦では 28.7%でした。

ケアの継続性が高いほど、育児不安を抑制することがわかりました。また、同じ継続ケアでも開業助産師のケアのほうが勤務助産師のケアよりも、育児不安を抑制することがわかりました。



\*吉田弘道ほか(2013)による育児不安尺度を用いて測定

文献:吉田弘道ほか(2013)『育児不安尺度の作成に関する研究 その1—4・5か月児、および、10・11か月児の母親用モデル—』『小児保健研究』第72巻 第5号 p.680-689

## 【コメント (出産ケア政策会議 共同代表 古宇田 千恵)】



世界保健機関(WHO)は、妊娠・出産を正常なライフイベントとしてみなす助産師が、ひとりの女性の産前・出産・産後を通して責任をもってケアを実施する「助産師主導の継続ケアモデル」を推奨しています。また、WHOは分娩期ケアのガイドラインの中で、「助産師主導の継続ケアモデル」は早産を 24%、流産を 19%、出産前後の赤ちゃんの死亡を 16%減らすなど安全性においても有効であることを示しています(『WHO推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』)。本調査でも、助産師による継続ケアがポジティブな出産体験を促すことが明らかになりました。しかし、我が国では、最も有効性の高かった「開業助産師の継続ケア」を受けた産婦(助産所や自宅での出産)は、2018年の人口動態

調査によると全出生数のわずか 0.6%です。99%以上の人が病院・診療所で出産している今、出産場所に関係なく、病院や診療所でも「開業助産師の継続ケア」を受けられることのできる仕組みを作ることが、少子化、妊産婦の自殺、産後うつ、乳幼児虐待など母子をとりまく社会的課題を解決するために急務だと考えます。



文献:分娩期ケアガイドライン翻訳チーム訳(2021)『WHO推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』医学書院。=World Health Organization (2018) WHO recommendations: intrapartum care for a positive childbirth experience. Geneva: World Health Organization. ISBN: 978-92-4-155021-5

## 【調査概要】

調査名：子育てアンケート調査

調査対象：第1子出産後1年未満のローリスク産婦

[注] 本調査では「ローリスク」産婦として、以下の条件に該当する産婦を抽出した。

単胎分娩、自然妊娠、正期産(37週以降42週未満の分娩)、帝王切開ではない、子宮の手術をしたことがない、基礎疾患・合併症(気管支喘息、甲状腺機能亢進症・低下症、心疾患、糖尿病、腎障害、膠原病)がない

有効回答：1,143(スノーボール・サンプリング調査139、インターネット・モニター調査1,004)

調査期間：2021年2月20日～3月5日

調査方法：《開業助産師の継続ケアを受けた産婦》スノーボール・サンプリングによるインターネット調査。当団体会員など40人以上の開業助産師(埼玉、千葉、東京、神奈川、石川、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、広島、福岡、鹿児島、沖縄)を介して、該当産婦に依頼した。

《上記以外の産婦》株式会社インテージの登録モニターを用いたインターネット全国調査(47都道府県)。

## 【団体概要】

団体名：出産ケア政策会議

所在地：兵庫県川辺郡猪名川町

代表者(共同代表)：日隈ふみ子 古宇田千恵 トーリング景子

設立：2017年5月(任意団体)

会員：103名(2021年3月現在)

事業内容：1)人材育成 2)政策提言 3)講演会開催

【本速報に関するお問い合わせ先】

出産ケア政策会議 事務局

e-mail: [mamanone.info@gmail.com](mailto:mamanone.info@gmail.com)



## 【出産ケア政策会議とは】

「すべての妊産婦に同一の助産師による産前・出産・産後をととした継続ケアを保証する制度」の実現を目指して、政策提言や助産師の育成を行っています。会員は、女性とその家族(含む男性)と助産師で構成されています。

URL: <https://mamanone.jp/>



## ロビーチーム 活動報告

和田 奈央

ロビーチームでは、チーム全体で継続ケアに関する調査や広報を行う他、メンバー一人一人が各地方自治体において行政や議員、関係団体に働きかける活動を行っています。

### ロビーチーム全体の活動

継続ケアが産婦の心理面に与える効果を検証するため、2021年2月から3月にかけて第1子出産後1年未満のローリスク産婦を対象とした「子育てアンケート調査」を実施しました。調査結果では、産前・出産・産後に同一助産師による継続ケアを受けた産婦は、そうでない産婦に比べ、出産直後の次子出産意欲が高く、産後うつ病リスクおよび育児不安が低いことが顕著であり、その差は私たちの予想以上でした。調査結果の詳細につきましては、本報告書 p.27のプレスリリースをご参照ください。

また、この調査が、COVID-19の感染拡大予防のために、立ち合い出産や面会の制限、両親学級の中止等の措置がなされている状況下で行われたことの意義は大きかったと考えられます。日本で感染が拡大し始めた2020年以降、産後うつの可能性がある女性が増加していることが指摘されており、その割合は平常時の2～3倍とされています<sup>1</sup>。私たちの調査でも、産後うつ病ハイリスク(エジンバラ産後うつ病尺度の得点が9点以上)の産婦の割合が増加していることが確認されましたが、ケアの継続性が高いほど、その割合は抑制されていることが明らかとなりました。感染症の拡大局面のような非常時においても、継続ケアが産後うつの抑制に有効である可能性が示唆されました。

今回、この調査結果をプレスリリースとして発行し、厚生労働省や各会員が住む自治体の記者クラブに持ち込みを行う(いわゆる「投げ込み」という初の試み)をしました。ほとんどのメンバーが初体験で、電話をする手が震えたり、説明する声が上がったりしつつも、結果的に全国約20か所の記者クラブに投げ込みを行いました。また、人脈を活用しメディア関係者への情報提供を行い、地方紙2社の取材に結びつきました。今後も、継続ケアの有効性や必要性を社会に訴えるために、こうした調査や広報活動を続けていきます。

### チームメンバーごとの活動

各会員が自分の住む地域において、行政や議員などに対するLMC制度導入の働きかけや、同志となる助産師や女性たちの人脈作りに取り組んでいます。チームミーティングでは進捗を報告し、有益な情報を紹介したり、困りごとを相談してアドバイスをし合うなど、お互いの情報を共有しながら進めています。2020年度のチームの目標の一つに、「ロビイングの手引き」の作成を挙げておりましたが、地域ごとに行政や関係団体の理解の程度や住民の特性などが異なり、マニュアル化することが難しいとの結論に至りました。そのため、現段階では手引きの作成は保留し、各会員が行ったロビー活動の成功例・失敗例を積み重ねていく方針としました。まだこの紙面で成果を発表できる段階ではありませんが、来年度以降の活動報告書で良いご報告ができるよう、取り組んでいきます。

### チームメンバーから

最後に、メンバー2名の今期を振り返った感想をご紹介します。試行錯誤し、励まし合いながら活動を行っている様子が伝われば幸いです。

合言葉は”面白くみんなで楽しくロビイング”地元女性議員と繋がり産後ケア政策について言いたい放題聞いてもらった後に、市議会で提言されたときは胸がスカッとなりました。初めてのプレスリリースも経験。電話でお願いしているときは、体が震えて、声も上ずっていましたが、相手方のさらっとした事務的対応に笑うしかなかった～。場所は違っても、それぞれ同じ目標を持って動いている充実感を感じてこれは癖になりそうです。 (橋)

ロビー活動というものをほとんど聞いたことがなく、一番自分に遠い活動だったので、勉強してみたいと思って、ロビーチームに参加させていただきました。とりあえずミーティングに参加し、話を聴いて、心が動いたことはできるだけ行動に起こそうと思ってきました。行動にできたことは小さなことですが、いつもミーティングでは勇気づけられ、やってみようと思えました。具体的に動けたことは、プレスリリースの投げ込み、出産ケア政策会議の同じ県内会員と話をする機会を作り、顔を知ってもらったこと、仕事で出会っている助産師仲間に出産ケア政策会議のことを話してみたこと、職場以外の助産師が繋がる場を作ったことです。行動力がないことが自分の課題だと思っているので、次年度も少しでも動けるように、ミーティングに参加してみなさんからパワーをもらいたいと思っています。(中井)

私個人は今期(2020年度)に本会に入会し、ロビーチームの皆さんの活動のお話を伺うことが大半でしたが、アンケート調査の作成やプレスリリースの投げ込み等に僅かながら関わらせて頂き、自分にもできることがあるのだと大変勇気づけられました。みなさんのお話を聞く中で、自分の住む地域にもっと人脈を作ることが課題であると実感したため、2021年度は人脈作りを目標に取り組んでいきたいと考えています。

ロビーチームでは、誰もが産前・出産・産後を通じて同一助産師による継続ケアを受けられるLMC制度の実現を目指し、2020年度の経験や教訓を生かしながら、今後さらに有効な活動を模索し展開していきます。

---

[参考文献]

<sup>1</sup> Matsushima, M. & Horiguchi, H. (2020) Prenatal and postnatal depressive and anxiety symptoms during the COVID-19 pandemic in Japan: The first quantitative evidence. Research Square. <https://www.researchsquare.com/article/rs-67579/v1>, (2021-08-15 アクセス).

## 「こども庁」創設に向けた国会議員へのロビイング報告

令和3年(2021年)2月9日、自民党本部にて、自民党若手国会議員の呼びかけによる「第2回 Children First の子ども行政のあり方勉強会～子ども家庭庁の創設に向けて～」が開催され、当会共同代表のドーリングが「ニュージーランドの LMC 制度」について紹介しました。これは、前年秋頃より、共同代表の日隈・古宇田をはじめとした当会のメンバーが、小児科医で国会議員の自見はなこ氏へのロビイングを重ね、こどもへの成育支援には、出生前からの妊産婦・母親へのケアが非常に重要であることが理解された結果です。勉強会へは、オンラインでの出席となりましたが、会場から多くの質問があり、ニュージーランドの LMC 制度への関心の高さが伺えました。その結果として、「こども庁」創設に向けた緊急提言に「産婦人科医や小児科医、また母子保健と連携したかかりつけ助産師等による愛着形成に資する産前・出産・産後の継続ケアの実施体制の強化と普及。」が明記されました。この「こども庁」は妊娠・出産の時期から切れ目のない支援を行うとし、児童虐待や自殺、子供の貧困、ひとり親家庭などのこどもの課題を扱うプラットフォームとして、行政の縦割りや、市区町村と都道府県の横割り、年齢で政策を区切る年代割りを解消し、さまざまな問題を横断的に解決する機能を持たせることを目指し、創設に向けた検討が行われています。当会では、この「こども庁」創設が目指す妊娠期からの切れ目のない支援の一環、また一番最初の重要な支援として、引き続き LMC 制度の導入とそのための助産師の質と量の強化(助産のダイレクトエントリー教育の導入)に関してのロビイングを行なっています。



2021年2月10日 京都新聞(修正:引っ越し→搬送)

## Web 制作チーム Web サイト作成に向けて

やまがた てるえ

出産ケア政策会議は、すでに助産師向けの「ママのね」という Web サイト(以下 Web)を 2019 年に作成していましたが、一般の方や妊婦さんへの情報提供の必要性や、ロビー活動も広まり、もっとたくさんのニーズに応えられる Web の作成が必要という運びから、新たに検討が始まりました。

2020 年 5 月より Web チームが結成され、今回の Web は一般の方などへ広く LMC 制度(ママのねでは My 助産師という表現)の魅力を伝えたいということでスタートしました。

Web 制作に関しては「命育」という性教育サイトを運営している、【Siblings 合同会社】に依頼しました。命育:<https://meiiku.com/>を作成したチームで動いていただいておりますので、「命育さん」とお呼びしながらやり取りをさせていただいております。



ミーティングを重ね、

- ・妊婦さんやそのご家族、これから妊娠を考えている女性や  
そのご家族、自治体行政、議員、助産師、医療従事者など多様な方が見るサイト
- ・すべての方にむけて、シンプルでわかりやすい構成
- ・今後、Web の管理をする上で私たちが手に入れられる部分がある構成
- ・ママのねの印象を引継ぎ、温かくやわらかい雰囲気のもの
- ・ニュージーランドの FIND YOUR MIDWIFE のような  
LMC を検索する仕組みを作る  
<http://findyourmidwife.co.nz/>(こちらのサイトを参考にしました)



以上のようなことを盛り込みながら、作成にすすんでいます。

大きな項目として、

### 【トップページ】

- ・大きく写真のビジュアルメッセージが入っています。  
すべての妊産婦に LMC のケアを…など写真とメッセージで出産ケア政策会議のメッセージを視覚的に届けます。
- ・LMC はお産に大事な E と 3つの C を守ります。  
出産体験談や LMC 助産師の言葉から感じられる「E と 3つの C」をキャッチコピーの一つとして掲載しています。
- ・LMC 助産師のケアが「あるとき ないとき」のビジュアルをわかりやすくイラストで掲載しています。

### 【活動報告「おしらせ」】

写真や日付、カテゴリーやタグを使って見やすく検索しやすくなっています。

### 【LMCとは】

LMC 助産師や継続ケアについて知ることができるページです。体験者の声をいれたり、インフォグラフィックスで視覚的に LMC について知ることができるページになっています。

### 【LMC 助産師を探す】

日本地図を掲載し、そこから地域ごとにクリックして LMC 助産師を探すことができるようになっています。お一人お一人のプロフィール写真や想いのメッセージ、出産可能な地域やそれぞれの HP・SNS などを掲載し、妊産婦さんが LMC 助産師を探しやすいようにしています。

### 【LMC 助産師を目指す】

出産ケア政策会議・育成チームの LMC 助産師養成へのビジョンと、第一期生のリアルボイス、そして主催者の意図や想いについて掲載しています。

また、現状の HP「ママのね」はこちらからリンクで飛ぶことができ、一部手をいれながら、継続して残していく予定です。

### 【LMC 制度化にむけて】

ニュージーランドの LMC 制度と、現在の日本でのロビー活動やモデルケースについて掲載しています。

### 【私たちについて】

ビジョン、ミッション、ママのねのロゴについて、また、これまでの活動報告書が一覧でみられ、ダウンロードできるリンクに飛べるようになっています。

### 【入会案内、寄付、お問合せ】

今までは入会の入口が別サイトのフォームでしたが、Web 内でフォームの入力ができるように現在作業をしています。

以上のような項目を盛り込んでいます。

### ◆スマートフォン表示◆



今後の公開にむけて、7月から毎週金曜日の22時に会議を重ねています。また夜間でも命育さんも何  
度も対応して下さって、Web チームすべてのメンバーがご家族のケアやサポート、ご自身の時間を使っ  
て作業をおこなっています。皆様の貴重な時間を本当にありがとうございます。

新 Web の完成後はこちらのページを活用して、【出産ケア政策会議】という名前、活動内容、【すべての  
妊産婦に LMC のケアを】というものが、まだ出会えていない妊産婦さんはじめ多くの人に届いていくこ  
とを期待しています。

会議の中で出た言葉『お産に優しい社会は すべての人に優しい社会』そんな優しさと根っこの深さが  
広がるような思いをこめて、Web 制作や運営をしていこうと思います。

◆PC版 表示◆



LMCはお産に大事な E+3つのC を守ります

Equality  
対等であること

LMCはマタニティケアのエキスパートであり、妊産婦は自身の人生のエキスパートです。

Choice  
選択すること

妊娠したら、誰と、どこで、どんな  
風に妊婦健診や出産をするか、LMCと  
一緒に考えます。

Continuity  
継続すること

妊婦健診～出産～産後、LMCが継続し  
て寄り添うことで、相互理解や信頼  
関係が深まります。

Concentration  
集中すること

LMCのサポートによって、自分の身体  
や赤ちゃん、そしてお産に集中する  
ことができます。

## 第35回日本助産学会学術集会シンポジウム登壇

2021年3月21日から22日にかけて、第35回日本助産学会学術集会(兵庫県、メインテーマ:助産師として生きる～改革と挑戦～)がオンラインにて開催されました。本会からは古宇田千恵、ドーリング景子、松浦照子の3名が下記のシンポジウムに登壇し、継続ケアの重要性や助産師の新しい働き方について講演しました。

### ●シンポジウム 7 継続ケアの本質を探り具現化へのシナリオをつくろう

[演題] 産む側が求める継続ケア (古宇田千恵)

本会が 2021年2月から3月にかけてローリスク産婦に対して実施した子育てアンケート調査の結果を報告し、継続ケアの有効性と必要性を訴えました。古宇田の発表については、本誌 p.27 のプレスリリースをご参照ください。

[演題] 助産師の源流をたどる－継続ケアの本質－ (ドーリング景子)

助産の原点はケアの継続性により成り立つこと、ニュージーランドの LMC 制度や継続ケアのエビデンスを紹介し、日本における継続ケアの制度化の必要性と教育の改革を訴えかけました。次ページ(p.38)からのスライドをご参照ください。

### ●シンポジウム 8 助産師として生きる ～女性も助産師も愉しくなる助産師の生き方～

[演題] 助産師主導継続ケアのさまざまな在り方

～自宅出産・オープンシステム出産・産院音々～ (松浦照子)

出張さんばステーション、業務委託請負制の産院といった全国的に珍しい働き方を紹介し、継続ケアを実践するための枠組みについて示唆しました。本誌 p.43 からのスライドをご参照ください。

本学術集会は新型コロナウイルスのパンデミックの影響によりオンラインでの開催に変更されましたが、そのおかげで現地開催であれば参加が難しかった遠方の方も多数参加することが可能となりました。また、アーカイブ配信により、開催時間に都合がつかなかった方も後日視聴することができました。これにより、たくさんの参加者にシンポジウムを聞いて頂くことができましたのではないかと予想します。本学術集会のメインテーマである「改革と挑戦」の名の通り、本会メンバーが訴えた継続ケアの重要性や制度化の必要性、そして産婦も助産師もいきいきとお産に取り組む姿が、多くの参加者の心に響き、変化をもたらすことを期待しています。

第35回日本助産学会学術集会 2021年3月21-22日  
シンポジウム7『継続ケアの本質を探り具現化へのシナリオをつくらう』

# 助産師の源流をたどる — 継続ケアの本質 —

京都大学大学院 / 出産ケア政策会議  
ドーリング景子

## 助産の原点・核

助産婦  
師

助産は、**女性**との関わりの上に成り立つ

**女性と助産師**を繋ぐのは**出産**という女性の体験

時間・価値・体験の共有 / 相互的なコミュニケーション / 信頼

継続ケア

妊産婦や母親の安心感  
臨床的な安全  
良好なアウトカム

女性—産—助産師

助産師  
婆

## 継続ケアとは

Woman-centred

**女性にとって**ケアが継続していること。

Partnership

一人の女性の**妊娠～出産～産後**という**一連の体験**に  
**同じ助産師**が伴走する。

No matter how and where women give birth

**リスクの程度**や**出産場所**は関係ない。

継続ケアではなく**ケア提供者の継続**  
Continuity of Care → Continuity of Carer



英国

産前・出産・産後の継続ケアを推奨 (NICE, 2017)  
同じ助産師による継続ケア推進のためのガイドライン (NHS, 2017)  
2023年までに、**すべての妊産婦へ同じ助産師による継続ケア**



カナダ

### 助産の原則：継続ケア

すべての助産師が継続ケアを提供する開業助産師  
<助産師法の例>  
オンタリオ州—理由なくケアを中断することは違法



オーストラリア

### 国や各州政府が、ケア提供者の継続を推進

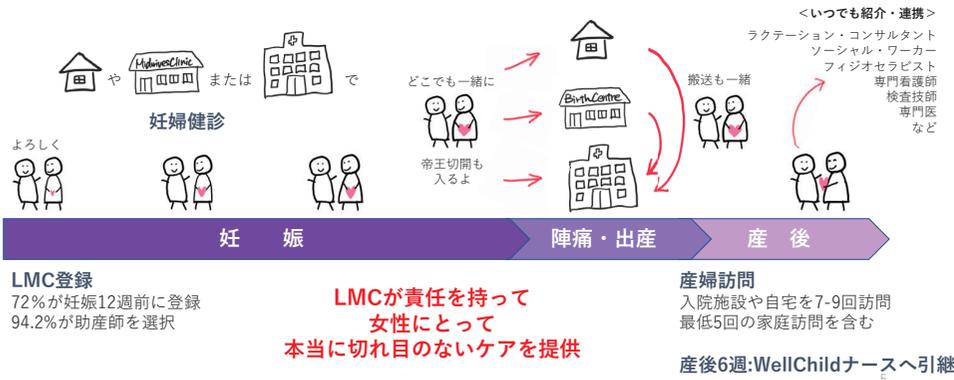




ニュージーランド

# LMC (Lead Maternity Carer) 制度 マタニティケア責任者

LMCがワンストップ窓口となって、妊産婦や母子に必要な医療・保健・福祉サービスと連携をとる。



## LMC制度の基盤となる プライマリ・マタニティ・サービスの目的

- 安全で、エビデンスがあり、パートナーシップ、情報、選択に基づいたプライマリ・マタニティ・サービスの提供を促すことによって、女性とそのパートナーおよび家族に、その女性の妊娠と出産に充実した結果 (fulfilling outcome) を得るためのあらゆる機会を与える。
- 妊娠・出産が、ほとんどの女性にとって正常なライフステージであることを認める。
- 女性のニーズに対する評価、母子のケアの計画に責任を持つLMCによる継続的なケアを女性に提供する。
- 必要とする母子に対して、適切な追加的ケアの提供を促す。

New Zealand Public Health and Disability Act 2000, Section 88

## LMC制度成立の経緯

助産師に関わる法律 (看護師法など) の改正	伴走型アプローチ (助産師の自律) を求める 女性と助産師の動き	女性の権利・患者の権利を 求める社会の動き
1971 医師の立ち会いなしの助産師による分娩介助を禁止	1978 自宅出産協会設立	1970年代 フェミニズム運動が盛んに
1983 すべての助産師に看護師免許 (看護師法改正案)	1983 「Save the Midwives (助産師を救え)」設立	
	1986 ダイレクトエントリー教育制度・タスクフォース設立	1987 子宮がん患者の承諾なしに実験を行っていたことが発覚
1990 看護師法改正 ・医師の監督なしに、助産師が自律して正常妊娠・出産のケア ・助産師と看護師はそれぞれ独立した職種である	*ダイレクトエントリー教育 看護師教育を要しない助産師の独立した教育	1988 患者の権利擁護・救済機関の設立を提言 (カートライト調査報告)
1992 ダイレクトエントリー教育制度成立		1994 保健医療及び障害コミッショナー法成立
1996 LMC制度成立		

LMCの伴走によって妊産婦が大切にされる



自己肯定感, 親としての自信・安心感

母親が子どもを尊重して育てることができる

大切に扱われ、尊厳も大事にしてくれた。だからこそ、自分の子どもも大事にしようと思える。



お産や子育てに自信が持てない中精神的に支え、常に励まし、自信をつけてくれた。その後の子育てに全部繋がっている。

~~管理・教育・指導~~



継続ケアができない！？

- 施設の都合
- 法律・ガイドライン
- 能力や自信がない
- そもそも学んでいない 等々



できない



13

### 助産師



### 妊娠・出産・産後の継続ケアができる専門家

- 助産師になる = 女性の産前・出産・産後の一連の体験に責任を持って寄り添い、ケアを提供することができる。
- 海外の助産師は、卒業と同時に開業し、自律して継続ケアを提供する。
- それが女性のポジティブな出産体験・子育て、母子の安全を護る。

15

『助産師』  
を育てる

# 女

継続ケア = 妊産婦の安心・母子の安全

女性に寄り添う  
女性  
女性  
女性

**矛盾？**

インターンシップ  
女性の力を引き出す

安心や信頼関係のないケア  
女性の声が届かない  
女性が蔑ろにされている  
安全が脅かされている

ポジティブな出産体験  
女性  
安全  
流死産  
産後うつリスクの軽減

**放棄？**

母子を護れません…



14

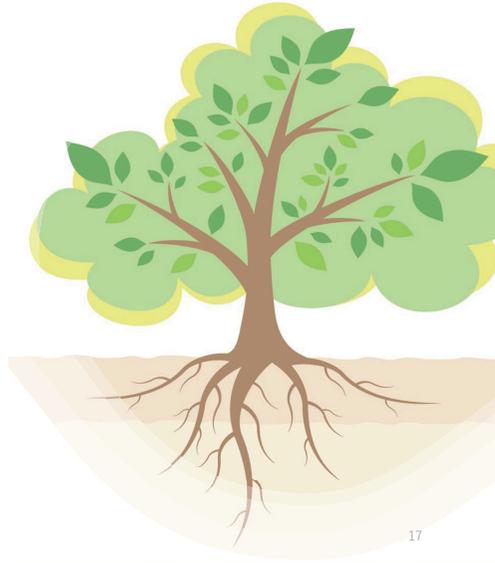
卒後1年間、助産院でインターンシップを行ない  
継続ケアを行なった新人助産師3名の声



16

学生や新人の時に  
助産の本質に触れないまま  
助産師としてのキャリアを  
スタートさせている。

どうやって  
助産師の根っこを  
育てるか



助産教育に…



助産とは何かを  
熟考する機会と時間を



多くの妊産婦と  
体験の共有を



看護ではなく  
助産を

ダイレクトエントリー教育という選択

第35回日本助産学会学術集会 シンポジウム8

## 助産師主導の継続ケアのさまざまな在り方 ～自宅出産・オープンシステム出産・産院音々～

出張さんばステーション日野春・松浦助産院  
松浦照子

※写真・ご本人の承諾あり掲載

### 山梨県内の分娩取扱医療機関

2019年1月現在で作成

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

※ p.49 に拡大版の地図を掲載しています。

### 出張さんばステーションに至る経緯 ～産む女性のニーズに添っていく中で結果的にこうなった～

- ①開業当初 新人2人で組む  
対等な関係
- ②吉村医院研修で綿密な記録と振り返りを経験  
記録・振り返り  
感じたことをそのまま書く、振り返りの重要性
- ③Farm Midwifery Center  
3人チーム 6人のMWチーム
- ④山梨・嘱託医師との出会い  
継続ケア
- ⑤京都の助産師仲間発案  
出張さんばステーションの命名。  
＝訪問看護ステーション

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

### 出張さんばステーションの特徴①

- 3人チームでのサポート  
役割は産婦さんからのフィードバックではっきりしてきました。

- ①メイン  
完全に産婦さんに集中する。
- ②メインのサポート  
胎児心音・バイタルチェック・新生児担当
- ③全体を見る  
記録・外回り・家族のサポート

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

### 出張さんばステーションの特徴②

- 30週前までにサポートMW依頼。
- 36週～37週

- ①産婦さん・ご家族と顔合わせ
- ②NCPR・出血対応デモスト  
・物品確認

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

### 出張さんばステーションの特徴③

- お産時call  
メインとほぼ同時に入る。
- 記録  
実況中継で全て記録・希望あれば産婦さんに渡す。
- 1週間以内に振り返り
- 訪問最終日か2週間健診か1か月健診にチームで顔合わせ

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

### 山梨市立産婦人科医院 (日本初の公設民営) 院長と師長

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春・松浦助産院

## 医師の声

### なぜ？オープンシステムを始めたのか。

- お産は最初からみていた人が最後までみた方が上手くいく。
- 自分達と違う開業助産師の世界を知るのは、スタッフの学びになる。
- 今後の風潮は個々の好みが細分化していく方向。これに応えられるのがオープンシステム。
- 妊産婦の満足と助産師のやりがい、分娩数の維持と分娩施設の存続に繋がる。

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 9

## オープンシステムとは？ 医院の場所を借りてお産

陣痛室  
直接照明



ベッドを出してマットレス  
間接照明



2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 10

## そして、現在

### フローリング・布団・間接照明・自然光



2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 11

## 最も心がけたこと

### スタッフとの振り返りカンファレンス



2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 12

## 第3次医療機関との連携

### 胎児超音波診断スクリーニング 26~28週位 NICU医師の出張講習 助産院でNCPR S コース開催




2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 13

## 分娩施設を持たない出張さんばステーションの面白さ

産婦さんからの声

- 自宅出産でも、病院出産でも場所にかかわらず信頼のおける助産師さんがいつでもそばにいてくれる。
- 責任を持って一人の女性に、オーダーメイドな継続ケアが提供できる。

- 維持費・光熱費などほとんどなし（掃除・洗濯・食事作りなし）
- 報酬お産1件につき40万円  
時間給ではなく一人の妊婦さんを契約方式で直接報酬を受け取る。  
時間にとらわれず必要なだけかかる。ex)訪問:午前1人 十午後1人
- 自律した開業助産師同志・ゆるやかなネットワーク・対等な関係  
チームでかかわる面白さ・補い合い助け合い。

2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 14

## 自宅での妊婦健診の様子

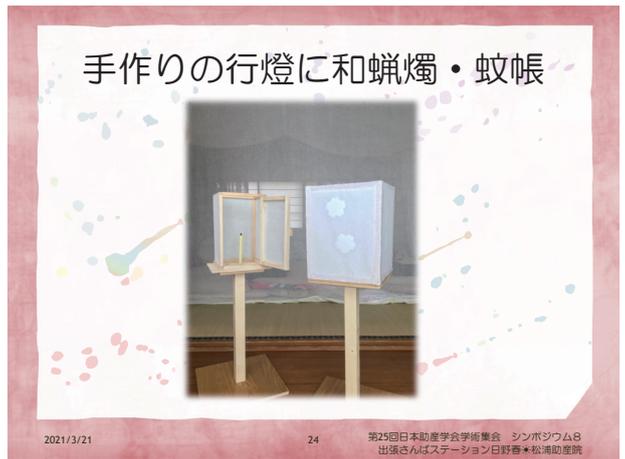


2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 15

## さらして産み綱 お守りにアイヌ衣装



2021/3/21 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院 16



### お産はご神事というご夫妻 巫女衣装にてお産サポート



2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

25

### お産は御神事・産婆は巫女



2021/3/21

26

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

### お産の時のユニフォーム



2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

27

### スカッとして気持ちいいのよね〜



2021/3/21

28

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

### 4cm 陣痛中に薪割りで気分爽快



2021/3/21

29

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

### オープンシステムの部屋にカーテンで即席天蓋



2021/3/21

30

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

### 天蓋の中で幸せなひと時・産後3時間位



2021/3/21

31

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

### 自宅出産希望→27週の超音波で口唇口蓋裂 見つかかりオープンシステムへ移行



2021/3/21

32

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



やりたいことをやりたいようにする

2021/3/21 33 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



医院の受け持ちスタッフと一緒に継続ケア

2021/3/21 34 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



医院受け持ちスタッフ：赤ちゃんのケア  
開業助産師：お母さんのケア

2021/3/21 35 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



お家に帰って沐浴

2021/3/21 36 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



第1回目の手術後

2021/3/21 37 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院



ありがとう！

2021/3/21 38 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

バリ島 プミセハット国際助産院



2021/3/21 39 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

みんなで赤ちゃんを祝福 at 沖縄



2021/3/21 40 第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

## 夕日を眺めながら陣痛待ち



2021/3/21

41

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

## チームMWも一緒に海へ



2021/3/21

42

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

## 夫・サポートMWに囲まれた中で



2021/3/21

43

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

## 幸せなお腹からのお産

(帝王切開 at ゆいクリニック 沖縄)



2021/3/21

44

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

## 産院音々



2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

45

## 軽井沢の隣町 御代田町

- 浅間山を臨む標高約800mの高原地域
- 人口約1.5万人
- 軽井沢～車で約30分
- 新幹線佐久平駅～  
車で約15分
- 信濃電鉄 御代田駅  
～車で約5分



2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

46

## 産院音々の理念

私たちは「幸せなお産」のために、  
女性が自分自身の裡なる力が発揮できるよう  
チームワークを大切に  
継続的なケアを提供します。

### 【基本方針】

- ①一人の妊婦さんに、助産師2～3人チームで妊娠・出産・産後まで継続的にサポートします。
- ②助産師は、医療介入を最小限に抑えるケアを提供するとともに、医療介入が必要な時期を的確に判断し、医師と協力して安全なお産のサポートをします。

2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

47

## 新しい働き方の模索

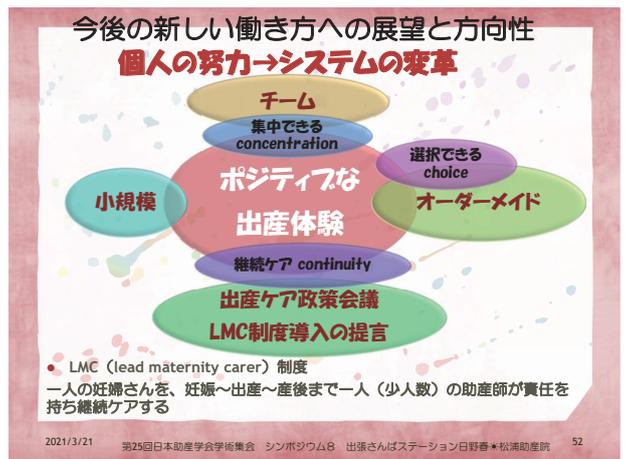
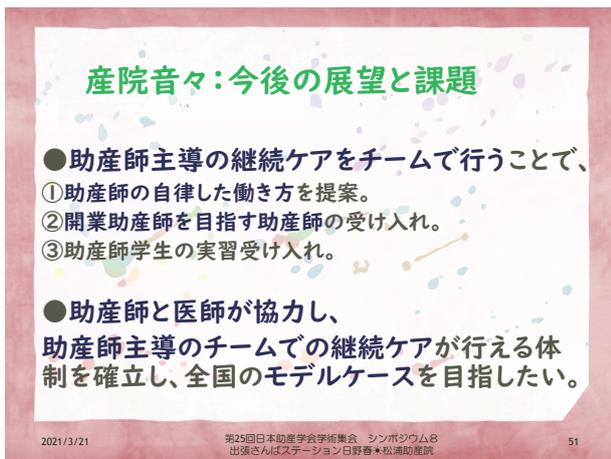
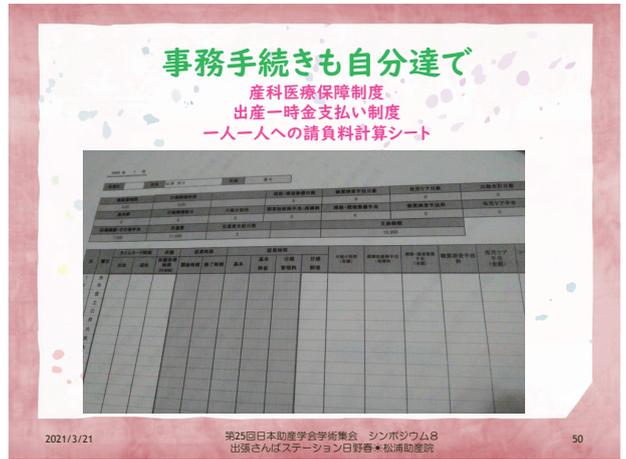
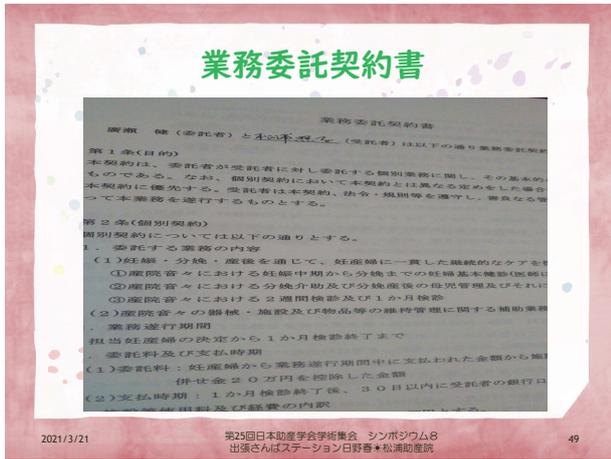
### ● 業務委託契約（パイロットスタディ中）

- ①妊娠20週までに担当助産師3名を決めて妊婦さんに挨拶。  
(1人のメイン助産師が1件の分娩を請け負い、サポート助産師2人を決める。)
- ②妊婦健診は、メイン助産師が中心にサポート助産師も含めそれぞれ相談しながら行う。
- ③分娩は3人の助産師で行う。(医師Callは助産師の判断)
- ④入院中の日勤・夜勤などの時間は各自で自由に相談し決める。
- ⑤1か月健診終了で業務委託は終了。

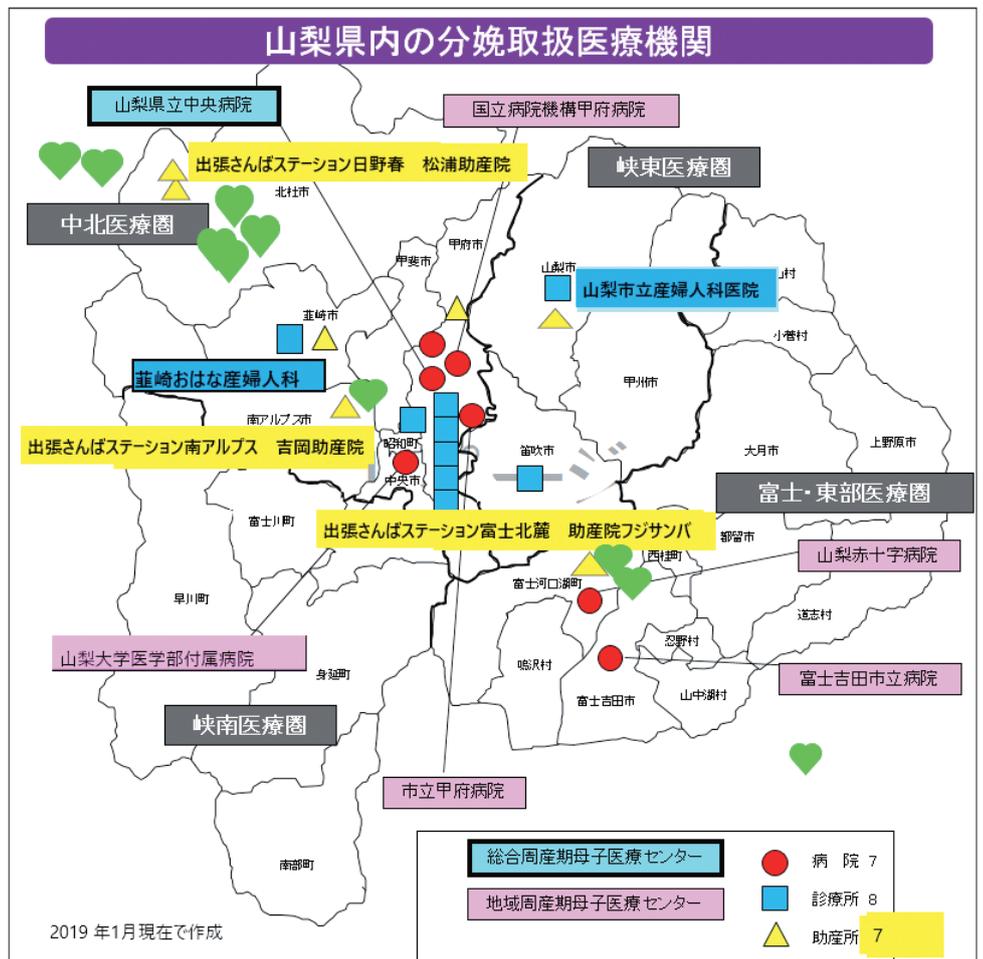
2021/3/21

第25回日本助産学会学術集会 シンポジウム8  
出張さんばステーション日野春\*松浦助産院

48



p.43 スライド no.2 の  
地図の拡大版



## 2章 メンバーによる活動

出産ケア政策会議では、団体全体としての活動のほか、各々のメンバーがそのバックグラウンドや人脈、特技などを活かしながら、My 助産師制度改め LMC 制度の実現や継続ケアの普及のために様々な活動をしています。その様子をご紹介します。



My 助産師（LMC 助産師）・継続ケアを

### 実践する

キーワード：

#丹波篠山市 My 助産師制度 #助産院建設 #開業 #オープンシステムを目指す  
#地域で働く #バースセンター（共同助産所） #業務委託契約型助産院の今

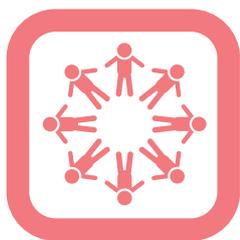


My 助産師（LMC 助産師）を

### 育てる

キーワード：

#助産院新卒助産師インターン受け入れ



仲間と

My 助産師（LMC 助産師）を

### つながる・広める

キーワード：

#お産ラボ #お産を語る会 # My 助産師普及リーフレット  
#ママのねすごろく # My 助産師制度導入署名キャンペーン

※次ページ以降、



は助産師会員、



は助産師ではない会員による活動報告を表しています。



## 【北海道】北の国から ～お産を語る会で「つながる」～

つながる・広める

でいだらぼっち北海道代表 高橋宏美

### 自己紹介

京都出身。北海道留寿都(ルスツ)村在住。33歳2児の母。

2017年緊急帝王切開で長男出産。2020年次男 VBAC 出産。介護職の夫と4人暮らし。

2019年「でいだらぼっち北海道」を夫婦で立ち上げ、助産師さんと共に【お産を語る会】を北海道各地で開催中。



### はじめに

2020年度はコロナ禍で、私達でいだらぼっちも思うように動けない日常を送っていました。その中で第2子の妊娠がわかり、北海道の地で初めて妊娠出産産後を経験する事になります。第1子を京都の助産院で出産予定でしたが救急車で運ばれ総合病院で緊急帝王切開で出産。その後何万人に1人という稀な異常が見つかり、入院生活を送りました。

「お産は何が起きるかわからない。だけど、起きることは全てお腹の子からのメッセージだと思ってね。」私達の大切な助産師さんからの言葉です。この経験があったことが、今の自分の活動へと繋がっています。

### (1)お産を語る会

産前・出産・産後のことを語り合う場を作っています。語る事で自分でも気がつかなかった想いに気づき、その想いを他者と共有することで「気づきの連鎖」が生まれます。自然と笑いや涙が溢れるような、そんな会です。

#### ～活動内容～

北海道各地で助産師さんとママさんパパさんの出会いの場になっています。公民館、助産院、産後ケア施設、整骨院など、開催場所も様々で毎回色々な方面の方が参加して下さいます。

#### ～結果～

- ・延べ100名以上のママパパ、助産師さん、異業種の方に参加いただきました。
- ・「色々な方の語りを聴かせてもらうことで過去の自分の整理ができ、また産みたくなった。」との声も。
- ・ベテラン助産師さんと若い助産師さんのつながる場になり、弟子入りの様な形で一緒に仕事をするようになった方もいます。

◎元々は私たちもお産を語る会の参加者でした

京都で第1子妊娠中に【きょうとお産といのちの会のお産を語る会】に参加したのがきっかけで、その会が大切にしている「いのちの始まりのお産を大切にできたら、すべての命を大切にできるあたたかい社会になると信じて」という想いに魅了され、北海道支部として活動していこうと夫婦で決めました。

現在はメンバーも増え、助産師さんや父親母親メンバーと共に北海道全域での開催を目標に活動しています。

＼涙あり笑いありの語る会／

＼子供達も外でのびのび／

＼でいだらぼっちメンバー達／



## (2)コロナ禍での第2子出産

お産を語る会をやり始めていたおかげで北海道の開業助産師さんとの繋がりが広がっていました。そのため、妊娠前から北海道でも自分に合う助産師さんを見つける事が出来ていたことが、今回の出産にはとても重要でした。

1人目を帝王切開で出産している場合、日本では2人目も帝王切開が主流。でもVBACも気になる。2人目はどのようなお産にしたいのかが漠然としか考えておらず、考えると怖さや不安の方が大きかったため、自分の想いをゆっくり自分に聞いてあげる事なく過ごしていました。2人目の妊娠でやっと自分の心と向き合い、My助産師と共に語りあい、ある総合病院を教えてもらい健診にしてみる事になりました。総合病院のデメリットをよくよく理解し、覚悟していた私達夫婦ですが、やはり流れ作業のような健診(5時間待って10分だけの健診)、妊産婦との簡素な関わり、そしてコロナ禍での出産の現実を突きつけられました。腕が良いと言われるドクターでしたが、母親主体ではなく、医師優位。その縮図が出来上がっていました。

医師ともコミュニケーションをとり信頼関係を築くのはとても困難のように感じられた妊娠初期。心のモヤモヤや自分の想いはいつもMy助産師に聞いてもらっていました。オープンシステムでMy助産師に立ち会ってもらいたいと病院側にお願いしましたが、夫の立会いさえコロナ禍では不可能でした。それでもできる事を！と諦めずに何度も何度も工夫をこらして病院側に夫婦で想いを伝え続けました。

～具体的に試みた事～

- ・産婦人科のスタッフの名前を覚え名前と呼ぶ。挨拶をする。
- ・必ず夫婦で健診に行く。(印象付ける)
- ・伝えたいことはメモして準備。
- ・わからなかったら何度でも聞く。これからの見通しを聞く。
- ・忙しそうで伝えにくい場合は先生に手紙を書き、渡してもらう。(計3回渡した)
- ・自分達の活動や想いも知ってもらう。

どうすればより安心して出産に臨めるか考え、都度病院側に伝えていました。例えば、病棟と外来が完全に分かれている大きな病院だったので、出産時にお世話になる助産師さんに会いたいとお願いしてみたり。(叶いませんでしたが。)

My助産師の立ち会いのお願いも含めて、これは自分のため。との想いもありましたが、どちらかという自分の代でダメだったとしても未来の妊婦さんのために何かつながれば。。と思って諦めず話していた気がします。どうしても伝わらなくて悔しくて涙したこともありました。そんな妊娠生活でした。

長男や夫とともに生命の育みを感じたいのに子供の健診立会いができなかったのが病院の健診とは別に My 助産師の元へ通い健診を何度も受けました。おかげで長男も赤ちゃんの成長と一緒に見ることができ、心音を一緒に聞いたり、腹帯巻くのを手伝ってくれたり、赤ちゃんの誕生を楽しみにしていてくれました。本当はこういったことが病院でできたら良いのに。。

日本でも全ての妊産婦さんに妊娠中から継続して関わってくれる My 助産師の存在があれば妊娠中から感じる「孤独」は減って行くと改めて感じました。自分自身を受けとめ、認めてもらう。不安も想いも共有できて、これでも大丈夫だあ。と安心感を感じてほしい。その気持ちがこれからの子育てで糧になり、夫と共に頑張っていこうと思えるのです。何かあった時もずっと見てきてくれた My 助産師がいるからなんとかなる。そう思っています。1人産んでも2人産んでも My 助産師は私達夫婦にとって、いなくてはならない人なのです。

子育て支援の前にまずは母親支援が必要です。母親が笑うと子供が笑います。子供は未来そのものです。未来を考えるなら、国や地域はこういった母親支援に力を入れるべきだと強く思います。

～結果～

頑張った甲斐があり、医師との信頼関係も生まれていきました。お産の時も私が思い描いた事をできるだけ叶えるために医師や助産師、看護師さんが尽力してくださり、とても良いお産になりました。ここに導いてくれたのは My 助産師のおかげです。諦めなくて本当に良かったと思いました。退院後はすぐに、My 助産師の元に2泊3日の産後ケアを利用しにいきました。一言でいうと至福の時でありました。妊娠前からお互いに知っている関係、妊娠中の苦労や不安も分かち合った My 助産師。心から第2子の誕生を喜んでくれて、これからの4人家族スタートの基盤をその産後ケアで整えてもらいました。出産した総合病院では、私達夫婦の妊娠中からの働きかけが話題になり、助産雑誌に私達のお産について載せたいとオファーもいただきました。

来年度は札幌の助産学生さんに対して出産体験をお話する機会もいただいております。



My 助産師に支えられ



元気に生まれました



産後ケア利用した様子

長男も My 助産師大好き

### (3)北海道に My 助産師制度を。

2020年5月 SNS で、旭川で病院勤務されている助産師さんからメッセージがきました。その方と直接お会いし「My 助産師制度の制度化に向け北海道でも具体的に動いていきたい！」という流れになり、「北海道に My 助産師制度を。」というチームを立ち上げました。

#### ～活動内容～

zoom を利用し、北海道在住の方に向けて My 助産師制度のオンライン勉強会(参加無料)を毎月開催しています。継続ケアを受けた方の体験談を交えて My 助産師制度の必要性を知っていただく場になっています。また、毎月メンバーミーティングをオンライン(たまにオフライン)で行い、勉強会の内容を決めたり、自分たちにできることを見出だし合ったりと和気あいあい活動しています。

#### ～結果～

メンバーが増え、現在は助産師4名、母親父親5名、助産師を目指す高校生1名の計10名に。旭川の助産師メンバーがラジオ(FM もえるフラットママラジオ)に出演し、My 助産師制度についてアピールしたり、勉強会に市議会議員の方が参加して下さったりと、少しずつですが北海道にも広がりつつあります。

北海道の面積は21都府県を合わせた広さに匹敵するほど広大で、地域によってお産事情、子育ての悩みも全く違うという事が特徴です。北海道はお産できる場所が札幌旭川などの都市部に集中しており、雪の問題もあるためお産する予定の場所まで1時間以内でないといけないというルールもあり、住む場所によって産科施設がかなり限られてしまいます。必然的に里帰り出産が増えるため計画分娩になってしまう割合が大きいのです。

そんな状況の中でも妊産婦さんがより自分らしい尊重されたお産ができるように、自分がどんな選択肢を持っているのかがわかる全道のお産 MAP(分娩扱いのある全ての施設が載っている MAP)を作成中。各病院、クリニック、助産院、それぞれでどんな特色があるのか実際に出産されたお母さんお父さんにアンケートを取りながら進めています。完成後はどの様に地域で配布してもらえるか模索中です。

北海道My助産師制度  
オンライン勉強会

無料 zoom 開催  
1月16日(土) 21時～22時

10名限定 耳だけ参加も可

My助産師制度とは？  
継続ケアの必要性について  
ママさん方の体験談を交えて  
お話ししますか  
My助産師制度が気になる方  
ご自身の妊娠、出産、産後の経験を  
通しておしゃべりしましょう！



参加者:道民または移住予定の方



勉強会の様子やチラシ



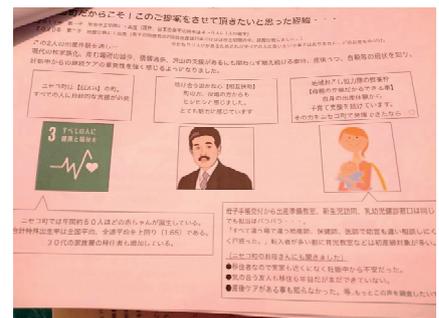
(4)My 助産師制度を地方から

地方で募集している地域おこし協力隊の自由提案枠を利用し「My 助産師制度」を地方でどのように広げていくか提案書を提出しました。協力隊として採用とはなりませんでしたが、地方からできる形を今後も提案し続けたいと思っています。

他にも、地域の開業助産師さんの所へ訪問し、私達の活動を伝えたり、各地域の開業助産師さんのご意見もいただいています。今後は地域の開業助産師さんを巻き込みながら、地域に合った形でまずは産前からの継続ケアができないか考え続けていきたいと思っています。

また、私たち自身、4月から留寿都村という地方に引越しました。

人口1900人ほど、出生数約20人／年、産婦人科ゼロ、この村でできる継続ケアはどういった形なのか、女性村長にアプローチしてともに考えていけたらと思っています。



(5)オンラインお話し会

機会をいただき、助産学生さん向け、一般の方向け、それぞれに私の出産体験談のお話をさせていただきました。一般の方向けのお話は280人を超える方々が聞いてくださりました。他にも、沖縄の助産師さん達と情報を交換し合う「琉球アイヌ大作戦オンライン交流会」を不定期で開いたりもしています。一番離れているけれど、どこか繋がる地域柄や心持ち。お互いに心地よい刺激になっています。この様な助産師さん同士の繋がりを全国で広げていくことも大切だと思っています。

最後に

広い北海道だからこそ、繋がる必要がある。  
広い北海道だからこそ、孤独を感じている人もいる。  
過酷な自然環境の中でその人がその人らしく生きていくには  
まずは支え合わなければなりません。  
支え合うことが当たり前の社会の先に  
My 助産師制度の制度化実現があると、私たちは考えます。

## 【長野】「産院音々」始動1年半後の今

実践する



出張さんばステーション日野春★松浦助産院 松浦 照子

## 1. 体制の変化

2019年4月～開設準備 御代田中央記念病院附属「産院音々」としてスタート

9月にスタッフ1/3退職

12月～3人チーム(メイン1名+サポート2名)での助産師主導継続ケアでの分娩開始。

スタッフ医師2名+助産師7名

2020年4月～病院から独立し廣瀬医師経営「女性のための医療サポート」が母体となり「産院音々」となる。

2021年4月～再度母体の病院へ吸収され御代田中央記念病院附属「産院音々」に戻る。

1分娩あたり20万円のスタッフ減収で苦境に立つもスタッフ全員残る。

現在スタッフ医師1名+助産師15名

## 2. スタッフについて

現在 開業助産師(分娩扱い)6名(長野2名・群馬・山梨・埼玉・愛知) ※産院音々始動後の開業4名

開業助産師(保健指導)3名(長野・群馬・埼玉)

フリー助産師 6名(長野5名・山梨1名)

## ①助産師14名の内訳

・外来専属助産師1名+主に外来業務1名

・指導的立場の開業助産師3名(内2名はサポートが主)

・メイン担当助産師 約6名

・主にサポートのみの助産師 約4名

※しばらく分娩に参加していない助産師 約4名(会議のみの参加)



## ②経験年数

10年以上 10名(第3次医療機関からの転向者1名)

5～10年 1名

5年以下 4名(第2次・第3次医療機関からの転向者3名)

## 3. 分娩の実際

2019年12月～2021年5月 分娩24名

母体搬送3名(胎位異常1名・心拍異常2名)

新生児搬送1名(呼吸障害)

その他 退院後黄疸入院1名

#### 4. 工夫と試行錯誤

①月3回の ZOOM 会議 毎週木曜日 1 時間半～2 時間程度

第 2 木曜日 事務等の連絡会議

第 3 木曜日 産婆学日(さんばまなぶでい)その時々の特ピックスの勉強会

第 4 木曜日 妊産婦さんの情報共有

②チームミーティング

※ZOOM によるチームでの情報共有・37 週前にはチームでフリースタイルでの体勢確認・物品確認・緊急時対応シュミレーション

③お産の振り返り(一番力を注いでいる!)2～3 時間

④妊産婦さんとの交流

※定期的でなくその時々々の妊産婦さんの状況に合わせてメイン助産師が企画しみんなに声をかける。

・バレエストレッチ

・お散歩の会

・産後のおしゃべり会

・フラを踊る

・剣道を通した軸を感じる体験

・模擬結婚式

・里帰り出産の方や、遠方の助産師との顔合わせが遅くなりそうな場合、ZOOM を活用しチームの紹介



#### 5. スタッフの声

・今までは搬送を受ける立場として病院の中で働いてきていたが、音々の働き方は全く違う。こういうお産でいいんだという確信が強くなってきた。いろんなことがあっても揺らぎが少なくなった。

・病院ではできなかった出血対応の仕方、点滴の管理全て助産師主導なので最初は戸惑ったが、だんだん経験するうちにわかってきた。

・3 人チームでの受け持ち方が最初はどのようにいいのかわからず、一人で頑張っていたが、やっていくうちにチームの良さがわかってきた。

・お母さんと赤ちゃんにゆつくりかかわれるのがいい。

・妊婦さんに必要なだけ時間がとれゆったり妊婦健診できるのが自分も幸せ。

・病院ではいつもすぐそばに医師がいたりスタッフが大量いて自分で考えて判断するということがで

きているようで責任をもってはできていなかった。

・病院ではお産の時だけ、分娩の時だけ、産後の時だけというようにブツ切れのかかわりだったのが妊婦健診から1か月健診までずっとみることの面白さを経験している。

・助産院とも違うチームでかかわるということを学んでいる。

・妊婦さん、産婦さん、赤ちゃんを中心においたケアの在り方を一番大切にできる。

・経験の違う助産師達がチームを組むのでそれぞれの力量の違いもありサポートの在り方を考えさせられる。

・教育というより、違いを知ってお互いに感じたことを言い合えるようなチームをめざしたいが、今までの上下関係や、権威主義に染まった殻を崩していくのに力がある。率直なコミュニケーションがなかなか難しい。

・チームでの連携・スタッフ間の共有・医師との連携にエネルギーがいる。

・3人チームで継続ケアをし、給料ではなく自分達でお金の分配もしていくシステムができたのは画期的。独立心が育つ。

・助産師の教育システムがまだしっかりできておらず、医師との連携やサポートの程度がわかりにくく苦勞することがある。

・産院音々の今後にむけての展望に添ったシステム作りが必要。

・医師との連携や意見交換、チーム間での意思疎通に力がある。

## 6. 今後の課題と展望

●助産師の力量に応じたサポート体制づくり

●医師を含めたチームでの連携・意見交換・意思疎通をスムーズにしてい

●産院音々のめざすところをはっきり打ち出していくことが必要な時期

・登録制にする。(登録料を発生させる)

・分娩を扱う開業助産師を目指すための場→LMCの育成

・将来的には開業助産師のオープンシステムができる場

・開業助産師の集まるステーションとしての場→LMCステーション

・開業医師と協働できる場→助産院の枠に縛られず妊産婦さんのケアができる

●全国のモデルケースとなり、いろんな場所にこのような場ができることをめざしたい。→学会発表など



つながる・広める

## 【静岡・山梨】一人一人の自律が産み出し育む LMC 制度

大野 誠士

約14年のアメリカでの心理セラピスト、トラウマヒーリングセラピストや准教授としての体験、自身の癒しへの取り組みや学びを通じて、個人や家族を超えた社会システムや文明自体が自然のリズムや法則から離れ、内側でも外側でも生命に対しての優しさを失われていっていることから生きづらい世の中になっているのだと理解するに至りました。そこで社会システムそのものが癒やされ、より優しい社会へと変わっていくためには外側の法律や制度が変わっていくと同時に、人々や組織の内面の意識が変わっていく必要があるという確信から、特に社会の内面の変化に働きかけるために2019年の夏に独立して個人オフィスを設立しました。長年取り組んできた内面の癒しや意識の変容に関する知識や知恵を携えて、社会の様々な領域で世の中を良くしようと取り組んでいる人たちや組織と協力して、豊かさが循環する世界を迎えることを願い始めたのです。

その時から意識していた領域の一つがお産でした。自身の癒しの旅の途上で周産期トラウマヒーリングワークに出会い、人の成長と幸福のためにその繊細な時期がいかにか大切に理解し実感していたことで、カリフォルニアにいる盟友の力を借りてよく自身の人生にも優しい変化をもたらしたそのワークを日本にも紹介しようと思っていたのです。

しかし、新型コロナウイルスの影響もあってそれがいつになるのかの見通しが立たなくなっていた頃の昨年6月初めに、フォローしていたFacebookの「お産と助産」のページでシェアされていた丹波新聞の記事を通じて一人の助産師が継続して妊産婦に寄り添うことを実現させるための「My 助産師制度」のことで丹波篠山市での取り組みについて知りました(p.79 参照)。このような制度が日本全国に広がるといいなと思っていたところ、数日後に署名キャンペーンを立ち上げるアイデアが頭に浮かびました。それでも初めは自分でキャンペーンを立ち上げるつもりはなく、お産や政治に関わる知人女性たちにそのキャンペーン立ち上げを勧める意図でそのアイデアをシェアしたところ、その女性たちが皆、「男性である大野さんがそのキャンペーンを立ち上げた方が意義深いと思いますよ」と背中を押してくれたこともあって、自分で署名キャンペーンを立ち上げてみることにしたのです。

The screenshot shows a Change.org campaign page titled "「My 助産師制度」の全国での導入推進を要望します!". The page features a central image of hands holding a baby's feet. To the right, there is a progress bar showing 841 signatures, with a goal of 1000. Below the progress bar, there are social media sharing options for Facebook, Messenger, Email, and Twitter. The main text on the page explains the purpose of the campaign: to support mothers and their families by ensuring they have a dedicated midwife. It mentions that the 'My Midwife System' is a legal system in New Zealand and that the campaign aims to introduce it in Japan, starting with Shimosuwayama City in Tanabe Prefecture.

しかし、署名の数が集まって何かしらのムーブメントが生み出されるのではないかとほのかに期待していた気持ちとは裏腹に、その数は思っていたよりも全然伸びませんでした。それでも、感謝の気持ちを女性の方々から個人的に伝えられたり、キャンペーンページの閲覧者数は3万人を超え、ページは300回近くシェアされたりと「My 助産師制度」そのものの周知には微力ですが貢献できたのかもしれないなとは思っています。

それから、これは予想していなかったことですが、この署名キャンペーンを立ち上げたことを契機として助産師さんたちやお母さんたちとのつながりが生み出され、出産ケア政策会議の存在を知ることが出来たのです。そして、その流れが My 助産師育成プログラムの特別編でお話させて頂くことや、西川直子さん主催のオンラインイベント「語り継ぐお産と私の生き方」の安全な場づくりのための協力やお話の聴き手として参加させていただくことにつながりました。署名キャンペーンを立ち上げた時の思惑とは違っていたものの、結果的にはお産の領域で世の中を良くしようと取り組んでいる人たちや組織と協力してより新しい社会を迎えることが始まったように自分の中では感じられました。

お産の一つの側面とはまだ見ぬ生命をこの世に迎える営みであることだと思いますが、人生を生きるにあたってはまだ存在していない未知の人生・生き方を迎え入れるようにして生きることが出来るのだと思います。そのようにして生きる力は本来誰しにも備わっているのでしょうか。LMC 制度は、それに関わるすべての人たちが自律して考え感じ自ら行動しながら生きていくことによって産み出され支えられていく制度なのではないかと個人的には思っています。一人一人が自律して今の自分の予想を超えた未来という糸を紡ぎ出していくことで、その編み上げられた多様な糸が協力して LMC 制度というタペストリーを織り上げていくのではないのでしょうか。

LMC 制度が成立し持続していくためには制度づくりを担う政治や法に携わる方々だけでなく、当事者である助産師さんやお母さんたち、そして、社会全体の意識がより優しく、より自然のリズムに近づくように変化していくことも必要なのだと思います。内面の変化や意識の変化は数値などには表れないものですが、LMC 制度が成立するためには社会全体、そして、助産師さんたちやこれから親になる世代を含めたすべての世代の意識が変化していくことが必要不可欠だと思っています。その部分を心に留めながら、助産師さんたちやお母さんたちと協力し、ビジネス、教育、政治など、他の様々な領域の方々とも引き続き関わらせていただけたらと思っています。そして、LMC 制度を長期的に支えるつながりが生まれるように領域を越えた架け橋にもなっていけるよう活動していきたいと思っています。

## 【静岡】お産ラボの活動

つながる・広める



お産ラボ 平田 砂知枝

2016年3月8日にお母さん2人でお産ラボを立ち上げました。出産は、女性の人生においてとても大きな出来事なのに、自分のお産について振り返ったり、語ったりする機会は、ほとんどありません。妊娠する前に、学校で学ぶこともありません。お母さんを中心にみんなでお産体験をシェアし、ともに学ぶ場所、みんなが主役、それがお産ラボです。現在20名の仲間がそれぞれの場で活躍しつつ、「できるときに、できるひとが、できるだけ」をモットーに、活動しています。

私は、自分の素敵なお産体験から、お産・助産師さんに深い想いを抱き、お産ラボを立ち上げました。お産ラボで、お母さん、助産師さんたちから、いろいろなお話を聞き、日本の将来のお産の在り方に危機感を持ちました。ちょうどその時に結成された出産ケア政策会議の想いに感銘を受け、1期生から、お母さんの立場で参加しています。



さて、お産ラボを立ち上げ当初、毎月1度、お産を語る座談会(お産ラボ)を開催すること、11月3日のいいお産の日にイベントをすることを目標に掲げました。コロナが猛威をふるう前の2020年2月、ちょうどお産ラボが5年目を迎える直前まで続けてきました。

座談会では、これまでに、たくさんのお母さんやお父さん、助産師さん、学生さんだけでなく、年配の方も参加し、世代、性別を超えて貴重なお産・育児体験をシェアしてくださいました。また、いいお産の日イベント、助産院・産院ツアーや講演活動、助産師メンバーによるさらし活用術やおむつなし育児や兵児帯講座など育児に関するイベントや、大学、病院、クリニック、助産院と垣根を越えた助産師さんたちと一緒に「母子と助産師の交流会」などもしてきました。



コロナ禍で世界が一変した2020年、リアルで密

な語り合いの場であるお産ラボは、開催を見合わせる事が多く、定期的な開催はできませんでした。だからこそ原点に戻って、お産ラボが最初の一步を踏み出したくさの助産院で学生さんたちと座談会をしたり、オンラインで自分のお産体験を話したり、コロナ禍でお産をした仲間のお話を聞いたりしてきました。中でも、妊娠中におなかを触ってもらったり、いろんな人に赤ちゃんを抱っこしてもらえなかったことが1番寂しかったというお話が印象的でした。改めて、お産の奥深さと、お産を語り合うことの大切さを噛み締めた1年でした。

また、地域の助産師さんの取り組みを取材し、SNSを通じて紹介しました。今後も、必要な情報が届くように、助産師さんと家族をつなげる役割も担っていきます。

そして、今年は、お産ラボを始めた当初からずっと考えていた、より若い世代の大学生や高校生に学校でお産・育児を伝えたいという想いが実現しそうです。

静岡には、地域で活躍する助産師さんがたくさんいます。産科医・助産師さん・行政も協力してより良いお産環境を目指しています。お産がもっと大切にされること、すべての女性・家族が助産師さんによる継続ケアを受けられること、それが当たり前の社会になるように、お産ラボが、私たちが、私ができることをコツコツ続けていきます。





## 【岐阜】助産所での新卒助産師インターン受け入れを実践して

ゆりかご助産院 赤塚 庸子

2018年4月から新卒の助産師を1年限定で受け入れています。

その経緯は2016年4月から看護大学の助産コース選択学生の助産所での実習を初めて受け入れた経験にさかのぼります。助産師学生の継続事例実習を含む分娩介助実習1~5例目までを当助産所で受け入れることになり、初年度の実習生は2名でした。

それまでの助産学生実習は、病院やクリニックでの実習を終えた後に管理実習という名目で1~5日間程度の実習期間でしたし、その間に助産所での実際のお産の見学や、ましてやお産介助を実施するチャンスはなかなかありませんでした。

そういったことから、初めての分娩介助実習を助産所でおこなうことに当初は多少のとまどいがあったことは事実です。

そんな私たち助産所スタッフや大学教員の懸念も実習が始まるとともにすぐに一掃され、2名の助産学生が実に謙虚に、ひたむきに妊産婦と向き合い、寄り添い、学びを重ねて助産とは何か、助産師とは何をする人なのかを素直に吸収していく姿をみて、助産学生が初めてのお産介助を助産所で実践することの意義を強く感じました。

また私自身が2018年にニュージーランドで開業助産師をされている日本人助産師のパホモフ由香さん(p.23 参照)のもとで数日間研修をさせていただいた経験もそのことを更に確信させる体験となりました。ニュージーランドでは助産学生時代に開業助産師のもとで妊産婦に寄り添い数十例のお産介助をするという形で助産師としての哲学や専門的技術を高めていきます。3年間にわたる助産教育の後はずぐにでも開業できるレベルの新卒助産師が輩出されるのです。実際にそのような教育を受けたのち、卒後半年あまりで開業助産師として活躍される由香さんの姿を拝見し、この教育システムは自律した助産師の働き方を目指した時、とても有効的だと感じました。

現在の日本の助産教育の実際は病院やクリニックでの医療モデルを基軸とした助産実習が実習時間の多くを占め、お産本来の生理的な営みに寄り添うお産介助がなかなかままならない現状があると感じます。

当院で受け入れた助産実習生さん方の素晴らしい学びを感じることができ、ニュージーランドの教育システムの足元にも及びませんが、もう少し長い期間、数例ではなく数十例、このような妊娠から出産、産後まで継続したケアを学べる場を提供したいとの思いから、新卒助産師の有償でのインターン制度を実践するに至りました。

これまでに3人のインターン生が巣立ち、現在は4人目のインターンが研修中です。

これからの世代を担う若手の助産師らに、女性の生理的機能が最大限発揮された、自然な流れのお産の姿を見てほしい、そしてできることならその様な出産場所を望む女性がいる限り、そうした出産環境の提供を絶やすことなく引き継いでいってほしいという思いから、個人的には可能な限りこのインターンシステムを継続していきたいと考えています。

全国の助産所でぜひ展開してほしいシステムだと思いますが、経費の問題で難しい点もあると感じます。職能団体である日本助産師会にはぜひ何らかの形でサポートするシステムを構築していただきたいと思います。

## 私は助産師

元ゆりかご助産院インターン生 萩野 瑞生

私は昨年ゆりかご助産院で1年間インターンシップを経験しました。今年の4月から三次救急病院に勤め2ヶ月半経ちます。今働いている場所では、医療の力が必要な方たちと関わっています。そこでの毎日は、複数人を受け持ち、医療処置やケア、更に業務に追われ1人1人の女性と全身全霊で向き合うことが難しい状況です。ジレンマを感じることも多くあります。

しかしそんなときは、インターンシップを通して学んだ「助産師として女性とどう関わるか」という私の中にある核心に立ち返ることができます。

私の中の核心、それは「助産師マインド」です。

女性を知ろうとし、ありのままを受け止め、  
同じ目標に向かって一緒に歩いていくことで  
無限大に女性と赤ちゃんの力を引き出し、支えることができる。  
決めるのは女性。行動するのも女性。  
助産師は、女性が自分自身の人生を歩いていけるように  
黒子としてそばに居続ける。



右が筆者



左が筆者

忙しいときほど私の助産師マインドに立ち返り、目の前にいる女性とどう関わるか考えようとすることができます。今後もいろいろな壁にぶつかると思います。それでも「私は助産師」。

助産師マインドを見失わないで頑張りたいと思います。



赤ちゃんを抱っこした筆者

## 私の心に種を蒔いてくれたインターン期間

元ゆりかご助産院インターン生 川畑 萌子

私は現在、三次医療機関で勤務しています。県内の搬送は断ることなく受け入れ全国から胎児治療を受けに来るような特徴の病院です。インターン期間を終え今の職場で勤務し始めた頃、よく助産院ではどんなスキルを学んできたの？と聞かれました。私はすぐに思い浮かびませんでした。きっと会陰保護の方法や骨盤ケアの方法、母乳マッサージの方法などを聞いたかったのだと思います。ですが、私が1番学んだことは助産師としてのマインドでした。私は女性が好きです。赤ちゃんが好きです。そしてお産が大好きです。助産院で働いていた頃、私たち助産師は黒子であり主役は女性と赤ちゃんとその家族であること、お産は日常の中にあり女性を生活者として捉えることを学びました。そのこともあり、時間があれば女性のもとへ足を運び疾患とは関係のない他愛ない話をよくします。好きなことやもの、家族の話、どのように生きてきて何を大切に思っているのか。そうすると、私自身のことを知ってもらえるし私も女性のことを知ることができるため、妊娠中から心の整理をしてもらえるきっかけになると思います。女性の変化も感じます。日々女性や赤ちゃんから学ぶことばかりでその時に湧いてきた思いをノートに書き留めています。これは助産院での院長との交換日記がベースになっています。

インターン期間を通して私は多くの種をいただきました。この種がいつか大きな木となり、女性たちのエネルギーにも休息場所にもなれるよう大事に大事に育てていきたいです。おばあちゃんになっても、「もえこさーん」と日々女性の話を聞き一生助産師をしたいです。



交換日記(1~3)と日々の思いを書いたノート(4~5)



右から2人目が筆者

## 助産院でのインターンという貴重な体験から

元ゆりかご助産院インターン生 浅井 香穂

私はゆりかご助産院でインターンとして1年間、様々な経験をさせて頂きました。そこには学校で学んだことよりも広い世界があり、入職してすぐに見学したお産は、その後の私にとって大きな影響を与えることになりました。穏やかな空気感、日常の一部のようで助産師もその場に溶け込み、産婦さんと家族に笑顔が広がる。その光景に私は驚きが隠せませんでした。これらは継続ケアによる信頼関係からくるものだと、インターンを通して私自身が体験し学ぶことになりました。働く中で、助産院で体験し感じて考えたこと、学んだことは、私の助産師としての土台となっています。女性にとって知っている助産師がいる、自分自身のことや妊娠経過を知ってくれている助産師がいることは大きな安心感に繋がると考えます。そのため少しの時間でもコミュニケーションをとり、相談しやすい人と思ってもらえるよう心がけています。また相手に寄り添い想いを馳せること、常に感じて考えること、継続ケアの重要性、女性性を大切にすること、それらを常に心において働いています。助産師としてまだまだ学びの途中ですが、助産院で学んだことは私の財産であり、今後に繋がっていくのだと思います。



赤ちゃんを抱っこした筆者



左端が筆者



実践する

## 【滋賀】滋賀県におけるバースセンター開設へのチャレンジ！

—妊産婦や子育て中の母親らの脱・孤立をめざした開業助産師の活用—活動 1 年目

うみのこ助産院 金森 京子

## はじめに

私が所属する「お産 & 子育てを支える会」は、1994 年に開業助産師を中心とした任意団体として結成され、2020 年で 27 年目を迎えました。滋賀県で開業してきた一人の助産師の呼びかけで、有床・無床開業の助産師やフリーランスの助産師らが集まり、現在 6～7 名の助産師で活動しています。

分娩取り扱いができる医療施設(病院、診療所、助産所)の減少は全国的な傾向にあります。私たちが住む滋賀県も例外ではありません。全国的にも出生率が高い県であるにもかかわらず、過去 15 年で 17 施設が分娩の取り扱いを中止してきました。今後も 2024 年の医師の働き方改革の施行に向けて産科診療を標榜する医療機関は減少することが予測されており、県内 4 か所の高次医療機関へ産婦人科医師が集約される見込みです。

そのような中、私たち「お産 & 子育てを支える会」は 2021 年 1 月 1 日に、10 年来の念願であった助産師主導のバースセンター(以降、共同助産所)を開設しました。簡単ですが、私たちのミッションと 1 年目の活動について紹介させていただきます。

## 1. 休眠預金活用法助成事業の採択をきっかけに

日々の助産師活動の中で、困難を抱えているにもかかわらず行政サービスに繋がらず、孤立し、悩みながら子育てをしている母や家族に遭遇することがありました。このような人びとは決して特別な妊産婦やお母さん方ではなく、ごく普通にいらっやいます。脱・孤立を図るための支援として、多様な妊産婦に多様な助産師で継続的に支援することの必要性を感じ、私たちはこれまで個々に積み上げてきた助産師としての実績を結集して、滋賀県初の民設民営のバースセンター “共同お助産所お産子の家” の設立を計画しました。妊産婦の居場所(シェルター)や助産師らの活動拠点となるバースセンターの開設を目標に、2020 年 1 月に、「2019 年度休眠預金等活用法に基づく助成事業」に申請しました。その結果、公募団体 50 件の中から採択団体 8 団体の 1 つに選ばれました(助成金の背景・詳細は 3 期報告書をご参照ください)。

共同助産所“お産の家”の具体的なミッションは次の 4 点です。①分娩取り扱い事業(ミッション A)、②妊産婦への継続ケア事業(ミッション B)、③主体的な出産の啓発事業(ミッション C)、④開業助産師の発掘・育成事業(ミッション D)です(図 1)。助産師の原点ともいえる出産のサポートを中心に据え、これらのミッションを通じて女性団体や母親グループ、同業の助産師、行政、医療、保健、福祉、教育などのステークホルダーと連携・協力を図り、安全・安心・満足・納得のサービスと場を提供したいと考えました。助成事業は 2020 年 4 月から 2 年間で、資金分配団体である公益財団法人信頼資本財団(京都市)と、地元の間接支援団体である公益財団法人東近江三方よし基金(東市近江市)から、毎月伴走支援を受けながら事業を展開しています。

## 2. 分娩取り扱い事業(ミッション A)

助成事業の採択をきっかけにバースセンター開設の夢が現実として見えてきました。しかし助産所開設が大きく動き出したのは、やはり医療法第 19 条に基づく嘱託医療機関・嘱託医との合意契約の

## 2章 メンバーによる活動

【滋賀】滋賀県におけるバースセンター開設へのチャレンジ！一妊産婦や子育て中の母親らの脱・孤立をめざした開業助産師の活用—活動1年目



締結からでした。バースセンター構想は10年以上も前から描いていたので、代表の助産師らが助成金を申請する以前から嘱託契約のお願いには行っていました。総合病院との契約であるため、書面上の締結相手は、産婦人科医師ではなく病院長です。母子診療科教授の診療科長がつかないでくださり、病院長、事務方などを巻き込みながら、病床数600床を有する大学病院組織と助産師個々の契約が締結されました。直近の経緯は以下の通りです。

当初計画では2020年5月頃に嘱託医療機関との嘱託契約を締結する見込みでしたが、新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延の影響を受け、当該嘱託医療機関との連絡・調整がなかなか取れず、開設に向



1F 事務室兼スタッフルーム、火災通報装置ほか



けた準備が滞りました。事務方を通じて契約の進み具合について 1-2 度の打診をしたあと 9 月に先方から連絡があり、連携契約の合意内容を双方で確認上、10 月 1 日付けで契約の締結に至りました。契約が締結できるまでは助成金を使用することができないため核とした助産所開設事業の計画実行が遅れ気をもんでいましたが、契約締結後は消防署と保健所から医療機関としての認可を得るため、スピード感をもって諸々の準備を開始しました。

順次、借家の改築・配電工事、必要な医療機器・家電等の備品・消耗品の選定・購入、リサイクル製品の回収、ネット環境等の工事依頼、HP の立ち上げを始めました。準備にあたっては、メンバーがもつ人的資源(人脈)・ネットワークを活用し、多くの事業家、子育て中の女性らの助けを借りながら進めました。消防署・保健所の手続きは同時に進行しました。12 月 18 日に消防用設備等・特殊消防用設備等検査・点検(特定小規模用自動火災報知機、火災通報装置、誘導灯、消火器設置など)を受けて検査に合格、12 月 21 日に適合証明を受けました。また、12 月 8 日に滋賀県東近江保健所へ助産所開設



を申請し、12 月 23 日検査を受け、医療法

27 条の規定により施設の使用が許可されました。ここで 1 つ学んだことは、「医療機関の開設者は同時に 2 か所の施設を開設することができない」という事でした。法人格を有していて、かつ地域に必要と認められれば特例として可能なのですが、法人格を有していない場合は許可されませんでした。これは助産所だけではなく、診療所や病院なども同等の扱われ方になります。そのため、代表の助産師は、これまで長く個人事業主として活動してきた屋号を一旦廃業するプロセスを踏まなければならず、新規に共同助産所の開設者・管理者として届けを出すことになりました。概ね入院できる施設としてハード面の準備は完了し、もちろん賠償責任保険や、産科医療保障制度にも加入し、ローリスク妊娠やノーマル分娩をフォローできる体制が整備できました。



東近江保健所への有床助産所開設の届出

2021 年 1 月 1 日付け共同助産所開設。開設後 10 日以内に開設届を提出しました。年が明けてからは徐々に妊産婦さんの相談や施設の見学希望があり、現在 8~9 月分娩予定の方をスタートとして毎月 1-3 件の分娩予約が入ってきています。個人の助産師がこれまでに担当してきたリピーターさんが多く、1 人の妊産婦に 1 人の LMC 助産師をマッチングして妊婦健診が始まっています。これまでからやってきたこととはいえ、自分たちが開設した共同助産所での助産師主導の継続ケアは、今まで以上に責任の重みを感じますし、助産師として大きなモチベーションにつ

ながっています。

### 3. 妊産婦への継続ケア事業(ミッションB)

4月～5月当初はコロナの影響を受け毎月のイベント活動を自粛していたのですが、6月から徐々に再開しました。対象は妊産婦やその家族で、①近隣の近江八幡市から依頼されている事業では『パママ教室』(2か月に1回)、弊社主催のイベントとしては、②マタニティー教室の『お産塾』(毎月1回、第3土曜日)、7月からは③『ベビーマッサージ』教室(毎月1回第2月曜)を開催に加え、④開業助産師に LMC を受けた女性たちが助産師とのコラボを申し出てくださり、2021年1月から共催事業としてバランスボール(月1～2回)を開催しています。口コミあるいは SNS、本会発行のニュースター等を通じて、妊産婦や夫、その家族、乳児と母親らが集い、概ね5～6名多い時で1回10名(組)前後の参加があります。コロナ禍において定員を超える場合は月開催の回数を増やしました。妊娠中の心とからだづくり、乳児期の赤ちゃんとの接し方や、育児の知識と技術の習得を目指していますが、専門家である助産師らと話をすることで、不安や心配・ストレスの解消となり、お母さんたちからは「助産師さんたちにそれでいいんだと後押しされて安心した」という声も聞かれました。そのことが自信回復につながっているようです。また楽しくイベントに参加する中で妊産婦や母親同士の仲間づくりの場が広がりつつあります。



6-7組の親子が集まりベビーマッサージの開催

妊婦健診の個別依頼を受けた事例もありました。コロナ禍において近隣県への帰省できず、帰省先の医療機関で妊婦健診が受けられない妊婦さんの依頼に応じ、妊娠中2回訪問による自宅健診を経験した助産師もいました。こういった臨機応変というのか、フットワークの軽さというのか、痒い所に手が届くようなケアは独立開業している開業助産師ならではのサービスだと感じます。

毎年、市町の妊産婦ケア検討会に出席しています(年2回開催/第1回9月、第2回3月、東近江保健センター主催)。地元の保健センターからは、地域の特性として身体的ハイリスクよりも社会的ハイリスクが増加傾向にあると報告があり、2021年4月から母子保健法一部改正に伴う『産後ケア事業』が始まるため産後訪問、妊産婦のショートステイ、デイケアなどの受け入れを打診されました。11月9日には地元東近江市の母子担当保健師2名が事業の相談に来所され、共同助産所を見学されました。病院やクリニックは主に外来健診と分娩入院を中心に稼働していますが、助産所は医療機関としての敷居が低く、妊産婦さんの生活の場である地域にとけこんでいるという点でも行政の期待に応えられるのではないかと感じています。

(次のページへ)

#### 4. 主体的な出産の啓発事業(ミッション C)

啓発活動は 5 月後半から再開しました。特にコロナ禍により参加者が減っている印象はなく、むしろいろいろな話をしに、また必要な情報を得るために参加して下さる方が多かったように思います。妊産婦の心と身体づくりとしての山登り『太郎坊へ登ろう会』(毎月 1 回)では、天候にもよりますが 4~5 名の妊婦さんにご夫婦、ご家族の参加があります。助産師らは妊産婦と共に！ということもありますが、自分たちの健康づくりのための山登りを楽しんでいます。

7 月からは子育て中の母親らと共催で、フリースタイル出産を啓蒙する『オーガズミックバース自主上映会』を新規事業として始めました。県下を凱旋し 90 分視聴後、ディスカッションする中で、やはり自己の妊娠出産に受け身の女性が多い事に気がつきました。出産のときの体位が自由なだけではなく、出産に関して多様な選択肢があること、出産の主体は医療者ではなく妊産婦さんやその家族にあること、自己決定や主張は産む人の権利としてあることなどを広めています。参加者の中からは産む前に知っておきたかった・・・という声も聞かれ、啓発活動の重要性を再認識しました。

10 月からは新規事業として、母親らの任意団体陽だまり学舎が参加しているイベント事業に合流。自然出産の啓発や育児相談事業を共催で始めることになりました。メンバーのお母さんからは「子育て経験のある一般の母親だけで開催するよりも、助産師らの専門家からのアドバイスをもらえることに価値や安心感がある」と評価をいただいております。



新生児・小児科の先生を招いて研修会開催



毎月“登る会”に参加された妊婦さんらと、太郎坊宮で安産祈願をしています



り、責任とやりがいを感じながら参加しています。

本会が毎月発行しているニュースターは、妊産婦への情報源として有効に活用されています。インスタグラムやフェイスブックを作成し、積極的に情報発信しています。

#### 5. 開業助産師の発掘・育成事業(ミッション D)

2019 年から開催してきたお産&子育てを支える会主催研修会『地域で母子に寄り添う継続ケアの醍醐味』を、継続的に実施しました。2020 年 4 月 18 日(土)開催の研修会、第 4 回研修会はコロナ禍の影

響を受け中止となりましたが、第5回から第8回は予定通り開催でき成功裏に終了しました。継続ケアの実践研修希望の助産師4名のうち1名がシャードウィングに参加し、2名の妊産婦の継続事例研修と3名の産婦の分娩に立ち会いました。また、さらにうれしいことに、研修者の3名の助産師が保健所へ助産所開設届を提出しています。

## 6. おわりに

地域で開業するためのやり方はいろいろあると思います。私たちは無床開業やフリーランスの助産師が多い集団でしたし、一人の助産師でやれることに限界を感じていましたので、多様な妊産婦さんやお母さんたちに継続的にかかわるには、多様な助産師が組織化する必要があると考えました。しかし、大事なものは開業ありきではなく、助産師として女性中心のケアができているか、また女性らと対等なパートナーシップがとれているか、ということです。それを実現するためには、妊産婦のための助産師主導の継続ケアが大事で、経験的に思うのは、開業までの道のりは一人で始めるよりは間違いなくチームを組む方が早道だということです。共同助産所お産の子の家の事業は始まったばかりです。私たちの活動が、LMC 助産師になるための皆さんの活動に、何か参考になることがあれば幸いです。

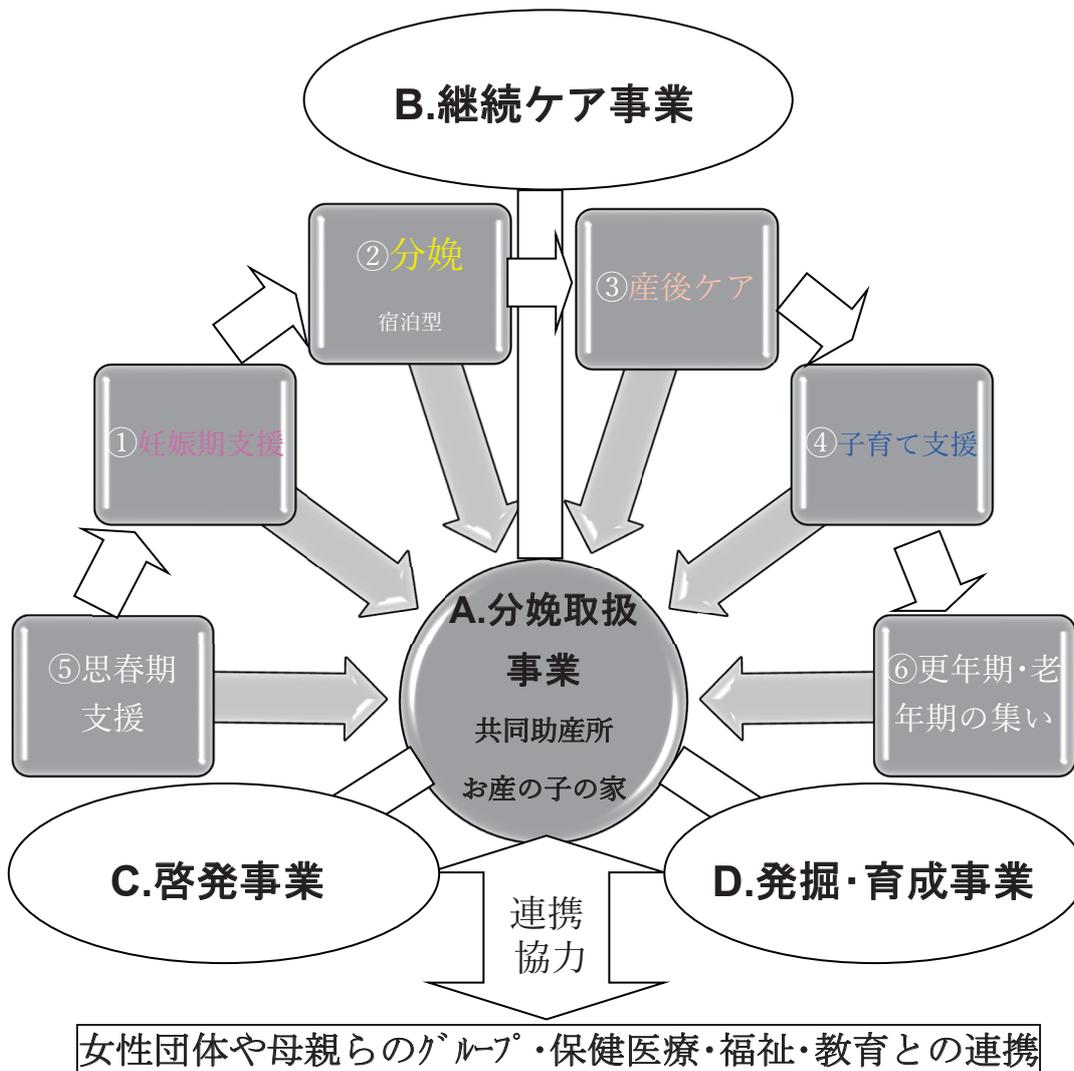


図1. バースセンター“お産の家”における活動・連携・協力体制の概念図



実践する

## 【京都】海(まある)助産院 建設中！！

語り手:海(まある)助産院 宮川 友美さん  
(聞き手:中谷 三佳)

My 助産師第5回研修会(p.14 参照)での講師  
実践編でも大人気の宮川さんにインタビューしました。

今(インタビュー中)、ちょうど建設中の助産院の屋根にあがって  
カンカンやってくれています。



### 「開業しようと思った理由ときっかけを教えてください」

一番のきっかけは、自分が妊娠出産を経験し、その経験から今まで以上に妊産婦さんの方を向いて仕事をしたいと思った。

自分が当事者になったことによって、今まで施設のほうを向いて働いていたことを仕方ないと思ったりしていましたが(施設側のスケジュールをみて働いていたなど)、それはもう嫌だと思いました。実際に産んでみて、このタイミングを逃したら次はない！このタイミングしかないなと考えました！

### 「産後すぐはどのような働き方でしたか？ 開業届はいつ出しましたか？」

開業届は2006年(医療法改定で助産院が激減した年)に出しました。そして2013年、産後復帰するときに海助産院と名付けて再提出しました。海(まある)助産院という屋号で動き出した時は、京都市の母子訪問、助産学校・看護学校の講師、実習補助など地域の仕事とともに、今までの病院では非常勤で勤務をしました(2013～2017年4月)。

分娩のある時は、37～42週までは勤務に入らず勤務させていただきました。そのうち、助産院の仕事が増えてきて、助産院の仕事に専念しました。



### 「最初の頃の海(まある)助産院のお仕事はどんな感じでしたか？」

最初の月は、月5000円(お一人のケア)しか収入がなかった(最初の数年間の仕事について教えてください)。お産の数は、2016年が4件からスタートし、今は10件前後(転院搬送除く)の変化です。そのほか病院を退院された方の乳房ケアなどをさせていただく毎日です。

「助産院の建設の決心をしたのはいつくらいですか？」

以前から開業するなら施設をもちたいと考えていました。資金がなかったので出張から始めて、今回の物件にあたる前に 5~6 件物件にあたっています。当たって砕けて当たって砕けて、やっと出会った。ずっと探し続けていました。

「資金はどのようにされたのですか？」

個人事業主である助産師が銀行からお金を借りるのは簡単ではありませんでした。助産院を建てるということは並大抵ではないと思いました。最終的に、日本政策金融公庫と一番お世話になっていた銀行との 2 行協調(きょうちょう)という形で借りることになりました。お金を借りる保証をしてくれる保証協会の方と今回の金融機関の担当の方々の合計 3 名の方が、助産師という仕事を理解してくれました。返せるかどうかわからない状態なのに 3 人の方に助けてもらったと思っている。みなさん子育て世代の人で、そのうち一人の方の奥さんがたまたま勤務していた施設でお産をされていました。「大切な仕事やし、頑張ってくださいね」と励ましと元気をいただきました。

「宮川さんに運が向いていたからですね！」

その保証協会の方がサインをしてくれないと銀行は貸してくれなかった。金融公庫の方は、銀行が貸してくれたら貸してもらえると状況に担当の方がしてくれたので、本当に 3 人の方々のお陰です。

「そのほかクラウドファンディングでも資金を募りましたね。おおまかにどれくらいの金額でしたか？」

手数料を差し引かれない状況で、400 万円くらい。手数料として 10% +  $\alpha$  必要でした。資金協力いただきました皆様ありがとうございました。

「助産院をどのようにデザインされましたか？」

1 階を助産院(入院部屋2床、分娩室診察室 1 つ、トイレ・バスと待合スペース)とし、2階は事務所でスタッフしか入らない予定です。キッチン、ストックヤード、フリースペースがあります。



「施設を持ちたいと考えていて、6件目の物件で巡り合えたんですね」

ちょうどあいた、という感じです。探し始めたころは子どもが保育園で、自宅から近いところが条件でした。家の近くにこだわっていたのでなかなか巡り合えなかった。海(まある)助産院が京都市で有床の分娩取り扱い施設の 3 軒目になります。

### 「助産院で産みたい女性にとってありがたいですね」

わたしからすると、自宅でも助産院で産むのも安全性は変わらない。しかし、この数年お母さん方はお産についてほしいけど自宅では無理だといわれて、何人も有床の助産院を紹介しました。

「5人くらい？」…いえいえ、もっといました。その方のお産につきたかったけどよそへ紹介するんです。一般の方にとって、自宅と助産院のハードルが違うのを実感しました。

「宮川さんと産みたい人が助産院の存在で産めるようになって、女性にとってうれしいですね」

最近、「建物建てるんですね！いつ出来上がるんですか？」と問い合わせが時々あります。助産院のほうが皆さんにとって敷居が低いと思われるみたい。



### 「施設があることで妊産婦さんに寄り添うMy助産師の育成にも役立ちますね」

今まで研修希望する助産師がいても、どこで出産するかによって実習者にきてもらえなかったこともあり。拠点があるのとないのと、全然違います！そして、学生を連れて歩くより、場所があるのとは違うと思いました。助産学生さん、看護学生さんの実習依頼はすでにいくつかあります。

### 「看護学生さんの中で宮川さんの助産院で実習して助産師を目指す人もいるかもしれませんね！」

建物があることでやれることが広がるのがわかっていたので、産むというニーズだけではなく、そのほかにできることが広がるが見えてきています！

「今までやってきたことが功を奏して、強運ですね。自分の強い意志と、バックアップがあった…」

今までやってきたことに一つの無駄はないということ、物件当たってダメだったときの落ちこみ具合や、融資受けられなかったことなどいろんな経験をしたけど、それを断られたから今があるし、全てのことには無駄がないことが分かりました。

### 「お産のとき、助産師は何人ですか？」

妊婦さんが良いと言ってくださったら3名でチームとなっています。助産院を経営している助産師はわたしともう1名。お手伝いしてくれるのは16名です。妊娠37週くらいにGBSが「一」で自宅分娩OKになったら、みんなに知らせて妊婦健診への同行やお産に入れそうな人に連絡をもらいます。お産が終わったら必ずお食事会をして（今は新型コロナ感染拡大で食事会は無理ですが）、みんなで自分たちの動きやお産全体を振り返っての動きの振り返り、産婦さんとのバースレビューをしていただくようにしています。

「宮川さんから、助産師に向けてメッセージをお願いします」

学生でも助産師でも、助産師になりたい人、助産師である皆さんに！

助産師になりたいと思った頃は、心身ともに疲れているお母さんに優しく声掛けできるようになりたい、女性に寄り添いたいと思って助産師になった人が多いのではないかと思います。

しかし現実には、日本の医療・お産を取り巻くシステムがそうさせてくれない(緊急のときに動けたほうがすごいとか、診察や処置を手早くできたほうがすごいとかが優先されている)。けれど、女性に寄り添うという Midwife の意味の助産師になりたいと思ったときに考えていた気持ちを忘れないでほしい。

その火を燃やし続けてください！燃やし続けていたら、この出産ケア政策会議のような社会の仕組みを変えようとしている人や、団体と出会う可能性があるのも、自分が助産師であることの意味を考え続けて助産師でいてほしい。

「宮川さんの助産師の根底にあるものは？」

わたしたちは寄り添うことしかできないし、答えは女性もっているのだから、その答えが出てくるようにそばにいることしかできないので、寄り添っていけるようにしていきたい。

「本日はどうもありがとうございました。」





【兵庫】ママのねフェスタ実行委員会による「My 助産師普及啓発事業」 つながる・広める

古宇田 千恵

1. ママのねフェスタ実行委員会とは

兵庫県川西市および猪名川町の母親を中心に構成される任意団体です。地域の子育て中の親と子育て支援者の交流の輪を広げ、地域住民が互いに支え合う子育て環境の充実を目指して活動しています。

2. My 助産師普及啓発事業

兵庫県阪神北県民局県民交流室「令和 2 年度阪神北☆夢づくり応援事業」の補助を受けて、「妊産婦の不安と孤立感の解消を目指した『My 助産師』普及啓発事業」を実施しました。

具体的には、My 助産師普及啓発リーフレットを 2000 部印刷し、川西市の公共施設、猪名川町の子育て支援センターなどに設置していただきました。すぐろくとカードゲームを各 15 部印刷し、新型コロナウイルス感染予防のため当面の間すぐろくやカードゲームを対面で実施することは難しいですが、川西市のこども・若者ステーションにすぐろく盤を掲示していただきました。



↑川西市役所に設置されたリーフレット

リーフレットが丹波新聞で紹介されました→

丹波新聞  
2020年12月6日(日)

## 丹波篠山の取り組み紹介

川西・猪名川の母親ら冊子作成  
「My 助産師」の啓発で

川西市や猪名川町の母親らを中心とする「ママのねフェスタ実行委員会」が、「My 助産師」の普及・啓発を図るために作成したリーフレットに、丹波篠山市で8月から本格始動した「My 助産師ステーション」の取り組みを紹介している。メンバーは、「民間の助産院などにMy 助産師はいるけれど、丹波篠山の取り組みは全国の自治体レベルで初めて。とてもうれしいし、お母さんたちの希望の星です」と称えた。

My 助産師は、妊産婦ら出産、産後ケアまで継続して1人の助産師が妊産婦に寄り添う。心身両

ママのねフェスタ実行委員会のケアに携わるもの。カナタのオンタリオ州などでニューシールドや

面

リーフレットを寄贈した「ママのねフェスタ実行委員会」の委員と、受け取る関係者ら＝丹波篠山市網掛で

リーフレットは県の補版といえる制度を始めた。丹波篠山は、「日本での先進的な取り組み」の中で、仙台市の東北公済病院が取り入れていた助産師指名制度を並んで紹介されている。

同実行委は、阪神北県民局の補助を受けて、今年、My 助産師などを普及・啓発するイベントを企画していたが、新型コロナウイルスの影響で中止し、啓発用のリーフレットやすぐろくなどを製作する取り組みに切り替えた。

代表の古宇田千恵さんとメンバーの鍛業穂さき、古萱田樹さんがこの

希望する市内全ての妊産婦に専属助産師が付

き、出産や妊婦健診以外の場面で寄り添うなど、海外のMy 助産師の簡易

も紹介した。希望する市内全ての妊産婦に専属助産師が付き、出産や妊婦健診以外の場面で寄り添うなど、海外のMy 助産師の簡易

3人は、「My 助産師の普及で、少しでも孤独になるお母さんが減り、出産をもっと楽しいものだと感じてもらいたい。丹波篠山の取り組みは素晴らしいもの。ぜひ盛り上げてほしい」と期待していた。

→すごろくが丹波新聞で紹介されました

丹波新聞  
新聞  
2021年(令和3年)5月9日(日曜日) (4)

## 妊産婦の生活疑似体験

My助産師  
拠点に寄贈

### 母親らがすごろく製作

川西市や猪川町の母親を中心とする「ママのねフェスタ実行委員会」が、ゲームを通して妊娠・出産・子育てを疑似体験できる「ママのね すごろく」を製作。このほど、丹波篠山市立My助産師ステーションに寄贈した。マスごとに母親の声をもとにしたエピソードがあり、メンバーらは、「これから妊娠する人には、「こんなことがあるのか」と、すでに妊娠している人には、抱えている悩みが自分だけじゃないことを知ってもらえたり。男性にも遊んでもらい、母親への理解につなげてほしい」と話している。(森田靖久)

すごろくは、「妊娠」ICU(新生児集中治療)からスタート。「張り室」コースもあり、経切ってネットで検索し、体験者は自身の出産を振り返る。寝不足で目が充返ったり、未経験者は、血「次の健診まで赤返ったり、未経験者は、赤ちゃんが育っているか不安になる」などのほか、「おなかに回かかって色々」と話しかけてみる。「赤ちゃんがおっぱいを吸うのかと思うと不思議な気分」など、さまざまな「妊婦あるある」がちりばめられている。途中から「経膈コース」「帝王切開コース」「管理入院コース」に分かれ、出産後には、「N」

「ママへの理解に」

ママのねポイント」が変動し、ゴール時のポイントによって、それぞれのママのね度を見る。ゲーム中には妊娠から出産、産後ケアまで継続して寄り添う「My助産師」も妊産婦を助けるカードが登場。出た自にに応じてポイントが加わる。

↓すごろく盤は、A4 サイズ 12 枚ほどの大きさです



すごろくの内容は、助産師らが監修した。代表の古宇田千恵さん(猪名川町)とメンバーの比嘉千春さん(川西市)、高橋舞夢さん(丹波篠山市垂水)らが同ステーションを訪問し、担当者比嘉さんらは、「ママ

はもちろんのこと、おは赤ちゃんたちがすごろくをしながら、昔のことを思い出して話してくれたりして感動しました」と言い、「少しでも妊産婦の心が軽くなることにつながれば、My助産師を知らないママたちがどう思ってくれるのかも楽しみに」と笑顔で話していた。

### 3. 事業を実施した感想

イベントを開催する予定だったのが、新型コロナウイルス感染拡大のため、事業内容を急きょ切り替えました。最初はA4サイズ1枚くらいのつもりでいたすごろくは、メンバーの様々な「あるある」体験が盛り込まれ、なんと12倍の大きさに。その分、苦労も増えましたが、ミーティングでは常に笑いとおもしろいものを創り出すワクワク感がありました。

そんな風楽しんで作ったものは、受け取る自治体の職員の方にも伝わるのか、「どうやったら妊婦さんやお母さんに楽しんで使ってもらえるか」といっしょに考えてくださる職員の方の表情がとても楽しそうでした。地域の妊婦さんやママたちと直接交流することはかないませんが、自治体職員の方に地域の出産環境の問題点や行政に期待することなどをお話しさせていただく機会ができたのは、今後につながる大きな収穫だったと思います。



## 丹波篠山市で My 助産師による産前産後の継続ケアを始めました

賛助会員 成瀬 郁

私はこれまで助産師として総合病院・産婦人科診療所で働いてきました。並行して行政の赤ちゃん訪問や乳幼児健診事業に携わった時期もありました。お産に関わりながら、5 年ほど前からは「このままでは、人類の女性は自分の力で自然に産めなくなるのでは？」と、漠然とした危機感も感じるようになりました。様々な医療ベースの妊娠出産への介入が増えてきていることを臨床で感じ、「そのようなお産は女性と子どもにとって幸せな体験になっているのか？」と疑問をいだきながら働いていました。

女性や赤ちゃんに備わった潜在能力を生かしたお産を取り戻すにはどうしたらよいのか？と考える中で、コクランの『助産師主導継続ケアのエビデンス』や、WHO が推奨する『ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』にも後押しされ、女性には主体性を大切に「継続ケア」が必要で、私も助産師として「継続ケア」に取り組みたいと考えるようになりました。

その思いから出発し、兵庫県丹波篠山市(以下、当市)で「My 助産師による産前産後の継続ケア」を始めるに至った経緯と実際、そしてそこから感じた課題を報告します。

### 1. 丹波篠山市の産科問題と My 助産師制度

全国的な産科医不足などの影響で、2019 年 5 月、当市内の総合病院が分娩休止の意向を示し、2020 年 4 月には、お産ができる場所が産婦人科診療所 1 か所となりました。2019 年 7 月、酒井隆明市長の呼びかけで「産科充実に向けての検討会」が発足し、市民のお産をどのように守っていくのか検討が始まりました。女性を含めた市民代表、医師会医師、助産師などの検討会委員で議論を重ねるなかで、市立助産所(バースセンター)の設立が具体的に検討されましたが、嘱託医療機関を引き受けてくれるところがなく断念せざるを得ませんでした。しかし、私が検討会の中で提案した「My 助産師による継続ケア」は、女性が安心して産み育てるために必要な支援と評価され、2019 年 10 月から不安を抱える妊婦(希望者)を対象に産前 2 回、産後 1 回の継続ケアを開始することになりました。その後、私は医療機関での勤務を辞め、地域で My 助産師として継続ケアを実践する決意をし市町村所属の助産師となりました。そして、2020 年 8 月からは対象を市内全妊婦へと広げ、助産師 3 名体制で産前産後の継続ケアを始めるに至りました。

次に「丹波篠山市 My 助産師制度」実現までの過程における、多方面の方々とのつながりや、どのように関わっていたのかをいくつか紹介します。

#### ①行政とのつながり

私は、当市の赤ちゃん訪問や乳幼児健診事業に携わった経験があり、市内の医療機関でも長く働いていたので、業務受託・情報連携などで市の健康課保健師とは、15 年来のつながりがありました。このように、医療機関で働きながらも地域とのつながりを持っていたため、産科検討会にも委員として呼んでいただくことができました。

検討会では、ニュージーランドの LMC 制度や継続ケアのエビデンスも紹介し、助産師の継続ケアが妊産婦に安心・安全・満足をもたらすことの説明を重ね、市長をはじめ保健福祉部長、保健師などの行政職員の理解を得ていきました。

#### ②My 助産師モデルケース体験

当市の産科問題が起こるちょうど 1 か月前、私は出産ケア政策会議共同代表・日本妊産婦支援協議

会りんごの木代表の古宇田千恵さんと出会い、継続ケア実現のための第一歩として実施する「産前産後の継続ケアモデル事業」に協力するチャンスを得ました。当市の保健師の理解も得られ、市のパパママ教室でモデル事業に協力してくださる妊婦を募り、お一人の初産婦さんの継続ケアを経験しました。その中で「My 助産師の存在」が女性にとっての安心につながり、「継続ケア」が妊産婦に心身の健康をもたらすことを確信することができ、市の検討会で「My 助産師制度」を提案することができました。

### ③市議会議員とのつながり

当市の産科問題を検討する中で、私が大切にしたいのは、「女性の想いや意見が置き去りになってはいけない」ということでした。女性が声を上げるきっかけを作りたいと考え、『産むを語ろう！』という会を 2 回に渡り、市民女性や保健師たちと共に企画・実施しました。産科問題に関心のある市議会議員が5～6名参加くださり、女性の想いに耳を傾けてもらう良い機会になったと思います。また、My 助産師制度やモデルケースに関してヒアリングを受け、継続ケアの大切さを伝えてきました。

### ④マスコミ(新聞記者)とのつながり

2019年9月の検討会で、私が初めて My 助産師制度について説明した際に傍聴していた丹波新聞社森田靖久記者が、この制度に関心をもってくださいました。子育て世代のパパでもある彼は、My 助産師制度に興味をもち、当時私が実践していたモデルケースの密着取材や出産ケア政策会議の日隈ふみ子さん、古宇田千恵さんへのインタビューを行い、My 助産師にスポットをあてた6回に渡る連載記事を丹波新聞紙上に掲載しました。その記事が、ネットニュースにも流れたことで、当市の My 助産師制度を知った方も多いのではと思います。

### ⑤出産ケア政策会議とのつながり

前述したとおり、私が継続ケアを体験し必要性を確信できたのは、古宇田千恵さんとの出会いのおかげと思っていますし、当市の My 助産師制度開始前後には様々な相談にもものっていただきました。当時、佛教大学で教育に携わっておられた日隈ふみ子さんの所へ、当市の健康課課長・係長(いずれも保健師)と私の3人でうかがい、当市の産科問題に関するアドバイスをいただいたこともありました。ドーリング景子さんには、ニュージーランドの LMC 制度に関しての詳しい現地情報をメールで教えていただいたこともありました。

最近では『My 助産師育成プログラム』に参加し、助産師としての自分を見つめ直したり、他府県の助産師とつながり、想いを共有できたことは大きな収穫でした。出産ケア政策会議とのつながりがなかったら、当市の継続ケアは実現してなかったと思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

## 2. 丹波篠山市 My 助産師による産前産後の継続ケアの実際

当市の My 助産師制度の概要は、チラシ「丹波篠山市 My 助産師による産前産後ケア」(p.54)のとおりです。健康課内の子育て世代包括支援センターに3名の助産師が所属し、市内の全ての妊婦への母子健康手帳交付を担当しています。その際に、妊婦の状況把握や初期のアドバイスを行い、My 助産師による産前産後ケア(産前2回・産後1回)を説明します。母子健康手帳交付を担当した助産師が「My 助産師」となり、これまでに約8割弱の妊婦が継続ケアを希望されました。継続ケアを希望されなかった妊婦へも、妊娠中期ごろに電話訪問で様子を確認し、つながりを持つように心がけています。

My 助産師による継続ケアを受けた女性へのアンケートでは、「次の妊娠時も希望する」「知人にも My 助産師を勧めたい」と思う女性が 9 割を超えていました。

全国的な分娩施設の集約化の流れの中で、当市のようにお産できる医療機関が減り、遠方の医療機関で出産する女性も増えつつありますが、女性が生活し子育てしていく地域の助産師と妊娠中からつながりを持つことは、母親の孤立や育児不安を防ぐことができると考えています。そして、妊娠中に自分の心と体と赤ちゃんにしっかりと向き合うことの大切さを伝え、女性の主体性を大切にされたケアを心がけています。

また、助産師として継続ケアを実践したからこそ得られる学びや感動もあります。出産・子育てに向かう過程やその女性の想いを知っているからこそ見えてくるものがあり、その女性の今後を考えた時、何が必要かが自然と浮かんできます。そして、出産を終えられた時は、その人なりの頑張りを褒めてあげたい気持ちでいっぱいになります。助産師として「女性に寄り添う」「伴走する」とは、こういうことなんだと感じています。

### 3. My 助産師による継続ケアの課題

#### ①助産師の役割の認知に関する問題

当市の My 助産師制度も、初めから市民に理解されてスタートしたわけではありません。「助産師の行うケアより、お産ができる医療体制の整備にお金を使ってほしい」「健康で、病院の妊婦健診で問題がなければ助産師のケアは不要ではないか？」などの意見があったのも事実ですし、必要性を感じず継続ケアを希望されない妊婦もいます(特に経産婦)。「助産師とはどんな関わりをする専門職なのか」が、世間一般に理解されていない事実を今回の活動を通して痛感しました。

助産ケアを求めてこない女性に問題があるのではなく、このような状況の背景には、助産師自身がその専門性や助産哲学を見失いつつあることや、助産師の働き方、助産師教育にも問題があると感じます。戦後に日本の助産師が失ってきたものの大きさも改めて感じます。ケアの対象である女性と助産師は、同じ女性としてもっと想いを共有したり、お互いの距離を縮めていく必要があるのではと感じます。

#### ②他職種との理解・連携について

当市の My 助産師ステーションは健康課内にあり、保健師・栄養士・歯科衛生士などの行政の他職種と連携がとりやすい環境であるという強みがあります。ただ、時として、助産師と他の専門職との考え方の違いに困惑することもあります。母子とその家族が幸せに生活していけるようにという想いは同じなので、助産師として大切にしたいことを理解してもらおう努力を重ね、それぞれの専門職の良さを活かした支援ができるよう心がけていきたいと思えます。

#### ③継続ケアを担当する助産師の報酬に関する問題

地域社会における助産ケアの認知度が低いためか、残念ながら医療機関で働いていた時より、地域で継続ケアを実践する私の年収は半減しました。医療機関で交代勤務制で働く助産師の報酬に比べ、地域で開業したり、継続ケアを行う助産師の報酬が少なければ、継続ケアは定着していかない懸念もあります。

助産師の継続ケアのメリットとして、自然分娩が多く、流産が約20%減少するといったことがエビデンスとして発表されていますが、この事実は医療費削減や少子化対策にも直結するものです。個別的で継続性のある助産ケアが女性と子どもにもたらすメリットを、エビデンスもふまえて国や行政

に伝え、助産師の継続ケアに対し適正な報酬が支払われるよう訴え続ける努力も必要と感じます。

### ④出産も含めた継続ケアへの展開

今の当市の継続ケアでは出産時のケアは行えていませんが、本来の My 助産師制度とは、「出産」も含めた継続ケアです。現在の産前産後ケアを通し、女性に助産師の役割を知ってもらい、妊娠したら My 助産師をもつのが当たり前という「My 助産師文化」が定着すれば、お産も My 助産師と一緒にという展開も期待できるのではと感じます。

また、地域で助産師がお産を扱う際には、嘱託医や嘱託医療機関を確保するという大きな課題を越えなければなりません。産科医と助産師がお互いの専門性を理解し尊重することが重要です。産科医不足による分娩集約化の中でも、女性が何人子どもが欲しいのかや産み方の選択肢に制約がかかることなく、産み育てることに希望を持てる社会であってほしいと思います。

## 4. おわりに

当市の My 助産師制度が本格的に始まって、まだ 10 か月。ここまでの道のりを通して、ひとりでは行動に移せないことも、同じ想いの仲間がいれば実現に向かって進めると実感しました。

今後は、市民女性(妊産婦・子育てママ)や開業助産師とのつながりも深めながら、健やかで幸せな妊娠・出産・子育てを共に追求していきたいと思います。

医学書院の助産雑誌 2021 年 4 月号・5 月号に、当市の産前産後の継続ケア実現までの道のりと実際を寄稿させていただく機会に恵まれました。合わせてお読みいただくと幸いです。

## My 助産師ステーション での支援内容

妊婦健診・出産はかかりつけの医療機関となりますが、妊娠前から産後にかけての相談を行います

### 母子健康手帳交付 (初回相談)

1

- ①母子健康手帳・助成券交付、お産応援119登録
- ②My助産師(担当助産師)が決定します
- ③新しい命を迎える心構え、妊娠初期に気を付けることをお話しします

### 第2回産前ケア (妊娠30～34週ごろ) 自宅への訪問または来所

3

- ①命を生み出す仕組みを学び、安産に向けた、あなたなりの工夫を助産師とともに考えます
- ②おっぱいの手入れ方法や赤ちゃんの特徴を学びます

### 第1回産前ケア (妊娠16～20週ごろ) 自宅への訪問または来所

2

- ①健康なマタニティライフと安産に向けて、あなたにあった体づくりを考えます。産後の生活をイメージして、家族で準備しておくことも考えます
- ②妊娠中に起こりやすい異常についてお話しします
- ③希望者には着帯の仕方を教えます(腹帯をご用意ください)



### 産後ケア (赤ちゃん訪問)

4

- ①お母さんの体調と赤ちゃんの発育を確認し、育児相談・授乳指導などを行います



## 妊産婦の悩みや不安 の解消に向けて

丹南健康福祉センターにある子育て世代包括支援センターふたばに「My助産師ステーション」を開設しました。My助産師制度とは、1人の助産師が1人の妊産婦を継続してサポートすることで、妊産婦の悩みや不安に寄り添いながら、健やかな妊娠・出産・育児につなげていくものです。

## 今こそ、My助産師を

My助産師制度は、全ての女性が安心して子どもを産み育てることができるとをめざした全国でも先駆的な取り組みです。My助産師は、あなたと家族に寄り添い、妊娠・出産・子育ての道のりとともに歩みます。

丹波篠山市では、女性が安心して子どもを産み育てることができるよう、8月3日からMy助産師による産前産後ケアを開始しました。今回は、妊娠初期から産後1年までの妊産婦に、専任の助産師が支援を行うためのMy助産師制度を紹介いたします。

問い合わせ 子育て世代包括支援センターふたば ☎594・5080

妊娠中からママと赤ちゃんをサポート  
あなたにはMy助産師がいますか？

上記以外でも随時相談に対応します。お気軽にご相談ください。

### 丹波篠山市My助産師ステーション

丹波篠山市子育て世代包括支援センターふたば(丹南健康福祉センター内)  
平日8時30分～17時 ※土曜日でも相談(要予約)に対応できる場合があります。  
☎594-5080

### 窓口案内

### ～助産師の皆さんからメッセージをいただきました～

女性にとって妊娠・出産は人生の大イベント。喜び・戸惑いなどさまざまな思いを胸に母となっていきます。そして、その時期の体験は女性のその後の子育てや人生に大きな影響を与えます。

妊娠中から家族みんなで、心と体、そしておなかの赤ちゃんに真剣に向き合うことで、子育ても前向きに楽しく乗り越えていけるのではないのでしょうか。

- ★不安にも喜びにも一緒に向き合い、寄り添える存在になりたいと思います。(辻井永恵さん)
- ★同じ女性・母として、あなたらしさを大切に母として進む過程に伴走します。(成瀬郁さん)
- ★悩みや不安を気軽に話せるような心強い存在になりたいと思っています。(細見直美さん)



My助産師ステーションの助産師の皆さん(辻井永恵さん、成瀬郁さん、細見直美さん)【写真左から】



## 丹波篠山市 My 助産師による産前産後ケア

丹波篠山市では、女性が安心して子どもを産み育てることができるよう、令和2年8月から「My 助産師による産前産後ケア」を開始しました。子育て世代包括支援センターふたばにおいて、担当助産師が保健師・栄養士などとも協力し、妊産婦さんや赤ちゃんを継続してサポートします。

女性には「新しい命を産み育てる力」が、  
赤ちゃんには「生まれる力」が、本来備わっています  
その力を発揮して、あなたらしいお産・楽しい子育てをしましょう

My 助産師(担当助産師)は、あなたとご家族に寄り添い  
妊娠・出産・子育ての道のりをともに歩みます

妊娠期は、**出産・子育てのための大切な準備期間**です  
My 助産師と一緒に あなたに合った準備を始めましょう

### ①心の準備

お腹の中の赤ちゃんの人生は、もうスタートしています  
パパもママも「親になる覚悟」ができていますか？

### ②身体の準備

安産にむけて生活や習慣を見直してみましょう

### ③産後の生活にむけた準備

赤ちゃんとの生活をイメージして、**家族みんなで準備して**  
いきましょう

☆妊婦健診・出産は、かかりつけの医療機関となりますが、妊娠期から産後にかけての相談を My 助産師が継続して担当します。

☆必要に応じて医療機関や地区担当保健師・栄養士等と連携をとりサポートします。

☆切れ目なく保健師等の子育て支援につなげます。

## My 助産師による産前産後ケアって何をするの？

産前産後ケア	内容
① 母子健康手帳交付 (初回相談)	母子健康手帳・助成券交付 お産応援119登録 My 助産師(担当助産師)が決まります。 新しい命を迎える心がまえ・妊娠初期に気をつけることをお話ししましょう。
② 第1回産前ケア (妊娠16~20週ごろ) 自宅へ訪問 または ふたばへ来所	健康なマタニティライフと安産にむけて、あなたにあった身体づくりを考えましょう。産後の生活をイメージし家族で準備しておくを考えましょう。 妊娠中に起こりやすい異常も知っておきましょう。 希望者には着帯をお教えいたします(腹帯をご用意ください)
③ 第2回産前ケア (妊娠30~34週ごろ) 自宅へ訪問 または ふたばへ来所	女性に秘められた命を産みだすしくみを知り、安産にむけた、あなたなりの工夫を助産師とともに考えましょう。 おっぱいの手入れ方法、赤ちゃんの特徴を知りましょう。
④ 産後ケア (赤ちゃん訪問)	お母さんの体調と赤ちゃんの発育を確認し、育児相談・授乳指導などを行います。

\*上記以外でも、随時ご相談に対応します。

\*ご相談・予約は平日 8:30~17:00 となります。

[ただし、土曜日でも予約相談に対応できる場合があります。]  
My 助産師に確認してください。

安産に向け、妊娠中どんなことに気をつけたいの？  
赤ちゃんとの生活に向けて、家族でどんな準備が必要なの？  
パパはどうやって育児に参加したい？  
赤ちゃんのお世話について知っておきたい  
(泣くときどうしたらいい？授乳はこれでいいの？)  
おっぱいについて相談したい(卒乳までの相談可)  
上の子とどう関わりたいの？  
産後の手伝いがなくて困っています どうしたらいいの？  
産後、体調や気持ちがすぐれない 話を聞いて欲しい…  
こんな時、ご相談ください

産前ケアで  
パパも一緒に  
妊娠・出産・子育て  
を学びましょ  
う



<お問い合わせ・相談受付先>

丹波篠山市 My 助産師ステーション

(丹波篠山市子育て世代包括支援センターふたば内)

TEL: 079-594-5080 平日 8:30~17:00



## 【福岡】私の My 助産師考

たのしまる助産院 松本 由美子

早いもので、出産ケア政策会議発足と同じ、2017年に産まれた我が家の4人目の末っ子も4歳になりました！6年前に自宅出産で開業し、「さあ、これから！」と思っていた矢先、自身の妊娠は、正直、戸惑いもありましたが、今、思えば、あの時、この子を授かっていなかったら、このような素敵なご縁もなかったかも知れません(笑)！「自分の産前・産後で誰かのお産に関われなくても、周産期ケアの改善につながる活動をしたい」と思い、産後1か月から、毎月、新幹線を乗り継ぎ4時間かけて、末っ子と一緒に京都での会議に通った1年間が懐かしいです。あの時の学びは間違いなく、今の私の活動の礎になっていると思います。あれから4年、現在、お産をたくさん受けている訳ではないですが、リピーターさんからお産の依頼をいただくようにもなりました。

開業からこれまで、「家族のお産」にこだわって、お産に関わってきました。日本が抱える虐待や産後うつといった課題には「家族関係」が根っこにあり、それを解決する一つの方法が「家族のお産」ではないかと感じているからです。かなり極端な考え方もかもしれませんが、「お産」は人の命の誕生を肌で感じられる最高の性教育になるのではないかと思います。私事ですが、我が子たちには、毎回、下の子たちのお産に立ち合わせてきました。「お産を家族のもの」と捉えることで、家族が命を身近に感じ、人を大切にすることを学ぶことが出来、そしてさらに、不必要な隔離や医療介入も少なくなるのではないかと考えています。そんな想いを抱いて、日々、妊娠～お産～産後～子育てと切れ目なく母子に関わらせていただいています。

私が開業してから短期間ですが、当県の開業助産師がおかれる状況はずいぶん変わってきました。昨今、様々な理由で開業助産師に協力して下さる医療機関を見つけるのが以前にも増して難しくなっています。私自身、嘱託契約していた医療機関からの突然の契約解除はとても痛いものでした。もっと、医療機関の協力を得ることが出来れば、助産師はもっとたくさんの事が出来る、可能性が広がる、もっと理解を示して欲しい、、、そう思うことは簡単な事、、、私たちが、微力であっても示し続けていかなければならないのだと思います。

こんな状況ではありますが、現在、自宅の敷地内に助産院を建築中です。現段階では、完成しても、医療的にここで出産を受ける事はできませんが、将来、しっかりと体制を整えた上で出産が出来るようになることを目指しています。「自宅で、家族と迎えるお産」はこれからも大切にしていきたい事なのですが、「助産院」という場を作ることで、もっと広く、長く母子や家族に関わっていきたいと思っています。そのねらいの一つは、「母子を孤立させない事」。私は、海外でも母子に関わってきたことがあるのですが、当時、日本から聞こえてくる日本のニュースは喜ばしいことばかりでは無く、耳を疑うような事件や犯罪も少なくありませんでした。また、自分自身も慣れない土地での妊娠出産・育児を経験し、幸せなはずなのに孤独を感じる事が全く無かった訳では無く、核家族化の進んでいる日本での課題を身近に感じました。すべての女性が自宅や助産院でのお産を希望する訳ではありません。いろんな選択肢があってよいと思うのですが、すべての女性に助産師の継続的な関わりは必要だと思います。その関わりを実現することが出来るのが My 助産師だと期待しています。

これまで、出産ケア政策会議に関わらせていただけてきて、メンバーの熱い想いに共感し、繋がれた事は、私の財産だと思います。全国に同じ思いを持つ仲間がいる事。こんなに心強い事はありません。今、新型コロナで大変な状況ではありますが、ピンチはチャンスでもあります。多くの産科施設で、面会が出来なくなったことなどをきっかけに女性が「お産とは？」と気づき始めた時なのかもしれません。全ての事が出来る訳ではないですが、助産師として、My助産師として「何か出来ることがある」と常に思っています。「お産」が、苦しくつらいものだけにならないように、「子育て」が大変であっても、喜びを感じられるように、地域の母子のために役に立つことを考え、仲間とともに実践していきます。



自宅出産を諦めなかったYさん



旦那さまの関わりはとても大切♡



今年1月に出産されたリピータのMさんご家族



同じ誕生日に複雑な気持ちのT君



たのしまる助産院上棟式 2020年12月



新生児を抱けるのは助産師冥利♡

## 【熊本】故郷熊本で My 助産師への道を志して ～ひとりじゃない～

実践する



さとみ助産院 橋本 さとみ

### はじめに

自己紹介をします。助産師になって母子を見つめて36年が経ちました。大阪や名古屋で30年間、病院や助産院で働き母と子の命に寄り添ってきました。2015年春、生まれ故郷の熊本県八代市へ U ターン「地域に根差した助産師になりたい」「すべての妊産婦さんと新生児に助産師のケアを届けたい」この思いを胸にさとみ助産院を開業しました。人生8回目の引越しでやっと終の住処にたどりつきました。まあ細々とでも長〜く助産師としての道を歩んでいこうと思っていた矢先、2016年4月熊本地震が起き命の尊さを日々感じながら自分の中にある何か動き始めていました。

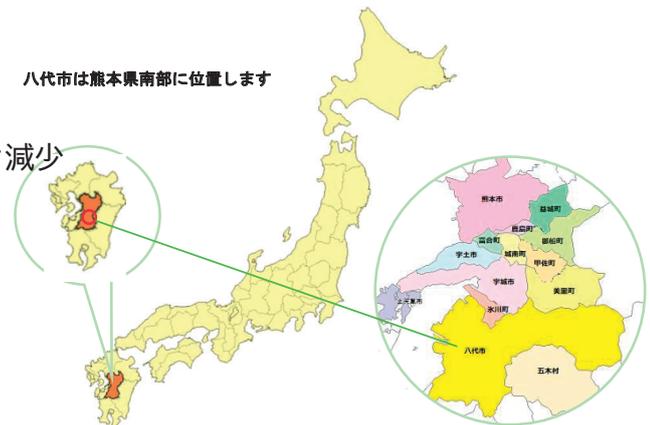
この時の支援活動を通して地元の助産師と出逢い「やつしろ助産師の会」を立ち上げました。今年で帰郷して6年になります。

2018年3月「出産ケア政策会議」に恋焦がれ、参議院議員会館での報告会に馳せ参じた後、第3期から入会をしました。この度これまでの活動の報告の機会をいただきましたので、ここにご報告いたします。

### 1. 八代市の概要

- 人口:12万2千人 R2.10月現在  
(県下では熊本市の73万8千人に次いで多い)
- 出生数:784人 2015年に1000人を下回り年々減少
- 畳表の原材料である「い草」栽培日本一の聖地です

八代市は熊本県南部に位置します



### 2. 熊本県・八代市のお産の現状

- 県内にお産を扱う開業助産師は2人  
(有床助産院1 自宅出産専門の助産院1)
- 八代市に病院(1) 産科医院・クリニック(3) この5年間で2つの産科医院が閉鎖
- 八代市の開業助産院は母乳相談室助産院が1件だけでしたが、現在は4件  
ただし分娩を扱う助産院はありません

### 3. これまでの活動実績と内容

#### 🌱 活動実績 🌱

2017年~2019年「市民と市長のテーマトーク懇談会」
2019年 産後ケア事業「訪問型」を受託
市議会議員と「子育ていろいろ井戸端会議」開催
K産婦人科医院で「マタニティーヨガ教室」を始める
2020年 Fさんの「産前産後サポート」KKT熊本県民テレビ放映
令和7月豪雨 人吉医療センター「災害派遣ボランティア活動」
熊本県助産師会「やつしろ支部」会員5名で発足
まちの助産師の「プレパママ講座」「安産クラス」始める
2020年6月~「My助産師デー」～あなたのそばに助産師はいます～
母乳相談・育児相談・ベビーマッサージ・ヨガ・整体・ZOOMでおしゃべりママサロン

活動実績の主な内容をお話します。

市で産後ケア事業が始まる(熊本県内で天草市に次いで2番目)ことを機に、2017年から3年間、「市民と市長のテーマトーク懇談会」に応募し、妊娠中や子育て中の女性と助産師とで、市長や健康推進課・こども未来課など母子保健行政の関係部署の方々と懇談会を開催。女性の生の声を届けてきました。

2020年、「女性を中心とした産前産後の切れ目のないケア My助産師制度」をテーマに懇談会を予定していましたが、コロナ禍で中止となり次年度に持ち越しとなりました。

2019年10月から産後ケア事業がスタート。訪問型の受託助産院になりましたが、なかなか訪問依頼が来ません。必要としている女性はあるのにどうしてなんだろう～助産師は必要ないのかと苛立ちと疑問を感じ、M市議会議員(28人中唯一の女性議員)に相談。市議会の一般質問で地域の助産師の存在を高く評価して下さって、産後ケアの必要性を力強く訴えていただきました。行政側と助産師とがしっかりと話し合い、母子に寄り添うことを提言していただきました。また後日その女性議員を囲んで、育児中のお母さんと「子育ていろいろ井戸端会議」を開催し、子育て中の女性の今困っていることや要望など生の声を聞いてもらうこともできました。

2019年秋～K産婦人科で「まちの助産師のマタニティーヨガ教室」を始めました。コロナ感染対策予防のため現在は中止となっています。

2020年4月3日のお産を控えたFさんから「さとみ先生、助けてください」と涙ながらに相談がありました。コロナで国の緊急事態宣言が発令され、静岡から産後の手伝いに来てもらう予定だった実母が来られなくなった。これからどうしていいのかわからなくて途方にくれた様子でした。助産師二人とサポート体制を整えその日を待っていました。二人の子供が寝たあとから次第に陣痛が強くなり、夜中に駆けつけて夫婦ふたりを見送りしお留守番がかり。朝方に元気な男の子を無事に産出。夫も初めて分娩に立ち会うことができ、一緒に喜びを分かち合いました。

もう一人のお母さんのような気持ちでした。

2020年令和の7月豪雨では、災害発生5日目～被災地の人吉医療センターの産科病棟へ災害派遣ボランティアとして活動をしました。どんな状況なのか、何ができるのか不安一杯でしたが、とにかく妊産婦さんや助産師の力になりたい一心で体が動いていました。

また、我が町にも避難所が開設され緊急対策本部・危機管理課へ駆けつけ、開業助産師として母子支援を申し出をしました。5年前の熊本地震の時には一人で避難所を回っていて心細かったこと、体力が限界になり寝込んでしまったことなどが思い出されます。

今回は仲間の助産師3人と一緒に、心を一つにして安心して笑顔を絶やさずに、体力も温存しながら活動することができました。

またコロナで、市や産科産院のプレパパ講座や母親教室が中止となり「妊婦さんはいったいどうしているのだろう～」「一人で不安を抱えているのではないか」悶々とし、何かできることはないかと模索していたおり、B保育園の副園長先生からうちの「子育て支援センター」をぜひ使って欲しい。妊婦さんや産後の女性が少しでも安心して過ごせるようにと場所を提供していただきました。2020/6月～「My助産師デー」と称し毎週水曜日に助産師三人で活動を始め今日に至っています。

妊娠中から出逢い、産後は赤ちゃんと一緒に遊びにきてくれています。みんなでたわいもないおしゃべりをしたり、悩んでいることや困っていることはみんなに分かち合って帰りは笑顔で帰っていかれます。「あなたのそばに助産師はいます」がキャッチフレーズです。

#### 4. 産科ドクターへの手紙 ～囑託医の扉が開く～

2年前、K産婦人科医師へお手紙を書きました。

ご夫婦で医院の3代目を継がれることとなり、新築リニューアルされました。母が私をこの医院で生み、私も娘をここで産んだことや「八代の母子の未来のことなど、ぜひお話お聞きしたい」といった内容をつらつらとしたためました。仲間の助産師と連れ立って、妊産婦さんのことやお産の現状、産後ケア「宿泊型」をどのように考えておられるかなど話を伺うことができました。

それから1年経った頃、囑託医の願いをしたところ、「いいよ」との返事をいただきました。ただし自宅出産には抵抗があり、反対であること。オープンシステムなら考えてもいいとのことのお返事でした。あっけなくお産の扉が開いた瞬間でした。天にも舞う心地とはこのこと。同席していた助産師も言葉もなくしばらく沈黙が続いたように覚えています。まずは病院の流れを見てもらうために、1週間に半日勤務してみてもどうか。産後健診をしながら地域の女性と繋がりを作ってみてもどうか。と話をいただき、雇用契約を結びました。お産の扉を開きたかったし、とにかく話を前に進めたかったので、勇気を出して働いてみる決意をしました。しかし実際は、苦い思いを経験することになったのです。病院勤務は約20年ぶりで、外来では妊産婦さんとは初めましての一期一会です。もう少し丁寧に妊産婦さんと話をしたい。外来業務の流れの中で、次第に違和感を感じていたある日、私の言動により妊産婦さんが不安になられたことがありました。そこに居ることが辛くなってしまって身動きできなくなって辞めることにしました。完全に自分を見失っていました。今思うと囑託医の契約をしなければとひとりで焦り抱えてしまい、誰にも相談できなかったことが悔やまれます。

雇用契約を結ぶのであれば、内容と条件を十分に検討した上で、医師とスタッフの方との話し合いを持ち、理解と協力を得る必要があったでしょうし、初めから雇用という形をとらない選択もあったことでしょう。苦しくなったり、辛くなったとき、そばにいる誰かに話を聞いてもらうこと。「助けて」ということをいつも女性に伝えている私なのに。正直まだまだ心の整理がついていません。

夢を語り合うときはなんでも話せて、現実になった途端になぜか力が入ってしまい、身も心も鎧のように硬くなっていました。周りの人も傷つけてしまった自分が許せないし、取り返しがつかないことをしてしまったのではないかと。しばらく悔やんで自分を責める日々が続きました。こんな失敗談をどう書こうかと随分と悩みましたが、ありのままを精一杯言葉にしてみました。これを読んでくださる皆さんと一緒に喜んでもらえて、笑顔の報告をする予定のはずでしたが……

その後、K産科医院とは My 助産師デーで開催している「プレパパ講座」「安産クラス」を妊産婦さんに紹介してもらったりしながら、お付き合いは続いています。中止になっているマタニティーヨガ教室の再開を心待ちにしているところです。

#### 5. 自分自身を掘りおこし深く知る

2020年12月から My 助産師育成プログラムを受講しました。まっさらな気持ちで自分と丁寧に向き合う、とても深い学びの時間をいただきました。これまでの助産師人生で経験したことや、その時抱いた感情がぐるぐると蘇ってくることもしばしばありました。その全てが愛おしく思えて、何一つ無駄なことはなかったから今がある。たくさんの気づきと宝物をいただきました。プログラムの中ではグループがあり、時間を忘れて遅くまで語り合ったこともありました。優しさに包まれていて安心して語り合える場であり何も飾らないそのままの自分でいられました。ひとりひとりフィールドは違っても、自分の居場所でできることを見つけて花を咲かそう～と前向きな気持ちになれました。この世界の全ての人を大切にしたいほどの愛と、自分自身も大切にしたいという素直な思いが溢れ出していました。

自分の気持ちに正直になって諦めないで生きていきたいと心に誓っていました。

2019年4月 鹿児島大学で、カレン・ギリランドさんの講演を聴きました。  
「女性は助産師を必要とし、助産師は女性を必要とする」カレンさんのこの言葉がずっと心の中に棲みついています。生涯の私のビジョンです。

🌱 これから私にできることを考え続けよう 🌱

- ・ 「妊産婦さん・女性の声」を市政へ届ける
- ・ 県助産師会へ「My 助産師制度」のロビー活動をする
- ・ 「助産とは」を問い、自分の「助産観・助産哲学」を育てる

終わりに

この数年、いろいろなことが起こり様々な経験をしました。失敗もありましたが、その分自分を深く知ることになりました。一人の人間として、女性として、何より助産師として成長したい思いは変わりません。たくさんの仲間がそばに居てくれて、見守ってくれていたことにも気づくことが出来ました。人はひとりでは生きてはいけないし、誰かの支えが必要です。今、目の前にある道を大切にしていよいよに勇気を持って生きていきたい。

これからも、My 助産師制度(LMC 制度)実現のために、自分なりの My 助産師への挑戦は続きます。自分なりの旗をあげるにチャレンジしていこうと思います。



初代 やつしろ助産師の会 メンバー

# 3章 これからに向けて

## 今後の課題

2020年度(第4期)に開催した「My助産師育成プログラム」研修会において、11名の母親によるポジティブな出産体験談を聴く機会を設けました。この出産体験談セッションは、WHOが推奨する「ポジティブな出産体験のための分娩期ケア」の重要性、そして継続ケアの重要性を研修生に理解してもらうためのものでしたが、このセッションから私たちは今後の活動の方向性に関わる大きな気づきを得ることができました。

それは、助産師の不安や助産師としての覚悟のなさが、たとえ助産師がそれを言葉にしなかったとしても、妊産婦に伝わり、それが妊産婦の心理に影響しているということです。つまり、助産師が強い不安を持っていれば妊産婦も強い不安を持つようになり、助産師が強い覚悟を持っていれば妊産婦も強い覚悟を持つようになるということです。そして、不安が少なく強い覚悟を持って臨んだ出産は、ポジティブな体験となることも出産体験談セッションからわかりました。

では、どうすれば助産師が強い不安を持つことなく強い覚悟を持つことができるのでしょうか。日本の病院や診療所といった医療施設では、妊産婦は合併症などの有無にかかわらずハイリスクとして扱われます。そして、助産師は看護師として働くことを期待されます。したがって、医療施設に所属する勤務助産師にとって、すべての妊産婦が不安の対象となりやすくなります。また、医療施設では主治医制や交替制勤務などのシステムがあるため、一人の妊産婦の産前・出産・産後にわたるすべての助産ケアを一人の助産師が責任をもって行う機会がなく、助産師が強い覚悟を持ちにくい状況があります(この点は規模の大きな助産院でも同様でしょう)。

このことを裏付ける可能性のあるデータを、私たちが実施した「子育てアンケート」調査から得ることができました。具体的には、継続ケアを受けた産婦のうち、開業助産師によるケアを受けた産婦は、勤務助産師によるケアを受けた産婦よりも、出産直後に「また産みたい」と思えるようなポジティブな出産体験を得やすく、産後うつ病リスクや育児不安が低い、という結果でした(本報告書 p.25参照)。

そこで出産ケア政策会議としては、今後、LMC助産師を「医療施設や助産所に雇用されるのではなく、連携はするが医療施設や助産所からは独立し、一人の妊産婦の産前・出産・産後にわたるすべての助産ケアについて責任を持つ助産師」とし、すべての妊産婦にLMC助産師のケアを保証するLMC制度の実現を目指していきます。

今後の課題として、以下の3つが挙げられます。

### 1) LMC助産師を支えるための助産師団体の機能強化

個々のLMC助産師が医療施設や自治体と契約するのではなく、助産師団体が契約するなど、個々の助産師が独立したことで不利にならないよう支える仕組みを助産師団体に求める。

### 2) LMC助産師としての働き方モデルの紹介と推進

LMC助産師としての新しい働き方を実践している助産師を紹介・支援し、実践者を増やす。

国会議員・地方議員・地方公共団体の長などに、国や自治体のモデル事業となるよう働きかける。

### 3) LMC助産師の育成

将来的に医療施設や助産所から独立してLMC助産師として働くことを前提とした研修会を開催する。

このような課題を踏まえながら、すべての妊産婦がポジティブな出産体験を得ることができるよう、LMC制度の実現に向けて活動を行っていきます。

## メンバーからのメッセージ

LMC制度実現のために『①今取り組んでいること』または『②来期取り組みたいこと』について、正会員のメンバーから一言メッセージをもらいました。

### 助産師会員

#### 助産師以外の会員



① LMC制度って何？という質問があったら、いろんなところで説明ができるように仕組みを作りたい。  
(イギリス/西川)

① LMCの制度や、妊娠～産後のニーズの現状について知ることなど、まずは学ぶことから始めていきます。(京都府/松下)

② 今期は途中から参加させていただきました。来期も可能な限り会議に出席します。地域での“お産を語る会”引き続き開催(コロナ対策徹底とリモート開催にもチャレンジ)。(京都府/徳廣)

② 妊娠中から継続して妊婦さんと関わること。LMC制度を、女性や助産師、市議会議員へ心を込めて伝えること♪(熊本県/橋本 さとみ)

① 自分自身がLMCになれるように、まずは友人にLMCとしてできるサポート・ケアを実践しています。(沖縄県/登川)

② 地域の助産師さんたちとつながって何か一緒にできないか探っていきたくと思っています。(山梨県/大野)

① お産ラボの活動を通して、自分の体験をシェアして、女性や家族に継続ケアの必要性を周知していきます！(静岡県/平田)

① My助産師育成プログラムの実践編で、まある助産院にて実習中です。(大阪府/大町 真由子)

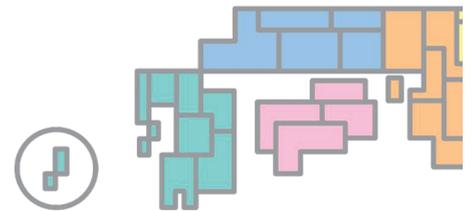
① 保健福祉センターに連携を要望。LMC制度の認知と導入のための会議を5月より開始。個人的には、開業に向けて準備中。(大阪府/太田)

② 出産ケア政策会議(LMC制度)を身近な助産師と行政にアピールする。→ 地元でのLMC周知と、仲間を増やす。(三重県/中谷)

① 当会メンバーの活動に刺激され、自身の働き方も地域にシフトしていく準備を始めたいと考えています。(和歌山県/宮本)

② 2021年から地元の助産師さんとの関わりが出てきたので、そちらとの情報交換をしつつ、市側の方向性や思いを見定め、市民としての要望とその中で自分がどう動けるかについて具体的に示していきます。(滋賀府/田中)

① 女性が出産に向けて主体的に臨めるよう、助産師と繋がる場を提供していきます。(京都府/中野)



① 新卒助産師の助産院での1年間インターン制度を始めて4年目に突入、「10人でOG会」を目標に継続します。(岐阜県/赤塚庸子)

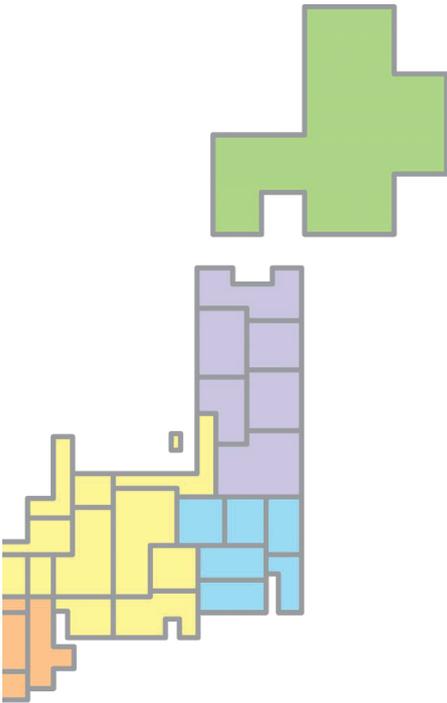
① LMC助産師として、現在働いているクリニックと助産院で妊娠～産後までの継続ケアを実践しています。(岐阜県/女性)

① 職場(産院と助産院)のオープンシステムでLMCを実践し、他の助産師に継続の良さをアピールしています。(岐阜県/中村 暁子)

① 地域で助産師は、なくてはならない存在であるという認識が浸透するまで産前産後ケアをがんばる。(岐阜県/田嶋)

① 地域の助産師同士が心地よい関係性を築ける場を作っています。月1オンライン茶話会が定着しそうです。(滋賀県/中井)

①北海道でLMC制度を普及しようと、数名のメンバーでオンライン勉強会や交流会を行っております。  
(北海道/伊藤 綾)



②「継続ケアを実践して面白いと感じる助産師仲間を増やす」⇒「伝える」「一緒に在る」(山梨県/松浦 照子)

②開業助産師による病院での継続ケア(妊娠、出産、産後)の実現(静岡県/草野恵子)

②助産院独自開催の”産後かかりつけ助産師健診”に若手の助産師を巻き込み、地域活動の面白さや、産前からお産(分娩取り扱い)に至るまでの関係性の築き方を体感していただく。(愛知県/鈴木知佳)

①看護学教育・研究に従事しています。未来の助産師学生とはゼミナールでさらに学びを深め研究しています。(愛知県/小島)

②お産開業助産師として主に勤務助産師による継続ケアの学び場として関わる。既にオファーあり。  
(埼玉県/瀧田)

①WEBチームで見やすく活用しやすいHP制作サポートをしています。LMC助産師の認知のため頑張ります(千葉県/やまがたてるえ)

②私は助産師7年目として、どのような働き方があるか模索する中、6年半勤めていた総合病院を夏で退職し、助産院で長期研修を受けさせていただく予定です。そこで、助産師としての関り、継続ケアについて学べることを心からうれしく思っており、楽しみにしています。それがLMC制度実現のために取り組むこと、ともいえるかもしれませんが、それが目的なのではなく、それは結果としてついてくる可能性がある、という程度です。自分にとって大事なのは、まずは自分が生き生きと楽しく充実して働けること、よりよいケアができること、それが結果LMC制度なのかもしれません。(千葉県/いとうしほ)

①引っ越してきて一年たつので、まずは地元の助産師会に入会して、つながり作りをしています。(東京都/大木)

②今年度もカタチとなる活動ができなかった。しかし、近隣助産師からなる助産師会のメンバーとなり、横のつながりができた。また、市の産後ケアのメンバーに登録をした。自分が思うような活動がなかなかできないが、他メンバーの活躍を参考に少しずつ始めていきたい。(神奈川県/花鳥賊)

②男性が就ける、助産師に最も近い専門職は、看護師です。母親、父親、助産師、男性看護師の思いを国へ！(千葉県/古山 陽一)

②地域でお母さん、助産師さん、議員さんなどとの人脈を作る！継続ケアを実践している現場を見に行く！(東京都/和田)

①継続ケアがあるお産の話と、現状なかなか実現しにくい背景を、妊娠前の方にお伝えする♪(神奈川県/吉田)

# 4章 データセクション

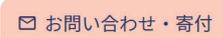
## 本団体の情報

### 出産ケア政策会議とは

妊娠出産の当事者である女性とケアの提供者である助産師が中心となり、活動に賛同する方々とともに、出産ケアに関わる政策や制度、法律を見直し、女性のニーズに沿った政策および制度(LMC 制度)への転換を目指した活動を行っている団体です。

### 正会員・賛助会員の募集

本団体では、本団体の目的に沿って活動する「正会員」と、本団体の活動を賛助する「賛助会員」を随時募集しています。本団体への入会を希望される方は、会員規則をご確認の上、本団体 Web サイト <https://mamanone.jp> 上の  よりお手続きをお願いいたします。

ご不明な点は、同 Web サイト 上の  にあるお問い合わせフォームよりご連絡ください。

第5期の年会費（会員規則 <https://mamanone.sakura.ne.jp/kaiinkisoku2020.pdf>）

会員の種別	正会員			賛助会員	
	助産師	助産師以外	学生	個人	法人
入会金	1,000 円	500 円	なし	なし	なし
年会費	20,000 円	5,000 円	2,000 円	一口 3,000 円	一口 10,000 円

### 寄付のお願い

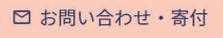
本団体のプロジェクトを持続的に展開するために、皆様からのご支援をお願いいたします。

- ① ゆうちょ口座からのお振込み(ゆうちょ ATM・窓口・ダイレクト)
- ② ゆうちょ銀行または郵便局から現金でのお振込(ゆうちょ窓口のみ)

記号－番号 14340-88093251  
口座名義 シュツサンケアセイサクカイギ

- ③ 他金融機関からのお振込(他金融機関の ATM・窓口・ダイレクト)

銀行名 ゆうちょ銀行  
支店名 四三八(読み:ヨンサンハチ、店番:438)  
口座科目 普通預金  
口座番号 8809325  
口座名義 シュツサンケアセイサクカイギ

お振込後、御礼をお伝えしたいので、お手数ですが本団体 Web サイト上の  にあるお問い合わせフォームよりご連絡をお願いいたします。

## 代表紹介

### 日隈 ふみ子 (ひのくま ふみこ)

短大や大学での母性看護学、短大助産専攻科や2か所の大学院での助産教育に従事した後、2020年3月に長い教員生活を退きました。1977年当時、看護系短大も少数だった頃に、母性看護学助手として教育をスタート。その間のナイチンゲール思想や女性解放運動の一環で自然出産を求めている女性たちとの出会いは大きいものでした。その後、自身の助産院での出産体験で開業助産師の持つ智慧と助産術に触れたことが、助産学や看護学教育の大きな根つことになりました。2004年以降、産む女性の意思が軽んじられている病院出産への疑念から、「助産とは?」「本来の出産とは?」「助産師の役割とは?」を追求すべく2年に1回の「お産カンファレンス」を開催。2016年、ニュージーランドの助産に関する教育やシステムに詳しい古宇田さん、ドーリングさんとの勉強会から現在に至っています。

### 古宇田 千恵 (こうた ちえ)

2010年に日本妊産婦支援協議会りんごの木を創設し、代表を務めています。母親の立場から、バーストラウマ劇の上演や模擬産婦の提供などを行い、医療関係者や学生、一般市民の方に出産体験の大切さを伝えています。2012年にりんごの木の「お産のワークショップ」が一般社団法人生命保険協会から子育て家庭支援活動として助成を受けました。2008年から1年間ニュージーランドに滞在し、1980~90年代のニュージーランド助産改革運動を牽引した助産師や女性を取材した経験が現在の活動の源になっています。ニュージーランドの助産改革を紹介する記事を『助産雑誌』(医学書院)に執筆しました(「ニュージーランドの助産改革運動から学んだ5つのステップ」2015年8月号、「ジョン・ドンリー『助産師か、さもなくばモアか?』スピーチ全訳」2018年1・2月号)。

### ドーリング 景子 (ドーリング けいこ)

助産師として、病院や助産所、地域での活動、タンザニアやインドネシアでの国際救援に従事したのち、ニュージーランドで、女性と助産師の関係等について研究を行い修士・博士学位を修めました。カナダとニュージーランドで3児の母となり、両国でみた自律した助産師、ニュージーランドで自ら体験した女性中心の周産期ケアシステムに魅せられ、日本にある助産ケアを生かす日本独自の助産システムや助産師の自律にむけて活動を行ってきました。現在は、大学教員として、助産・母性看護教育に携わっています。2011年『ペリネイタルケア』にニュージーランドの助産について1年間連載し、2014年よりFacebook「お産と助産」を主宰しています。

## Information

WHO recommendations : intrapartum care for a positive childbirth experience

『WHO 推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』

発行:2021年3月1日、訳者:分娩期ケアガイドライン翻訳チーム、出版社:医学書院

出産ケア政策会議共同代表の3人が、分娩期ケアガイドライン翻訳チームメンバーとして参画し、「訳者まえがき」の執筆も担いました。



## 編集後記

### 中谷 三佳

編集の達人が一緒だから安心してねとお声がけいただき、この度、編集に携わらせていただきました。このように貴重な機会を得て大変感謝しております。出産ケア政策会議との出会いは第1期になります。子ども4人を助産所出産した自らの経験を通して、妊娠中から産後まで継続した助産師と関わりがある安心した自分らしい出産体験を、他の皆様にも経験してほしいと考えていました。しかし、周産期母子医療センター勤務では、妊娠中から産後への継続した関わりはできていませんでした。そのような折、目に留まったのが出産ケア政策会議への活動案内でした。

第4期には、My助産師育成プログラムが開始されました。(第5期よりMy助産師はLMC助産師へと名称改変)。プログラムの内容はLMC助産師からケアを受けた女性たちとLMC助産師たちが話し合いを重ねた上で、考案されました。特に、当事者から「出産体験談」を聞くというプログラムは、女性が妊娠出産時、自分らしさを最大限発揮するためにはLMC助産師が必要であり、女性と歩みながらLMC助産師も成長していく機会となるなど多くを感じ、考える特色ある内容でした。現在、本研修受講後、LMC実践者である助産師のもとで継続ケアを実践し、LMC助産師を目指している助産師が複数います。また、第1期で一緒した助産師の方々が、LMC助産師となり活動報告をしていることから、出産ケア政策会議は、会員自ら行動を起こしていく会であることを実感しております。まだ実践研修へ参加できていませんが、仲間の活動を知ることで励まされ、パワーをもらっています。

活動報告書作成に当たり、会員による貴重な実践報告であるため「枚数制限は設けず伝えたいことを書いていただこう」と編集委員2人で相談しました。そのため、このように読み応えある内容となりました。LMC助産師のケアを受けた会員、支援者である会員、LMC助産師会員の皆様からお送りいただいた原稿が1冊にまとめ、お読みくださる皆様がどのような思いをもってくださるのかワクワクしております。最後に、1人でも多くの皆様に活動報告書をお読みいただき、LMC制度の実現について考えていただく機会となりますよう祈念しております。

### 和田 奈央

2020年9月に入会したばかりですが、「出産ケア政策会議のことをもっと知りたい!」との思いから、編集委員を務めさせていただきました。助産師を目指す子育て中の看護学生です。

入会以来、今の私がLMC制度実現やお母さんたちのためにできることは何なのか、ずっと考えてきました。出産ケア政策会議では、各々のバックグラウンドを活かしながら、ユニークな活動に取り組んでいるメンバーがたくさんいます。そんな皆さんの活動について、もっと詳しく知りたいと思い、たくさんの方に原稿依頼のお声をかけさせていただきました。その結果、このような盛りだくさんの活動報告書に仕上がりました。皆さんの活動報告を読み、「こんな活動があるんだ、こんなこともできるんだ」とたくさんの発見があり、大いに刺激をいただきました。執筆にご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。この活動報告書を読んでくださった皆さまの心の中にも、何らかの気付きや共感が芽生えてくれたとしたら、編集委員として大変嬉しく思います。

表紙のイラストは、お産がつないでくれたご縁で作品を拝見し、温かく優しい画風に一目ぼれをした富岡美智子さんに依頼させていただきました。この活動報告書のために思いを込めて描いてくださった作品です。素敵な作品を寄せていただきましたこと、心より御礼申し上げます。

表紙イラスト・富岡 美智子

『お母さんに会いたいよー』と願っている全ての赤ちゃんの魂が、  
無事お母さんの胸に抱かれますように…との思いを込めました。  
そのためには、全ての女性たちが、本来の輝かしい自分が目覚める  
『幸せなお産』を選択できるということを知ることから。」

## 出産ケア政策会議 活動報告書 2020年度 - 第4期 -

---

団体名 出産ケア政策会議  
所在地 兵庫県川辺郡猪名川町  
発行 2022年1月  
E-mail info@mamanone.jp



Web サイト

<https://mamanone.jp/>

リニューアル



Facebook

<https://www.facebook.com/myjosanshi>



Instagram

[https://www.instagram.com/mamanone\\_mymidwife/](https://www.instagram.com/mamanone_mymidwife/)



Twitter

[https://twitter.com/mamanone\\_jp](https://twitter.com/mamanone_jp)

